每月一回

十五日發行

家庭雜誌

重要目次

第百拾參號

大日本女學會

會員募集廣告

總裁小松宮妃殿下　副總裁鍋島侯爵夫人

◎本會賛成員は有栖川宮大妃殿下　華頂宮妃殿下を始め奉り貴婦人方八十八名

趣旨 本會の趣旨は女子教育の普及發達を圖らむがため女學の講義録を發行し入學すべき女學校の設けなき土地に住める若くは父母のもとを離れ難き事情ある者をして居ながらに通信教授を受けしむるに在り其講義は極めて平易懇到を旨とし實踐の用に應じ輕佻の風を避け以て賢良貞淑の品性を涵養せむことを期す◎本會は明治廿八年の創立にして三千の會員已に第一回の講修を終りたれば今や新に學科を増設し紙面を刷新し更に第二回講修期を開き新に會員を募集す志ある淑女達とく入會あれかし何時入會あるも第一卷より送本差支なし◎◎本會講義録は女學講義と稱し畏くも 皇后陛下叡覽を給ひ特に大御歌下賜の光榮を辱うす一卷の紙數菊判二百頁以上の優美なる大冊子にして毎月廿五日發行す總て講義の質問に答へ歌文習字の添削批評をも爲す◎會費一箇月三十錢束修三十錢◎會則希望者は郵券貳錢添へて申込みあれ

學科及び講師 ◎修身(女子修身談)細川華族女學校長か從來同校に於て演説せられたるものに係る(禮法)佐方女子高等師範學校教諭◎國語(國文)關根學習院教授(作歌)大口御歌所録事(作文文法)今泉城北中學校長◎漢文、土屋華族女學校教授◎歴史(日本歴史萬國歴史)大森文學士◎地理(日本地理萬國地理)喜田文學士(地文)脇水理學士◎理科 物理化學)近藤 工學士(博物)石川理學博士(生理衞生)未定◎家事(家庭教育)三輪田高等女學校講師(家事經濟)後閑女子高等師範學校教諭(家事衞生)三宅醫學博士(小兒衞生)三島醫學士◎割烹、御園華族女學校教員◎小兒心理學、下田文學士◎裁縫、渡邊東京裁縫學校長◎習字、坂華族女學校教授◎音樂、未定◎手藝(活花點茶)田邊東京女學館講師◎史叢、下田華族女學校學監◎小説、逍遙學海紅葉三大家◎お伽譚・漣山人◎詞藻◎質問應答◎雜録◎雜報

第三卷既に發行せり

東京市麹町區土手三番町二十八番地　**大日本女學會**

弊舗製劑克快丸大方各位御懇篤なる御引立を蒙り益々盛大に趣奉感謝候
從て今般順天堂合資會社設置仕候に付卸賣一切の業務は同會社に於て取扱候間倍舊の御用命被仰下度候敬白

克快丸本舗…………順天堂岡田錄次郎

りうまち根切發明五年十年長病二劑服せば全快す



半劑に効なければ決して服すべからず
○半劑三十錢○二劑金一圓○一劑五十錢○四劑金二圓

東京淺草なみ木町 賣藥卸商 順天堂合資會社

大坂市高麗橋筋松屋町通南へ入 順天堂合資會社大坂支店

奇應丸

定價○瓶入九十錢○大包廿錢○中包十錢○小包五錢

●主治効能●

御小兒衆の虫のやまい○五かんきやうふう○胸いたみ○はら下り○しやくつかへ○船車のよい○酒の二日よい○はしか○ほうそ○産前産後はよろしからず

◎効驗の顯著にして而かも賣價の低廉なるは普く諸君の知らるゝ所願くは御試用の上倍々御高評を賜らん事を伏して願上候

東京日本橋通一丁目（電話本局四百七十五番）

白木屋

大村彦太郎謹製

特約店

東京市神田區鍛冶町 大木合名會社
東京市上槇町中通 安川榮次郎
東京市銀座一丁目 佐々木玄兵衛
大阪市東區道修町 賣藥卸賣會社
其他全國の賣藥店に差出し有之候

塚越芳太郎著

熊澤蕃山

定價金八十錢
郵税金十錢
本月中旬
製本出來

豪才を以て一世を睥睨したる物徂徠をして、人材には即ち蕃山、學問には即ち仁齋と曰はしめ、又仁齋の道德、蕃山の英才、余の學術を合して一となす、即ち聖人と謂ふべしと曰はしめたものは、實に彼蕃山に非ずや。江戸三百年を貫流したる反面思潮の源頭に立ち、經世の才、濟民の畧、滔々たる儒學者流中に於て別に一頭角を擢でたる者は實に彼蕃山に非ずや蕃山の蕃山たる所以は、江戸政府の大政策たる鎖國弱諸侯主義の流弊に對して、之が變通の策を畫したるに在り。特に私德公德の最も尊ふべきあり、出處進退の仰て師とすべきあり 其生涯は永く士人の標式たるに堪ゆ。若し夫れ時代の變通を要すべき點よりして之を觀ん乎、今の時は多少蕃山の時の如き也。今日の學者政治家の世に處するを見るに、又彼蕃山の如きものを思はざる能はず。然らば即ち此の書の今日に出る、必ずしも時事の萬一に補なきにしもあらざる可し。

發行所 東京市京橋區日吉町 民友社

大改良 三十年九月一日より

國民新聞

每號八ページ（商況精確）

言責を重んじ正確を主とし事苟も報せず又苟も論せず言ふ所必ず責あり報ずる所必ず實あり。内に於ては公明あり外に對しては禮節あり。品位高尚意思堅確、優に海外に向つて日本を代表するに足るを期す。

定價

一枚	二錢
一ヶ月	四十錢
三ヶ月	一圓十五錢
六ヶ月	二圓廿五錢
一ヶ年	四圓四十錢

地方郵税

一枚	十三厘
一ヶ月	三十九錢
三ヶ月	七十八錢
六ヶ月	一圓五十六錢

廣告料

一行の代價左の如し（但五號活字廿二字詰）

一回	十五錢
二回以上	十四錢
五回以上	十二錢

發行所 東京日吉町 國民新聞社

正岡子規君閲並序　下村爲山君書
高濱虚子君序　上原三川君
河東碧梧桐君序　直野碧玲瓏君　共編

新俳句

印刷中
紙數約三百頁
本月下旬發賣
挿畫四季三十葉入

新日本の生活は、多くの點に於て革新せり。政躰も革新せり。醫術も革新せり。戰術も革新せり。而して最も多く文學美術に於て革新しつゝあり。小說の如き、繪畫の如き、音樂の如き、詩歌の如き、其最も著るしきものに非ずや。

俳句に至ては革新の氣運殊に昭明較著にして、芭蕉を外にし、蕪村を外にしては數百年來、單に遊戲文字、道樂仕事、謎語的、見訓的のものとして、滔々たる天下廢人遊民の占有に歸し、文學上の價値としては何の見るべきもの無りし俳句も、今や全く、文學上高等的、獨立的、不朽的のものとして識認せられ、且製作せられんとするに至れり。而して勃然たる新派革新の氣運は、各々形勝の地に據て東西相呼應し、今や殆んど蜻蜓洲の首尾を震撼し去らんとす。豈亦た盛ならずや。

彼は芭蕉、蕪村を經て、第三期に俳神の金冠を戴かんとしつゝあり、又た戴くべきの詩人なりと、或者をして絕叫せしめたるは、俳句の革新に偉功を奏したる正岡子規子に非ずや。上原三川、直野碧玲瓏二子、聊か斯道に得る所あるを以て、暇餘同好諸子の句を輯め子規子の閲を乞ふ。子規子これを校訂する極めて峻嚴、二萬有餘の俳句、僅に三千餘を存するに至れり。則ち此書、三川、碧玲瓏二子の共編と云ふと雖も、實は子規子の選と謂て可なるに非ずや

而して本書の繪畫に至ては、畫家にして俳句に善き下村爲山(別名牛伴)君の筆に成るものにして、意匠斬新、筆勢超忽、眞に本書の光彩を添ふに足る。

萬葉集は萬葉時代を代表し、古今集は延喜時代を代表す、數百年の舊套陳態を一掃して、明治革新の精粹を蒐集代表する者、夫れ唯本書なる哉。夫唯た本書なる哉。

發行所　京橋區日吉町四番地　民友社

第十二版
一語千金
定價金十錢
郵稅金貳錢

第五版
家庭小訓
定價金十二錢
郵稅金貳錢

第八版
青年と教育
定價金十五錢
郵稅金四錢

第十版
第一靜思餘錄
定價金十五錢
郵稅金四錢

四版
金貨本位はやわかり
定價十錢
郵稅二錢

金貨本位の論の始まると、まつ先きに出版した斯の書、今は第四版を重ねぬ。需要は矢張絶へない。なぜたへない？蓋し金貨本位施行後貨幣にかゝつた研究は色々出て來る、そこへ持て行くと、斯の書は、平易で、面白くて、その名に背かないから!!

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

速記法
自宅獨習生募集
月謝二十錢 二ヶ月卒業
○規則入用者は郵劵二錢を投ずべし
東京下谷區徒士町二丁目三十番地
速記學專修所

徳富猪一郎編纂 久保田米僊畫
誕生日
上製表紙クロース美本
定價一册二十錢郵稅二錢並製（十五錢）品切れ中に付き御注文は上製に限り貴需に應じ申候

卅一年一月
東京日吉町 民友社

家庭雜誌

定價表

一册	（前金）拾錢	（市外郵稅共）拾一錢
六册	五拾七錢	六拾三錢
十二册	壹圓八錢	壹圓二拾錢

廣告料 一行（五號活字廿四字詰）一行八錢

家庭雜誌 毎月一回十五日發兌

本社電話番號本局七十番

發行兼印刷人 吉崎圓吉
編輯人 金子佐平

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治三十一年二月十五日發行
家庭雜誌第百參拾號

目録



小川一眞製

伊太利中古畫

家庭雜誌第百十三號（明治三十一年二月十五日發兌）

社説

行儀作法の事

蘇峰生

誠に馬子にも衣裳と謂へり、併し如何に立派なる衣服を着けたりとて、若し其人か賤しければ、却て不恰好となる可し。世の中の人々か、唯た奇麗に衣飾りさへすれは、人は上品となると思ふは、大ひなる心得違ひぞかし。支那の言葉にては、斯る類ひをは、沐猴にして冠りするとは申すなれ。平らたく云へば、猿が絹帽を被りたると同樣、如何にも其の不釣合の甚だしくして、可笑味を増さしむるに過ぎず。

余は此に就て行儀作法の大切なることを見る。行儀作法とは何ぞや。人々が日常の舉動の上に現はるゝ、總ての仕打なり。家庭にある時も、朋友と交はる時も、公けの場所に臨む時にも、詳かに云へば箸の上げ下ろし、天氣の挨拶、茶を呑むにも、世間話しをするにも、行儀作法は、包むとも、隱くすとも出來ぬものなり。如何に立派なる衣服を着くるも、下品なる行儀作法を打ち消すことは出來ぬものなり。されば行儀作法の心掛は、何人も油斷なきを要す。

孔子は性相ひ近し習へは相ひ遠しと申したりき。そは人は習によりて如何樣にもなることを謂はれたるものにして、氏より育ちとは、此れと同意味ならむ。されば世の親たる人は、其の子供の教育に就ても、能く〳〵行儀作法を教ゆるこそ大切なれ。行儀作法とて、必らずしも丁寧に人に辭儀をなすのみには限らじ、又た小笠原流に、鹿爪らしくやり附くるのみにも限らじ。唯た恭敬なる心をば、恭敬なる仕打に現はす迄のことな

り。言葉遣ひと云ひ、樣子と云ひ、何となく大人らしく、上品に、自然にして作り飾りなき裡にも、自から筋合正しきを謂ふなり。

我邦封建時代には、如何に行儀作法の正しかりしよ。例へば口論をなすにも、殊更らに膝を直ふし容貌を正ふし、言葉靜かに論したるなり。況んや其の長者に對する幼者の作法の如きも、又た上下の差別の如きも、如何に嚴重にありしよ。記者は今日の社會に斯くあれと注文するにあらず。何となれば封建時代に於ては、餘りに行儀作法のみ心懸け、其の弊や虚飾に流れたるとなきにあらず。併し近來社會の有樣を見れば、立派なる紳士淑女とも申さるゝ人々にして、却て下郎下女も愧つるの振舞をなし、別に怪しとせぬ風なきにあらず。如何にも嘆かはしき次第なり。

維新以來風俗の破れたるも大なれども、行儀作法の壞れたる程甚しきものはなし。今や我邦に於ては、世界各國と交際をなすの時節に於て、從來君子國とか、禮義國とかと賞賛せられたる國柄にも似合はず、不行儀不作法、恬として顧りみざるは如何にも心苦しき次第ならずや。

されど行儀作法は、唯だ外形の修飾と思ふは、大ひなる誤りなり。如何に動搖周旋禮節に中るも、若し其の心醜しければ、自から外に現はるゝものぞかし。されは行儀作法の要は、先つ其の心を正ふするより先なるはなし。次には上品なる人を手本として、能く其の擧動に氣を附け、知らず覺えず其の風に化せらるゝ樣ありたし。若しそれ立派なる衣服を着くるが如きは、時と場合とによる、必らずしも是非斯くせよと云ふ程の事にあらず。一家の主婦の如きは、其の小供の手本ともなる可き人なれば、別して其の行儀作法には注意あり度となり。

論説

離婚を減ずるの法

定伯居士

古來、東洋の女敎に、七去の規箴あり。何をか七去といふ。不孝、淫佚、嫉妬、多言、竊盜、不產、惡疾は是れなり。即ち此等の各個は、妻を公然と去り得可かりし所の條件たり。ついでその除外例とも云ふべきは、三不去なり。何をか三不去と云ふ。舅姑の喪を經たる者、娶るの時賤しかりしも、後ち貴うなりたる折の者、受くるの時は、父母の家有りしも、歸さん所無き者は是れなり。この第一者は、既に多少の時日間、所天と協戮しつゝ、舅姑の奉養を遂げたること、宜しく孝養の大義上、酌量を加へ得可しとなし、第二者は、謂はゆる糟糠の妻をば、堂より下す可からずの義にて、內政を整理せし女房の勳功は、以て其の固有せる缺德を償ふに足るとなし、第三者は、去らるゝ女の身の行末を推恕す可き大事となしゝが如し。而して、我が大寶令の戶令にも、明かに（一）妻を棄つるに、須らく七出の狀あるべし（二）妻に七出の狀ありと雖も、三つの不去あり（三）義絕（夫の親戚を殺傷したるを云ふ）淫佚、惡疾の狀ある者、三不去有りと雖も、棄つるを得と見ゆれば、右の德敎は、或る時代に於て、洵に法律の威力を兼有したりしなり。

七去中に不產を加へ、惡疾を加へたる所以は如何。蓋し、斯かる所說は、全く一の孝道より割出されたるに由り、人生の結婚なる者は、本來夫妻自個の爲めにするものにはあらで、祖先に對し、父母に對する所以の必要に出づるのみ。故に直系血統の斷滅せんとするとき、健全なる子女を得べきの望み無きときは、結婚は結婚の効を失亡するに由り、大躰上其の婚姻を取消し

得べしとの、極めて單純なる見解に出でたるなるべし。

吾人、倩ヽ之を按ずるに、右の無子、惡疾等に關する款條の如きは、元來婚儀事前の撰擇注意としては、則ち說き得らるべし。その事後に對する所の款條としては、殘忍刻薄、之より甚だしきものゝあるべき。三不去に於けるも、亦た論ずべきもの多し。抑々斯かる諺語の、今日の時代に適せざるは、猶ほかの「學問は名利の爲めにすまじ」と謂へるが如し。それ人生の教育を要求する所以のものは、各人各個の精神力を發揮して、以て風譽の名譽を博し、純正の利達を遂ぐべき正鵠方便たるが故ならずや。然らざるよりは、無學文盲亦た何の慚づべきことかあらん。果して然れば、爲めにすまじとは、決して表言し得可からざるなり。總して、仙譚的の僻說は、以て今日の時代に通ずべからず。殊に、德教の訓語の如きは、被教育者、若くは後進者をして、其の自感自發に訴へしむるの餘地を存するを要し、社會の將來をも、洞視するの明無きに、餘り人生の奥秘に深入して、委曲の指揮を打込むを厭ふ。七去三不去の義、並に學問の解、皆な先人が、社會及び人生の何者たるを解せずして、强ひて德教を表言せんとしたるに、坐せずんばあらず。

夫れ、新夫妻は、新家庭の由りて起る所なり。新教育の由りて開かるゝ所なり。又た新作業の由りて行はるる所なり。觀じ至れば、社會及び國家の消長盛衰は、一に此の二人の接際の、疎密正邪の如何に職由せずと云ふことなし。故に、之をして、好風儀有らしむるは、社會乃至國家の一大事たらずばあらじ。

然るに、爰に我が近來の風俗中にて、最も悲むべきの現象は、離婚の沙汰の、愈ヽ益ヽ增加する所の事實是れなり。試に東京市に於ける、最近の統計に問へば、結婚數の三毎に、離婚の數は、二を占めりと云ふ。蓋

し東京の住人は、本と各地方より、落ち集まりたるの烏合の衆なれば、人情に薄くして、何事も利害に依りて、擧動するの風あること、鄕土にての如く、世評、名譽を憚るに篤からざること、結婚に關する手續、儀式の極めて容易なること、結婚以後無爲逸居しつゝ、然かも衣食に贅澤すること、恒産有る者少くして、結婚以後、忽ち財計に窮する者の多きこと等は、右の格段なる統計の現はるゝ原因と見て、恐らくは誤り無かるべし。而して、更に最も剴切の推測と信ぜらるゝものの他に一あり。即ち東京住民の結婚は、土俗及び家風の懸隔甚だしき間だに行はるゝ者、最も其の多きに居り、一朝忽ち同棲するも事々物々相互の理想一致せず、爲めに同化し、調和し果せざるが、過半なるべきことなり。さて、斯かる事象にして、東京の一小區域に止まれば、未だ太だ憂ふるに足らざるが如くなるも、今や、男女同權といふことは、滔々たる女子の爲めに誤解せられ、また交通の開け行くと同時に、男女各々撰擇を誤まり、或ひは男女各々節操を失ひ行く所の弊は、歲月と共に加はりつゝあるなり。噫、古より身竿なる語義は、夙に振分髮の乙女等にも、懇に諭さるゝと雖も、永畢と永訖とは、人間終生の大恨事として數へらると雖も、彝倫の壞崩し、國風の墮落しける大勢や、斯くの如し。宜なるかな、泰西諸國の爲めに、我が國俗の指彈せらるゝや。

然からば、之を匡救するの道いかん。謂はゆる民法は、之に多少の効顯あるべきか。否々決して然らざるべし。何となれば、法は、人事の結果を豫測したる所の制裁のみ。誠に消極的の制裁のみ。しかのみならず、法は、吾人の從來明瞭に意志せざりし所の箇條をも、區別、及び制限等の必要上より、一々明確に指示したるを以て、却りて惡意志の決行を幇助するもの多ければなり。故に、世人若し之を誤解して、法條を善惡の唯一標準

と心得ることとあらば、結婚にても、離婚にても、行ふに太だ容易きを感ずることとなるべく、從つて離婚の數は、從前よりも增加することありとも、決して減少すること無きや必せり。法の頼むに足らざるは。以て知るべし。

女の貞德、行はれたるの世にありては、定めて離婚の數少かりしならんとは、讀者諸君も、首肯し給ふ事理なるべし。乃ち、之を古今東西の歷史及び風俗に徵するに、如左の場合には、女の貞操なべて顯著なりしを知る。

(一)　女子の權勢、男子と同等以上なる場合。
(二)　二人の戀愛、極めて濃厚なる場合。
(三)　一夫一婦の制度たる場合。
(四)　階級制度の嚴重なる場合。
(五)　親權の最も强烈なる場合。
(六)　婚期律の宜しきを得たる場合。
(七)　儀式の鄭重に行はるゝ場合。
(八)　離婚を容易にせしめざる法律ある場合。
(九)　姦淫罪に對する刑律の重き場合。

蓋し、本邦の上代、希臘の王政時代、及び中世の日耳曼等に在りし風俗よりは、右の(一)若くは(二)の概念を給せられ、我が藤原時代並に東西の封建時代に在りて、一夫多妻の事實ありたるために、著しく夫妾を離間せしめたるその結果は、以て逆觀上(三)を知らしめ、德川時代、並に古羅馬にありし門地制度は、明かに(四)の知識を授け、又た(五)をも示し、越王の生々策(即ち少者は老婦を娶るなく、老者は少者を娶るなく、女十七にして嫁せず、男二十にして娶らざれば父母罰あり)といふものは(六)の一端として見る可く、羅馬の神裁結婚式、乃至我が當今の華族婚姻令等は、(七)を徵し得られ、露國の離婚法は、必ず法庭の裁決を經るを要し、而して、敗者をして、生涯その第二婚を爲す

を豪したるが如き、英國にても、同じく離婚は、必ず法廷の裁決を經べく、敗者は、莫大の訴訟費を擔がざるを得ざるが如き、共に(八)の實證を給し、德川百個條中の密通お仕置、並にソロンの强和姦に對する法典等は、(九)の事實を表明せり。之を要するに、西洋諸國に於て、離婚の少數なるものは、先づ以て左の三大原因に歸し得可きを見る。

(一) 宗敎の制裁、及びその信念。

(二) 女子が男子に敬重さるゝ慣習。

(三) 法律の制裁、及び訴訟上、金力を要すること。

飜りて、之を本邦の實狀と照さばいかん。即ち、我が國には、人事を制裁する所の宗敎もなく、露英諸國に於けるが如き、嚴重なる法律を取るにもあらず。加ふるに、女性を劣等姓視して、敎示せる儒道、佛敎の遺說は、猶ほ依然として當代人の思想、行爲の本となれり。三つの者、既に斯くの如し。若し何のなす無くして、離婚數の減ぜんことを望まんか。是れ、所謂「百年河淸を竢つ」といふものなり。

然らば、矯正の策は、之をいづこにか求めん。曰く、吾人は、それたゞ敎育の任務たるを知るのみ。勿論、敎育の力のみにては、充分の効を奏し難かるべしと雖も、本邦にては、特に敎育が、爰に努力せざる可からざること、實に上來の所述にて明かならん。蓋し英國邊にても、姓育の忽諸に附す可からざる、その論潮の汪洋たるは、最近の事實なりと謂へば、敎育當路の志士、宜しく一慣すべき所たるべし。

吾人は、以上論斷の餘に於いて、一言の已む能はざるものは、結婚前に於ける、男女相互の豫測注意のみ。蓋し、常識ある人たる以上は、何人とても、必ずや離婚が人生の大不幸たるを感知せざるは無けん。而してその不幸なる離婚の止む能はざるに至る所以、遠くは、相互の敎育の宜しからざりしを自覺し得べく、同時に、

事の近因の概ねその結婚已前の思慮に缺點多かりしを自覺し得ん。そも結婚の完全は、實にその撰擇の完全なるに、由來せざること無ければ、吾人爲めに左記十二の標的を立て試みたり。庶幾くは、幾分の參考たらん。

第一　年齡

我が民法は、男子滿十七歲、女子滿十五歲を以て、最早結婚期とせんとするもの丶如し。然るに、男女共に、婚を生殖器の成熟後にするは、頗る必要なることなれば、男女共、早くとも廿才以後にしたらん方宜しかるべし。而して、夫妻の年齡の差は、成るべく少きを宜しとす。若し多きに過ぐれば、經驗乃至理想の軒輊に堪へざらん。

第二　體質

生理的の原因は、先づ各人の感應、及び情緒の由來する所にして、終にその天賦的才幹を作成する所以なり。而して、その富血質なる歡喜性、神經質なる憂悶性、膽液質なる激昂性、粘液質なる緩慢性の種別は、相撲相配の好き目安たるべし。若し、是れに頓着せずして、神經質相合はゞ、家庭は常に曇天悽慘の概ありて、萬事に、沈み勝なる可く、緩慢性と緩慢性と相合はゞ、萬の作業振起せざるべきが如く、總べて二人間の調和上を初め、子女の敎育上、生活の作業上等に關する所、決して尠少ならざるべし。而して、體質は、人の個性を作る所の最始の原因たり。

第三　體格

體格には、容姿をも包含せり。容姿の上に於て、美人と見、好男子と斷ずるは、讀者諸君の御任意たるべし。唯だ如何なる體格が、優等の體格なるやと云へば、曰く、體位優等、骨格の構造、胸廓の構成、筋肉の發育、各器官の機能など、總て健全充實し、外觀の全躰有力にして、全身の皮膚稍や茶褐色を帶びて艶麗を極め、

身長は同年齢者十人以上の平均以上にをり、活潑々地の精神色に溢れ、筋肉豐かに、鼻隆く、眼睛は玲瓏にして、その視力完全、口唇は鮮紅、齒牙は堅牢にして整齊し、言語は明晰、聲音は清朗、聽官は聰敏、項肩は共に廣濶、胸圍は身長の半以上、肺氣量は三千左右、腹部少しく扁平にして、四肢各關節はみな十分に發育し、全身の各部擧りて良形なる者は是れなり。明達碩如たる精神は、必ず斯かる身軀中に寓り、而して、斯かる男女の會合は、必ず斯かる身軀の子女を擧ぐ。

第四　習慣

土、俗並に家風の懸隔したるは、同化に難易あるの最大原因たり。故に、彼我の習慣の相違せる所は、少くとも結婚以前に知悉せられざる可からず。本稿者の如きは、禮儀上に關して、約束と上國とに、大差違あるを知らざりしかため、圖らず二人衝突の端を發し、終に永訣の不幸に會したるの一人なり。

第五　門地

古來の階級は、今や將に事實に於て消失せんとす。是れ固より當然の事たり。然れども、一國民の理想にして、未だ歷史といふ者に、格段の尊重を置かるゝ間は、謂はゆる家柄の吟味も、餘りに杜撰なるを得ざる可し。蓋し、己れの自重に害あればなり。

第六　財産

財産は、相互共に愈々多き程、愈々宜しかるべし。財産多ければ、二人共に相愛するの餘裕を得ればなり。然れども、相方の貧富の餘りに懸隔せること、俗に云ふ、提灯と釣鐘の如くなるは宜かしらず。蓋し、その差違は、相互の獨立心を妨げ、又たひがみ心を發し、遂には、心操を損ふの端ともなればなり。

第七　理想

理想の差違は、即ち年齢と教育との差なり。今後の時勢は、必ず人並以上に教育せられたる人物を必須すべ

きは、言ふに及ばず。倘は二人の理想は、成るべく相似寄りたるを必要とせん。

第八　戀愛

二人間の戀愛の如何は、實に同化、若くは調和の如何に拘かる倔强原因なり。それ、容貌に於ては、例へば、圓形の顏の人は、角立ちて見ゆる顏を好み、太り形なる人は、瘦形の人を愛するが如く、男女姓は、常に自己に反したるを撰ぶとは、姓育學之を唱へ、又た柔情に就いて、男女性は、常に敵勢の意味無き所の反對を好むとは、心理學之を說けり。果して、然れば、斯かる逸の豫測も、決して、之を下等心的の事とのみ、一概に思惟す可からず。

第九　能力

爰に能力と云ふものは、世事に關する人の實力、能量を指稱す。人は單に知力の開發したるのみにては、何の役にも立たず。その知力を應用し得べき術力有りてこそ、單に己れの一身のみならず、配偶及び近親族を扶助し得べきなれ。然らざれば、縱ひ富鉅萬の人と相逢ふとも、忽ちにして淸貧に歸せん。

第十　協合

「夫は外に活動し、妻は內に營々たれ」とは、東西一致せる處の訓言なり。而して、男女の相撰むや、能力を初め、個性にても、理想にても、可成一致駢進するを得べきや、否やについて、深き思慮を用ひられざるを得ず。

第十一　儀式

結婚上の儀式は、國風、慣例の存するだけを盡さざるを得ず。この儀式に於て、面倒多かりしならんには、大抵の事に、離婚を忍ばんとすること、人情の常となればなり。

第十二　婚時

婚を結びて後の當分は、双方共に、他に紛擾無き時期

ならざるを得ず。蒼惶忙中には、決して戀愛の生ずる由無ければなり。（完）

史談

西山物語

雨谷一菜庵

菖の根のいと長き日を、都には夏も盛とて、住むに住み難く、故郷にかへりて二日三日が程を過しつ、水戸義公の老後を松風蘿月にまかせて隠れすみ給へりてふ、西山の山莊を訪ふに、莊守る翁ありて、種々の話もいでつるに、其話の面白きまゝ、翁に乞ふて此所に二夜をば明しつ、猶さま〴〵と問ひ出せしに、翁はうるさしとも思はで、つばらに語りける内に、家庭にかゝはりつるものゝみ、書ひつけて此雑誌には出す事とせり。

「西山やいるさの月のはかなくも、しばし宿かる庭の白露」の一首をとゞめ給ひて、此世を見捨て給ひたる常州水戸の城主從三位權中納言源光圀公（謚曰義公世稱西山公）は御幼少の時より十七八にならせらるゝ比までは御實祖母なる養殊院公の方にのみ多くは入らせられたりしが、紀州賴宣卿の公達にも、御同年といふにはあらねど、ふさはしき御友垣かたく結び睦び給ひて、竹馬の遊講學の窓、みな共にし給ひける。

然るにこれも賴宣卿の御娘にて、松姫と申さるゝ姫君同じ御館におはしき、雪の肌磨かねども自ら光澤あり、花の容顔笑まざれども麗はしく、絶世の佳人と人皆申合ひたりける。去れば養殊院公をはじめ御一門の方々、公に此姫君をめあはせ申さんには、これ所謂一雙の美玉、かゝるふさはしき御縁はあるまじとて、さま〴〵に心を砕かれけれども、公には姫と從兄の親あり、同姓は娶るをさくるこれ古の法なり、夫れ武士たるもの

命を捨て性を忍びて節義を全ふするは、後代の名を思ふがゆゑなり、今徒に色欲に溺れて近き類縁を娶り、禽獸を等しく呼ばれんと無念の至ならずや、とて更に心を動かし給ふよなかりしかば、此御氣色を見ては御侍きの女房達も、みなもてあぐみて、養珠院公に斯く告げまゐらせしかば、院にも今は如何にすべきと思ひ煩ふ折節、心きゝたる女房の、兎も角も御年若のよなれば、餘外の見る目を厭ひ給ふが故なるべし、姫をば公に近付まゐらせ、人目おろそかにもてなし給はゞ、終には草木も心あるものを、姫のなよやかなる御姿、美しき御容顔、いかでか公にもすげなくて、過ごし給ふべき、なべての世の若人ならんには、繁き人目をも忍びてなど思ふが常なるに、などいとまめ立ちて申しければ。院にもさこそと覺ぼし給ひ、つぎ／＼の女房にもいひしらせて、夫よりは姫をしげ／＼公の側に侍らし、女房などは夫となく其席をさくるやうしたりけれども、公にはさらに身をつゝしみて男女の禮を守らせらるゝものから、姫の公を戀はせ給ふ御容態の悄からずは思ひ給ひながら、一度も姫に對して御戯言だに申させ給ふ事なかりしより、誰も彼も之を見る人聞く人、公の御志の程を感じまゐらせけるとかや。

去れど公にも木石ならねば、これよりは遥かに後の事なれども、まだ御部屋住のつれ／＼に、忍びて淺からず思召しける女中ありし。何人かこをそねみて、御父頼房公の御耳に入奉りければ、父君御不快に思さるゝの由公傳ひ聞かせ給ひ、今やるかたなく不便の者なりとも、いかで父君の心をも犯しまゐらせてとゞめ置くべけん。去りとて素氣なく暇とらせん事もいかゞとて、近臣牧野與三右衛門孝和を召れ、其母とも談合致し、何方へなりとも彼の女中を疾く縁付けてとらせよとの仰に、孝和母子密に相はかり、彼女中をば孝和が妹分となし、程なく御家士白石助右衛門方に嫁入らせ

けるο 夫より年月經て、父賴房公御他界あり、公の御代とならせ給ひたる折、或日與三右衛門孝和公に謁して、御先代より筋目ある人の妻子共常に奥方に出入し、或は折にふれて御機嫌を伺ひ奉り、御祝儀御能などの時には召出され、又願によりては御目見へ仰付らるゝ事も少からぬに、まげて吾等事も、公をなつかしみまゐらする心の誠を以て、にくからずと覺し給はんには、今人の妻たりとも、御目見へ程の事、いかで苦しかるべきとて助右衛門の妻なる人申され候が、如何取斗らひ申すべきかと餘儀なく詞を盡して請ひまゐらせしに。公にはとくと聞かせられて、扨ても其願尤至極なり、いかにも心を掛けて召使ひし程のものとて、なつかしくも思ひ出づれば、其方より願はずとも目見へ申付くべきなれども、茲に心の儀にまかせ難き仔細あり、第一父の御不快にて暇つかはし候者を、假令御逝去の後なりとも憚なく目見え致さする事不敬なり、第二に今は人の妻となり居る身なり、第三に良人たる者の身分輕くして格式を亂るゝの恐あり。女心の愚痴にて、斯く申し聞けなば、ありし昔は斯程につらき君ならざりきなど打歎かんも計られねど、今は一城の主人たる身の私を以て公をば破り難し、よく／＼詞をつくして道理を申ふくめ候へとて。遂に御目見への沙汰はあらざりけれども、毎年四季折々の衣服其外、御逝去の折までも變る事なく御憫みなされ給ひき。彼の女中良人助右衛門死後は尼となり、法名を妙東と呼びけり。與三右衛門母は清泰院御乳母、牧野と名を呼び、法名は榮讃とゝなへしと。

承應三年甲午四月十四日、公御年廿七歳にして、近衛前關白左大臣信尋公の御女、尋子の君を迎ひて目出度御婚儀ありたる以前、これも公に親しく侍きまゐらせし女中の内に、公の御胤を懷胎せるものありき。然るに公は御兄賴重公を越えて御世繼に立たせ給ひし事を深

く心に愛く愛して、若しやむとなく一度は、封を襲ひて世に立つも直に御兄の子を養ひて、國をも城をも之に讓らざれば、兄弟の義といふべからずと、堅く信じさせ給ひたる折柄の事故。痛く驚かせ給ひ、不便なれども大將にはかへ難し、一日も早く水になし候へと仰せられけるを、女中殊の外なげきて伊藤玄蕃友玄夫婦（妻の名は志保老後法名性善院と稱す老臣三木仁兵二の次女なり）の者に斯くと告げければ、夫婦の者後日の御咎は兎に角、去る事やあるべきとて女中をいたはり、病氣發生の由披露して其宅に申受けつれかへり、密に御誕生をばさせまゐらせけり（御名は兵部後賴常と申させられ、賴重公の養子とならせらる）。玄蕃後之を密に賴重に言上せしかば、賴重公讃州高松へ引取御養育ありけるを、公聞召して御不快に思召されけるが、兵部君十三歳にて初めて上府の節、公と御對面はありしも、御親しみの御樣子は非りしと。

京は女の美しき所なり、此頃の大小名、京よりして多きは七八人、少きも二三人の妾召抱ぬは無かりしに、公は一人も召抱へ給はざりしかば、水戸の御家に限りて此事なきは、如何にも不思議なる事なりと京には噂せしとか。

公常々仰られ給に、御父子召仕への者、分け〳〵になされ候ては、格別其間に隔を生じ、父子の間もかゝる事より惡しくなり行くなりとて、御老後まで人わけはなされざりしと。

以上擧ぐる處を以て見るに、公の色に溺れずして、能く其慾を制し、其情をも押え給ひたるの實を見るに足るべし。人神にあらざるよりは誰か情あり慾なからん、去れど此情と慾と之を制する事、尋常人のなし能ふべき處にあらず、公近侍の士を誡めたるの語あり。平生物に着せざると人間第一の修行なりと

又公在世の折尾州侯の其家臣に語られし一節あり、尤

も能く公が當時の生活をうつせり。
公或時尾州光友卿を御招請あり、御居間にて終日御饗應あり。其翌日尾州の城付菅野谷次郎兵衛水戸の城付岡島藤左衛門幸忠に參會しての物語なり、
昨日主人其許より歸られ候や否や、申聞けらるゝ事候間、家臣早速相詰候樣にとの仰なれば、面々何事の起りしやらん、ヨモ只事にてはあるまじくと怪みながら早速相詰候に、主人申され候は。今日水戸殿へ行候處に、居間にて語らんと申さるゝに就き、居間へ通り候。定めて唐めきたる物數寄共にて、美麗を盡され候なるべし、夫をば見せんとの事にやと推量して席に着きしに。案の外至極麁末なる普請にて、其上狹く、天井並に壁をば故紙にて張られ候、我方より遣はし候文なども見へ申候。扨てこれは餘りわびたるとかなど申候へば、これにて事足り候、天井及壁はゴミを落すまじく、手づから慰みに張り候と申され候、扨て心安きまゝ召仕の女共に常の儘にて給仕致候樣にと申付候とて、女子共を給仕に出され候。其女子共を見るに、容貌の勝れたるは一人もなく、其上皆麁服を着し、我方には末々の女までも、彼の如くなるもの一人もなし、大方其方共の召仕もあれ程にはあらじと思ふなり。斯の如く飽くまで內證の驕を禁じ、色を好まざるの家風、誠に感入たる事なり。此等の趣其方共心得の爲め、申きかせ置きたく、尤も何時にても好き事なれど、物忘する故、忘れざる內に早速申聞かするなり。と申聞けられ候云々。

在世の時にも家庭の生活、當時千石取の旗本位にして、或は夫よりも劣る位なりしと。夏冬折々の衣服も、汚れたるをばそゝがせ、綻びたるをばつくろはせられき、其他押して知るべき事なり。公或時綱條公の室（今出川右府藤原公規公の女）季姬君京都より御下りなされ候砌、小石川後樂園の內に池あり、其側に水をひかせ、

田をしつらへ、苗代よりはじめて、苗草を植え、雜草をぬき、之を養育し、秋苅て穗をこき、ノゲを去り、摺臼にかけて米となし、之を搗きあぐるまで一々御目にかけられ、又糸をひかせ機織らせて、賤しき者の平生を見せまゐらせ、其辛苦の程を敎え給ひけるとか。」とは御隱居の砌の事なれども、御寶物及金銀、切ては日頃御愛玩の器物だにも御携ひなく、御書物のみは御預りある由、綱條公へ御斷仰られて西山へ御携なされぬ。公には御茶事を御好みなりしが好きは從つて器物などに無益の慾出づるものなりとの事にて、御隱居後御廢しありき。御能御仕舞も同斷、西山に移らせられてよりは朝夕のと、いよ／＼御つゝまやかにして、御膳も一汁二菜多くとも三菜よりは召されず、御小袖も絹紬に限り、御定紋御用ゐなく、丸の内に文字にて癸と御書きなされ、御衣服は御在世の時より薄き絹夜着一ツ、同布團一ツの外はめされず、御頭巾も四十餘年古き茶色縮緬のもの一ツを改めずして御用あり、御隱居後水戸へ御出又は御旅泊の節は、御手づから寢具の上げ下ろしをなされ、近侍の者の手にはかけさせられず、其他大方の事も御自身にてなされたる事なり。常は御領內の出家山伏社人等を賓客となされ、御家士と共に風月の御樂を詩歌に遊ばし、徒然には讀書なされぬ。歌舞等の御沙汰ありし事一度も無く。或は領內を御巡歷ありて、貧を愍み孤を救ひ、民の心を慰めらるゝの傍、寺社の本緣など御たゞしありて、淫祠をば御毀ちなされ、緣起正しきをば、廢れたるをも御起しありぬ。猶は公の御行蹟につきて面白き事、かき集めたらんには、濱の眞砂は數にもあらざるべし。

漂母の餐

櫻川生

一人の靑年士官己が屬する聯隊と共に里昂の市を過ぎ

けるとき、突然二竪の襲ふ所となり獨りさる旅館に留まりて病を養ふとなりぬ、回天の事業を病床の中に夢み、好事魔多きを嘆じけるが、病勢日に募りて財嚢底輕く、醫師を招き藥石を求むる術さへなきに至りぬ、あはれ千里の馬も伯樂に遇はずして、無情なる旅館の主婦に遇ひ、むさくるしき一室に移されぬ、見れば室內の裝飾品とては一枚の蓆と一脚の古椅子とのみ、唯さへ病の床は物寂しく感ぜらるゝものなるに、況して身は羇旅に病の客となり剩さへ薄情なる主婦に冷遇を蒙る、蛟龍未だ雲を得ず、顏色憔悴、形容枯槁、青年士官はいと心寂しく横はれり。

捨つる神あれば拾ふ佛あり、折しも伊太利セチヴの人にてアギーエと呼ぶ年の頃五十歲許と見ゆる老婦人、地を里昂に轉じて此の旅館に保養せるもの、此の不幸なる青年士官のことを耳にし、旅館の主婦の薄情なる振舞、醫者をも迎へず、藥をも與へず、時々は病院に送らんとまでいひ居る由を聞きて情の深き老婦人は、厚き同情を青年士官に寄せ早速醫師を招き、主婦に命じて病客を他室に移さしめ、凡ての費用は己自ら拂ふべしと告げぬ、此の老婦人の情ある行爲に心や動かされけん、旅館の下婢の一人は進んで看護婦となり青年士官の病蓐に侍して懇ろに介抱するに至りぬ、青年士官は重き病に痛くも衰弱して醫師の來診せる頃は譫語を吐いて前後不覺の有樣に、身の他室に移されたるをも知らざりけり。

老婦人の親切、醫師の診察、下婢の看護は功を奏して日を經るに從ふて病も少しづゝは怠りつ、正氣に歸りて四邊を見廻はせば這は如何に、身は蓆一席古椅子一脚の室にはあらで、暖き蓐の中に横はり室內の裝飾も前とは事變りて美はしく、懇切なる看護婦は枕頭に坐して、藥瓶さへ並びあり、夢かと計り驚き事の次第を尋ねんとすれば、看護婦は語るを許さで、唯だ彼か友

か其の病を憐みてかくは爲しつとの答計り。

一日過ぎ、一週過ぎ、十日過ぎ青年士官も漸々に快方に赴きたりしが、始めて恩人の何人なるかを知りたる時、感謝の情け唇よりもまづ顔に現はれ、一種侵すべからざる風采ありき。

青年士官は一度び恩人を見て感謝の情を述べんとを望みしかば老婦人は來りて病室に彼を見舞ひ、厚く彼を恤り書物などを貸し與へ、自らも讀み聞かせて病中の徒然を慰めたり。其後老婦人は毎日に彼を見舞ふて書物を讀み聞かせしが青年士官は耳を傾けて之を聞き、己が聞く所のものに解釋を加へ、其の識見の妥當にして卓拔なる屢老婦人を驚かすものあり、乍去彼は容易くは己が心の中を開いて語る所なかりしが、一日話頭端なくも軍事上に及び、彼は意氣軒昂、熱心自らを忘れて己が將來の企畫を語り出しぬ。老婦人は其の熱心に動かされて微笑みつ

『士官の君よ妾は異日卿を大佐の班に見るの日あるを信ず』

『大佐とや仰せらるゝ……』

青年士官は少しく怒りの氣見へて

『余は大將たるべし、而して恐らくは……』

と言ひ掛けて始めて己が言はんとする所に驚きたる様にて口を緘みぬ。老婦人曰く

『今日までは一言も卿の御身分、郷里の何れなるやを問はざりしも、卿の音調によりて察するに卿は佛蘭西の聯隊に屬せらるゝも恐らく異郷の御方なるべしと見まいらせしは僻目にや』

青年士官は誇り顔に

『貴意の如く予はコルシカ人、姓名はナポレオン、ボナパート』

老婦人は彼が一言一行に感服しつ、病の全く癒ゆるや充分に旅費を整へて彼に贈りぬ。分るゝに際して彼は

感恩の情禁ぜざるものあり

「予は決して御身の高恩を忘るゝ能はず、他日必らず御身に酬い奉る時あるべし、思ふに御身は他日予か姓名を耳にし給ふ時あるべし」

青年士官の胸中には感謝の情溢れ、老婦人の心には畏敬の念滿ち、互に名殘を惜みつゝ東と西に袂を分ちけり。

幾何もなくナポレオンの名は隆々として旭の昇るか如く高まりぬ、老婦人は郷里セチヴに歸りて新聞紙上に彼の成功を讀みつ、而かも一別以來杳として音信なし、ナポレオンは記臆より老婦人の恩を逸せしもの丶如し。

春過ぎ秋來り數年の後、時恰もマレンゴーの戰の前ナポレオンはセチヴを距る十二哩のニオンを過ぎり停ると數時間、ナポレオンは急使をセチヴに遣はし急にアギーエと呼ぶ老婦人を搜へ來るべきとを命じぬ。

使者は辛うじて老婦人を見出しぬ、年甚だ老いて目も將に盲せんとして足閾を出づると稀なりしがナポレオンよりの使者と聞きて老いたる胸も勇み立ち、去らば仰に從はんと出で立ちたり、ナポレオンは恩人の來る今か〳〵と待ち詫びて馬に鞭ちて早や半道か程は出迎ひをりぬ、老いたる婦人は馬車の上に、戰勝の將軍は馬上に、相見て今昔の感に堪へざるものあり。ナポレオンは丁寧に老婦人を迎へ、懇切に待遇し、己が隨者を顧みて曰く

「諸子、予が恩人を見られよ、予貧しく友無かりし時予が生命を救ひしは此の婦人なり、病床友なき時此婦人は余が傍にありき、予は此の婦人の爲めに生命を救はれたるとを光榮多福なりとし予は決してこれを忘れざるなり」

老婦人はニオンに於いてナポレオンと語ると二時間、ナポレオンは老婦人に己が企畫を語り別るゝに臨み昔

て里昂に相別るゝが如く

『御身は余が姓名を耳にし給ふ時あるべし』

と告げたり。

ナポレオンの雄名は軈て全歐洲に轟き渡りぬ、コルシカ島の一平民は遂に光榮ある佛蘭西皇帝の位に即くに至りぬ、ナポレオンが帝位に上る十五日前ゼ子ヴの老婦人は將軍ハリソンの來りて見舞ふ所となり將軍は老婦人に其のナポレオンの使者として來りしとを語り、巴里に來りてナポレオンの戴冠式に陪せんことを求めたり、萬般の準備既になるたゞ單身巴里に來り給へとのとなれば、老婦人は孱弱の身を起し翌日巴里に向へり。

巴里に到れば歡待到らざるなく、昨日迄はゼ子ヴの一老婦、今日は打つて變りて金殿玉樓の中に榮華思ふ儘なる身となりにけり、中にもナポレオンは萬乘の身を以て心を盡して老婦人を歡迎したりけり。

ナポレオンは彼女に住むべき家を備へ、下婢下男は恐か、馬車其他のものを與へ年金一萬フランクをぞ賜はりける、かくしてナポレオンは常に老婦人を勞らひ屢々老婦人に圖るに一身の私事、時としては國家の大事をも以てせりとぞ。

ナポレオンの榮華も一朝にして消え失するや老婦人は其の住家を失ひ、多くの便宜は取り去られしも年金は死に至るまで與へられぬ、かくて老婦人は千八百二十二年逝りぬ。

獨逸の婦人　ビスマークと其婦人の情交

梅馨生

貞烈なる夫は亞米利加の男子に求むべく、淑徳ある妻は獨逸の婦人に於て望むべしとは、世界の定評なれども、余は殊に後者に於て其の然るを見るなり、耐忍温厚慈善情愛等有らゆる女子の德操は、眞に獨逸婦人の

專有物にして、同國の國情に通ずるものが、皇室の上より茅屋の下に至るまで、其家庭の樂々たる和氣を以て充滿するを認むるは、母として妻としての獨逸婦人が淑德の光輝なりと謂ふべし、余は常に思ふ方今世界各國の皇室中未だ獨逸の現皇室の如く家庭の歡樂を有するものはなかるべしと、彼の皇帝と皇后とが兩々相並び、其周圍を取卷ける幾多の皇子皇女の或は其肩に攀ち或は其膝に倚れる寫眞程、世に愛らしきものはなく而して又た萬乘の尊を以てして、其良人のために其子女のために湯藥必ず嘗め、食卓先つ驗せずんは止まざる獨逸皇后の如きは、世に稀なりとす、余が獨逸の皇室を讃するは、誠に其の國民の模範と爲り下民能く其德に服して之に倣へばなり。然れども余の獨逸婦人に就き特に此に記さんとするはビスマークと其夫人の情交に關する事なり。

ビスマーク夫人の此世を去り流石の鐵血宰相も落膽の餘り爲すべきの術を知らずと聞きしも早や四年前の往事とはなれり、以來公の全く閉居して世と關せず勇心沮喪亦た前日の人に非ず一個巨大の煙管を友として、僅に其餘生を樂むものは、誠に其の半身たりし夫人を失へるがためにして、夫人亡きは即ち家庭を失へるなり。家庭を失へるは、即ち幸福を逸せるなり、幸福家庭即ち夫人こそ公をして出で丶大事を成さしめたるものにて、公の一代の功名は應に夫人と其譽を折半すべきものなり。英雄豪傑は家を顧みずと稱すること、余之を信ぜず、如何となれば不世出公の如きを以てして其の一日も缺くべからざるものは、家庭にてありたればなり。公と夫人との情交は實に一部の小說にして美譚此の如きは其類少し。

夫人の名はフローレインと呼び千八百二十四年を以て生れ、父の姓をバットカマーと云ひ、有名なるポメラニヤの貴族にして、最も門地ある家柄なりと。ビスマ

ークが夫人を知るに至れるは、千八百四十五年のとにして、公の知己なる普國々會に於ける保守黨の首領ブランケンバーグの家に相見たるに始まり、夫人が二十一歲の時なりと。其後二人のブランケンバーグ家の人々と共に旅行せる事などありて、相識ると漸く密に、情交漸く濃となり、遂に三年を經て公は夫人に結婚を言出せるに至れり。

左れど此一事は容易にパットカマー家の人々の承諾する所とならず、其故如何となれば當時ビスマークの惡評は到る處に喧しく、年少氣鋭人を凌ぎ或は屢ゝ決鬪を挑み、或は乘馬に耽り、或は敎師又は長者に對して無禮の行爲をなせる等にて「狂ビスマーク」の仇名をさへ得、貴族社會に在ては、殆ど公を擯斥して共に齒するを愧づと稱する程なりしかば、高尙嚴格にして宗敎主義のパットカマー家の最愛の一人娘を我物にせんと、中々に其望を達すべくも見へざりしなり。

然るに公は咄嗟に此の難關を排して、容易に其目的を成就し、人をして戀愛にも尙ほ一種のビスマーク流あるかと思はしめたるは、公か大股に歩して夫人の前に至り、夫人の明かに公に意ある樣子をは認めて兩腕を以て夫人を抱き顧みて、居並べる家人親戚に向ひ「上帝の結合せたるものは何人も之を分つと能はず」と告けたる事なり。まことに何人も亦た之を如何ともすると能はざりき。獨逸聯邦第一の議會の閉會して間もなく、即ち千八百四十七年七月廿八日公と夫人との結婚の式は擧けられ、相携へて新婚の旅行を伊太利に取り、而して幸福なる家庭の成ると共に、政治上に於けるビスマークの名も漸く喧しく、公か夫人との情交は其功名の源泉となれり。其翌年に於て長女マリーは生れ、更に其翌年長男ハーバートは生れ、三年を隔てゝ次男ウヰルヘルムは生れぬ。

夫人は家妻として完全の標本なりき。其性質は至て溫

稀にて、且つ天眞爛漫老ての後も少時の擧止と異るとなく、質樸の生活を愛し、往日の朋友を忘れず、良人の位人臣を極むるがために曾て傲り高ぶるか如きとなく、人をして敬慕の念禁ずる能はざらしめたり。夫人に唯一の欲望ありき、其は常に良人と其子女とを樂しましめんとの事にして、假令如何なる公務の爲にも、公の行く處には夫人必ず之に從ひ、到る處に公に供するに家庭の樂を以てせり。家庭は必ずしも獨り住馴れたる大厦の中にのみ存せざればなり。此の如くにして妻とし母として良人に侍く子女を撫育し注意親切至らざるなく夫人の淑德の反射なる家庭の中に、鐵血宰相は其氣を養ひ、其心を慰め、以て其成功の助を得たるは明かに、公自らも「余の今日あるは彼女の力なり」と明言せるとありき。淑德に富める獨逸婦人中にもビスマーク夫人の如きは稀にて、此人にして良人公の如きあり、公にして其室夫人の如きありと謂ふを得べし』

談叢

バクテリヤの話

天水生

「バクテリヤ」は又腐敗の原因なり、腐敗とは有機物が分解することにて、或は臭氣を發し、又は色を變し、其形狀組織に變化を及し、分解の極は多くは水、炭酸瓦斯、アンモニヤ、等となるなり、此腐敗の作用を行ふものは「バクテリヤ」なり、故に若し强き熱を加へて其中の「バクテリヤ」其他の生物を殺し置き、後密封して再び「バクテリヤ」の浸入を防げば、何時迄たつも腐敗するとなし、鑵詰は此理を應用したるものなり、其時々腐敗せるものあるは、製造の時熱するとの足らざりしか、或は密閉法の不完全よりして「バクテリヤ」の

發入を來せしによる、此腐敗作用を行ふ「バクテリヤ」は元一種類のものと考へられてバクテリウム、テルモーと云ふ學名を付けありしも、近來の研究により此ものは一種類のものにあらずして、數種類よりなると發見せられたり、此腐敗「バクテリヤ」は短棒狀にして最も小なるものゝ一なり。

腐敗は誰しも厭ふ事にて、殊に夏期は「バクテリヤ」の繁殖盛なれば一層烈しく行はれ、食物の腐敗よりして屡々悪疫を發生するとなれば、此「バクテリヤ」さへなくば腐敗なく、萬事清潔に悪疫等も少かるべきと「バクテリヤ」を恨む人もあらんが、そも此腐敗作用は此世界に必用なるものにて、腐敗により無用の有機物分解して元の簡單なるものに變じ、再び新しき有機物を構成する材料に用ひられ、かくて都合よく物質の循環行はるゝなり、例令ば此所に一匹の犬の死躰あらんとするに、若し腐敗するとなくば、犬の躰を構成する成分は其まゝ増減するとなく、何の用もなさずして、長く其まゝに存するならん、然るに腐敗作用行はるゝにより、犬の躰を構成する有機成分は簡單なる無機成分に變じ、地中に入れば、植物躰中に撮取せられて、植物の成長を助くるものとなるべし、かくて此成分を取りて生長せし植物が何時か動物に食はるゝことあらば、元犬の死躰にありし成分は其動物の營養分となりし理なり、而して若し何時か此動物死して地に埋めらるゝ事あらば、又腐敗して分解したる成分は地中に入りて植物の養分となるべし、かくの如く腐敗作用あるが爲めに物質の循環行はれて萬有の事か都合よく行はるゝなり、然らば腐敗「バクテリヤ」は一概に厭ふべきものにあらずして、却て天然の法則を行ふ有益なる職工なりと云ふべし。地中に一種の「バクテリヤ」あり、之を「硝化バクテリヤ」と云ふ、此「バクテリヤ」は何處の地中にも生活し、有機物の腐敗によりて生ぜしアン

モニヤ鹽類を硝酸鹽類に酸化する作用を爲すものにて、植物の生長に取りて大切なるものなり、夫れ窒素は植物に取りては欠くべからざる一成分にして、空氣の五分の四は此瓦斯よりなるも、植物は直接空中の窒素を取りて已れの養分となすと能はず、（尤も例外なり）又窒素を多く含める有機物より之を直接取ると困難にして、窒素の多分は無機鹽類より之を攝取するなり、而して窒素を含む無機鹽類の主なるものはアンモニヤ鹽類と硝酸鹽類となるが、アンモニヤ鹽類は有機分の腐敗する時炭酸瓦斯、水等と共に多く生ずるものなれば、直に之を取りて植物の養料とせば都合よきが如きも、實際植物の養分としてはアンモニヤ鹽類より硝酸鹽類の方はるかに優るものなれば、アンモニヤ鹽類が容易に硝酸鹽類に變する時は此上なき好都合なるべし、而して實際天然に於てアンモニヤ鹽類は容易に硝酸鹽類に變ずるとを得るなり、此大切なる作用は實に「硝化バクテリヤ」によりてなされつゝあるなり、即ち此「バクテリヤ」はアンモニヤ鹽類を酸化して硝酸鹽類となすなり、故に今田畑に有機質の肥料を施さんに、植物は直に有機物を吸收して養分となす能はず、茲に於てか腐敗「バクテリヤ」來りて之を腐敗分解してアンモニヤ鹽類を造り、更に「硝化バクテリヤ」の作用によりて硝酸鹽類生じ、始めて植物の養分となる、故に「バクテリヤ」は農業に取りて欠くべからざるものなれば、農家は宜しく「バクテリヤ」大明神として崇信すべきなり。

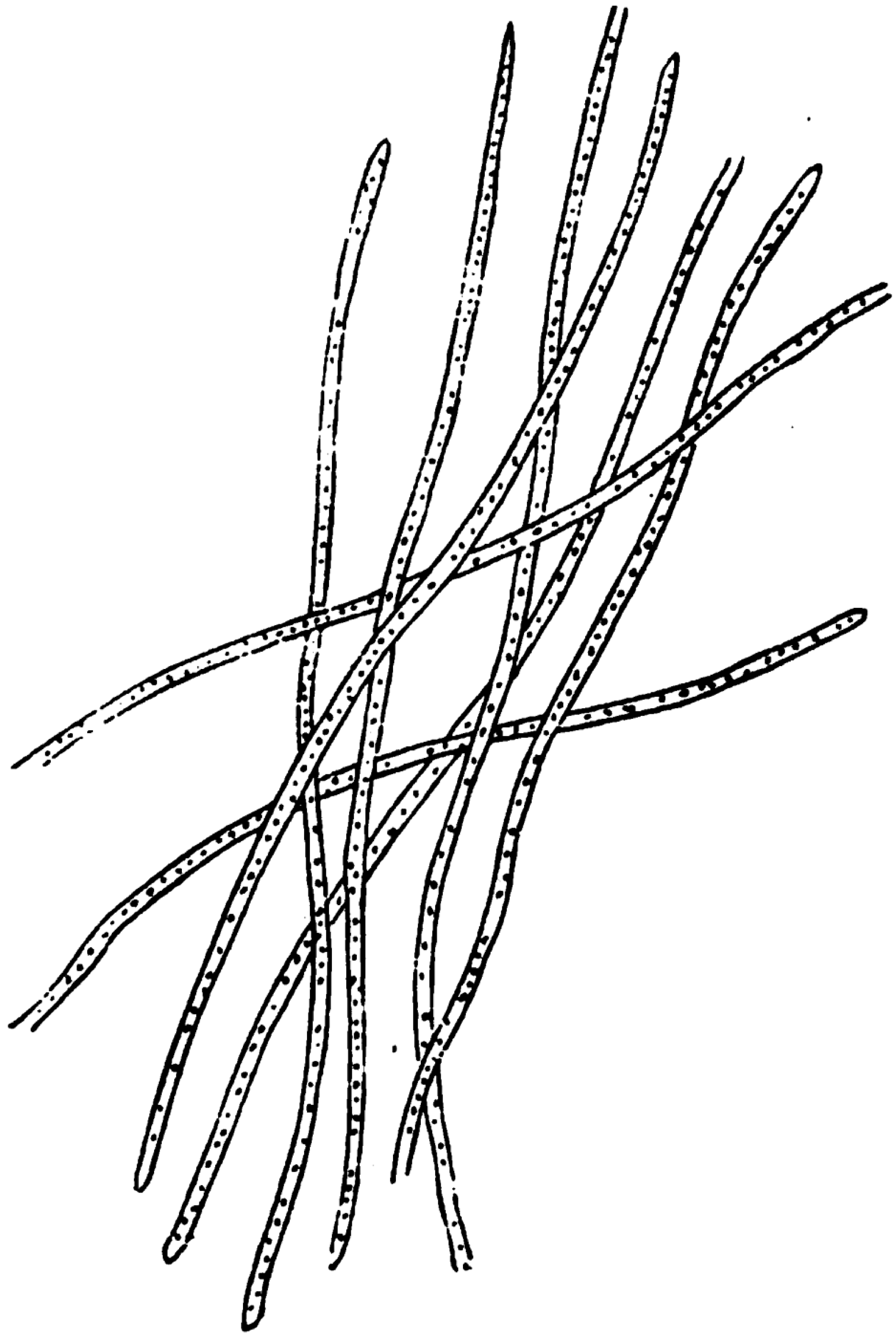
「硝化バクテリヤ」は硝酸加里の製造者なり、硝酸加里と云ふ藥品は煙硝、「マッチ」の製造其他種々の工業に必用なるものにて、其製法種々あれど、最も盛に行はるゝ法は、此硝化「バクテリヤ」の力を借て行ふものなりとす、其法は動物の臓腑其他の有機物に木灰、木片等を混じて長く地中に埋め置かば、有機物は漸々腐敗

分解して、アンモニヤ鹽類を生じ、硝酸「バクテリヤ」の働によりて之を硝酸に酸化し、木灰、木片中の加里と化合して硝酸加里を生ずるなり、かくして製造せし硝酸加里は多量の土砂を混じ居れば、之を水に解して他の雜物を濾し分け、水を蒸發し硝酸加里を結晶せしめて取り出すなり、此法は「バクテリヤ」の繁殖に都合よき熱帶地方にて行ふべきものにして、主に印度にて行はるゝなり、彼の地にては天然に地中に混じて多量の硝酸加里の産出する所あり、之れも元は「硝化バクテリヤ」の作用によりて自然に地中に生ぜしものなるべし。

ゑんどう、そらまめ、等の荳科に屬する植物の根を見るに、多くの球の如き小塊の之に附着し居るを見るべし、此小塊の中には一種の「バクテリヤ」生存し、空中の窒素を採りて之を同化し、以て己れが寄食する母植物の養分となすなり、窒素は植物の大切なる成分にてありながら、多量に存在する空氣中より之を取る能はず、然るに荳科の植物に限り空中より窒素を取る形跡あるなり、其攝取の方法如何につき多くの學者は一時其頭を苦めたりしが、終に近年に至り獨逸著名の植物學者フランク氏は根塊中に存する「バクテリヤ」の作用なることを發見したるなり、此れ實に驚くべき事實にあらずや。

近來「バクテリヤ」に關する研究の進むにつれ、種々の驚くべき面白き「バクテリヤ」は發見せられぬ、今其主なるものの二三に就き述べんに、茲に「硫黃バクテリヤ」なるものあり、不潔なる溝渠、又は温泉等の硫化水素の臭氣ある所に群をなして生存し、其色白黃色を呈す、其少許を取りて之を顯微鏡下に窺へば、屢々圖に示す如き糸狀のもの、群を爲し居るを見るべし、此一本つゝの糸こそ各個の「硫黃バクテリヤ」として、其中に含む細顆粒は硫黃なり、さて如何にして其躰中に硫

黄を生ずるやと云ふと、此もの丶生存する所に多量に硫化水素の發生するあり、之を躰内に取り酸化して硫黄となすものなり、而して硫黄は別に躰の養分となるにあらずして、硫化水素を硫黄に酸化する際發生する熱其他の力によりて躰力を保つに過ぎず、恰も動物の呼吸の際酸化作用起りて躰力を増すが如し、「硫黄バクテリヤ」の形狀は種々あり、單に長きものに限らず、短くして楕圓なるものもあり、一躰に他の「バクテリヤ」より大形なるが如し、其種類も又少からず、又「鐵バクテリヤ」なるものあり、其形狀大サは「硫黄バクテリヤ」に似て、全躰の色褐色なるは、其躰の周圍に酸化鐵の沈澱物を被り居るによる、此「バクテリヤ」は水中に溶解せる鐵分を躰内に取りて之を酸化し酸化鐵となして躰外に出し、己れが細胞膜に之を附着せしむるものなり、此ものも別に鐵を養分として取るにあらずして、之を酸化せしむる際發生する力を利用して躰力を養はんが爲めなり、「鐵バクテリヤ」は溝渠水田等に屢々見る鐵質の



爲めに赤褐色を呈せる處に生存す、此ものは或時は水道の鐵管中に夥しく發生して水路を塞きて大損害を與る事あり、嘗てベルリンの水道は此災害に遇て水切れ

となり、又某會社は此害を蒙りて暫く全業を休み、爲めに大損害を受けたる事ありしと云ふ、顯微鏡の力を借らざれば見へざる一小生物も、多く集れば非常の壓力を以て流るゝ水道を塞閉するとは如何に驚くべき事ならずや、又或水酸化鐵の鑛石は「鐵バクテリヤ」の死骸より成れりとの説あり、玆に又「熱バクテリヤ」なるものあり、非常なる高熱を發するものにして、船中に積める湯が往々發花するとあるは、時としては此「バクテリヤ」が湯の中に發生するより起れるならんと聞及べり、此熱も一種の呼吸作用によりて發するものなるべし。

近來の研究により、食物が腸胃の中にて消化するは單に胃液、膵液、膽汁等の作用のみにあらずして、胃腸の中に生存する「バクテリヤ」も又大に之を助くるものなると知られたり、或學者は尤も實驗し易き鳥類に就き其消化管内の「バクテリヤ」を檢査せり、其法は多くの鳥類を集め、一々之を殺せる後、充分の注意を用ひて胃及び腸中の含有物を取り出し、其中に存在せる「バクテリヤ」の純粹培養を行ひ、以て之を試驗せるにあり、其實驗の結果によれば、二十四種の鳥の腸胃よりして總計八十八種の「バクテリヤ」を得たりと、鳥類の試驗よりして推測するに、吾人の胃腸の中には必ず之より多くの「バクテリヤ」の種類を含むなるべく、其各個の數に至りて幾億なるや未だ知るべからざるべし、さて此消化に於ける「バクテリヤ」の作用は食物を醱酵分解せしめ以て容易に胃腸壁に吸收し易き狀體となすにあるなり、而して「バクテリヤ」の數は食物の異同によりて大に異るべく、前述の鳥類に於ける試驗によれば、食穀鳥類に尤も多く(六十四種類)食蟲鳥類之に次ぎ(三十五種類)而して食肉鳥類(二十二種類)尤も少かりしと、此結果より考ふれば、人類にありても穀物野菜等を常食とせる我日本人の如きには、「バクテリヤ」

の數多く、歐米人の如き肉食人種の腸胃には「バクテリヤ」の數少かるべし、されば日本人は歐米人に比して「バクテリヤ」の恩澤を蒙ると多きものと云ふべきか。

「バクテリヤ」の話は此れにて一先づ終りとすべし、讀者之により「バクテリヤ」に就きての誤解を去り何分の新知識を得る所あらば幸甚。

鶯の飼方

西谿

こゝにものするものは、都にて、名高き鳥飼の翁について、親しく聽き得たる所なり。來らん月の末つ方頃よりは、氣候も、やう／＼暖かになりて、花笑ひ、鳥歌ふの快天地となるべし。人多く、勞少き家庭においては、一禽を求め給ひて、南窓にさし入る絲遊のまに／＼、綿蠻たる清音を弄し給へよかし。

第一　飼方のあらまし

年毎に、田舍より、鶯の雛をひさぎ來るは、三月の下旬より、四月の上旬なり。買ひ求めてより、ほど三十日ばかりも經過ぎなば、必ず銘音を有てる親鳥にかしづかしめざるべからず。されど、雛の第一年は、親鳥の好音を謹聽するに止まるは、猶ほ嬰兒の發言し得ざるがごとし。第二年に至りて、又た前の親鳥に侍らしむ。然るに、その接近せしむるや否や、親鳥の鳴音にいどまされて、猶豫なく鳴き出す所の雛は、決して宜しきものにあらずして、その音色も、いと拙し。是れ謂はゆる馭鶯なれば、直ちに野に放つべきなれ。」さて、優れたる雛に在りては、最初四五日の間は、矢張り第一年にての如く、親の音を謹聽するばかりにて、一週間前後の頃より、やう／＼に鳴き初むるものなるが、その音色の美なる、又たその音調の巧みなる

こと、師たる親鳥の銘音と違はさるものなり。鳥と雖も、亦た大器は晩成なるにや。

爰に、又た注意すべきとは、元來雛鳥の出來には、カナヤといふと、ムツヤといふとの、二種ありて音色も、幾分か異れるにぞありける。蓋し、是は殆んど先天の資質とも謂ふべき者なれば、その師たる親鳥を撰ぶには、心して兩種の別を混淆することなかるへし。

更に又た、鳴音にも種々ありて、或はホウ〳〵ケフにて結ぶ者あり。或はホウ〳〵ホケキヤウと確と結ぶものあり。あるは又た、ホウ〳〵と、三つ四つ乃至七つばかりも重ねて、ケキヤウと結ぶもあり。いづれも、その聲の調を名づけて、高音、中音、下音とも云ひ、又た一のね、二のね、三のねなどゝいふは、猶ほ三味線の、三筋の調に於けると異ならず。なべて調の亂れざるをば、尤物とは爲すなり。

第二　夜飼の法

黄鳥をして、新年早々、即ち極寒の頃に方りて、鳴かしめんとならば、夜飼と云ふとをなさゞるをえず。蓋し、鶯の鳴くべき本來の時候は、四月の上旬なるを、一月の上中旬ごろに、鳴かさんとすることなれは、人爲の手立もて、彼れが天候を詐くにぞある。固より斯かる事は、自からぬ物好なれば、讀者諸君が、試まれぬこそ望ましかれども、筆の序ゆゑに、右の方法だけは、爰に傳へ侍らん。

其の法、日沒の四時四十分ばかりなる、極短の日に在りては、飼箱の窓をば、障子越しなる燭光に向け置きて、以て鶯の天地の日沒を延ばし、日出の六時五十分ばかりなるを、それに先だちて、朝な〳〵灯もて日の出を早めて、漸くに長日と見せ、終には、日沒をば、六時と見せ、日出をば、五時二十五分位と見せかくるときは、彼れ鶯は、一月上旬頃の天候をも、四月の上旬頃と取違へて、ホウ〳〵を唱へ初むるなり。さてこ

の夜飼の原則は、決して三週間以上に渡るを得ずとなれば、若し元日に鳴かさんには、是非とも、十二月十日頃より、夜飼を爲し初めざるを得ざるなりとぞ。嗚呼人、若し元日に泣かば緣起のわろきを覺ふるなるべし、四月の鶯、元日に鳴いたとて、格別の興もあるまじきに、斯かることに、丹精凝らせる鳥屋ありと聞きては、人心の好奇、誠に驚かさるるを得んや。

第五　黄鳥競鳴會のこと

鶯の競鳴會は、東京にては、根岸のあたり、向島の邊に開かるゝを常とす。この會には、名立たる鶯のみが、えりにえられて、挈へらるゝことなれば、會塲の準備は、最も深く注意せられ、鳥と鳥との距離は、必ず十四五間づゝを隔てゝ配置せらるゝことにて、決して同じき一室裡において、相見、相呼ばしむるにはあらずとなり。其の故いかにと問ふに、一鶯、若し他鶯の音を聞くときは、例の謹聽することばかりに、心惹かされ、ひるみ果てゝ、己れの資有せる音だけを、發し得ざるに至ればなりとぞ。

斯くて、配置濟みぬれは、鑒定家とて、行司方とも云ふべき會の主人公は、鳥の主々なる衆に擁せられて、會の總務局より出でゝ、鳥在る戶毎について、みなみな一身不亂に、耳を斜めにしつゝ、ホウ〳〵の如何を聽くこと、一巡し、二巡する、そのまに〳〵、鳴くに訛なく、訥なく、一二三の聲調の整ゐたる點に於て、一同の爲に、第一等と認められたる所の鶯は、やがて、名譽の賞品を贈られ、又たは五十圓、百圓、二百圓などと、價格の折紙を附けらるゝなりとぞ。五尺の長け有りなから、月額五十枚の所得だに、博し得ざる人あらば、體大の比較上、既に鶯にだも若かずと謂はるへし。慚々愧々ならずや。

家政

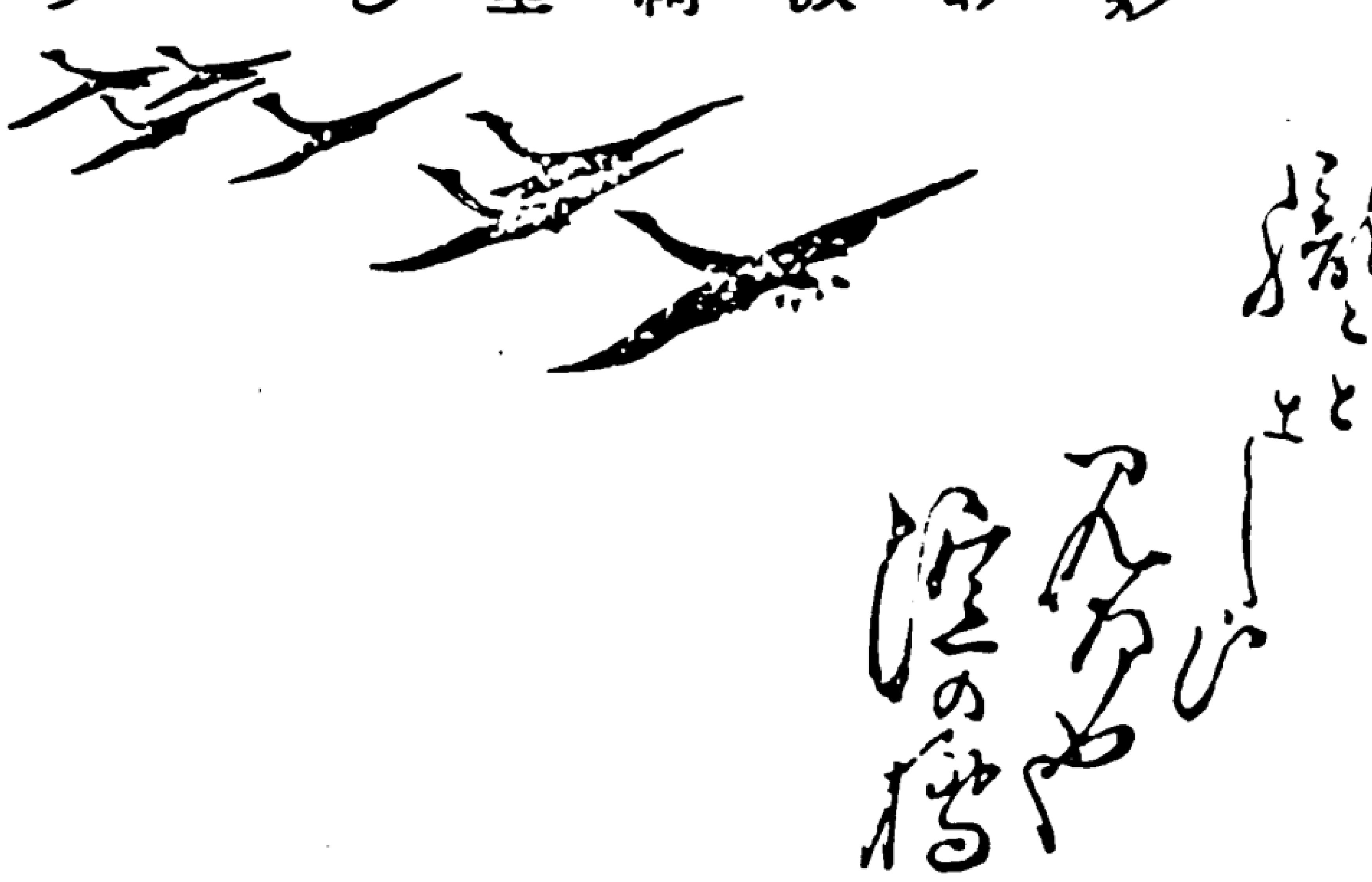
建具と額面

(室内装飾法の内)

山田美妙

座敷きの引き起つのは建築の材料にあるかと思ふが、さうで無い。いかに立派な材木、紫檀とか黒檀とかいふものでも綺羅びやかに飾りよく作つたところが、室内の附屬品が不都合なものであれば決して見ばえのするものでない。

之に反して、建築の材料はよしや多少わるいものでも、附屬品すなはち床の間のかざりや戸障子襖などの建具が然るべきものであッた時には其建築のわるいのも全く隠れ、瑕も失も知れなくなる。



このゆゑに室内装飾に通じて居る人はおのづから皆この心得を含み、よしやいかなる貸し長家でも夫相應な装飾をほどこして見ぐるしくないやうにする。建て具から手が付けられれば素より好い、が、それに及び得ぬとしたところで、氣の利いた床かざりで充分装飾の目的は達し得られぬものでない。

箇條を分つて言ひ出せば、一冊の書物としてもほとんど足りまいが、約めて言へば夫ほどでも無い。まづ建て具について言へば、

一、承塵つきの座敷きに白木縁の襖はよくはまらぬ。

承塵つきの室は素よりあらたまつた性質のもので、衣服ならば袴羽織打扮といふ格合ひゆゑ、えやれ過ぎたり花車過ぎたりした附屬品は何となく室の尊嚴を消

すやうなもので、あたら物に瑕を付ける。

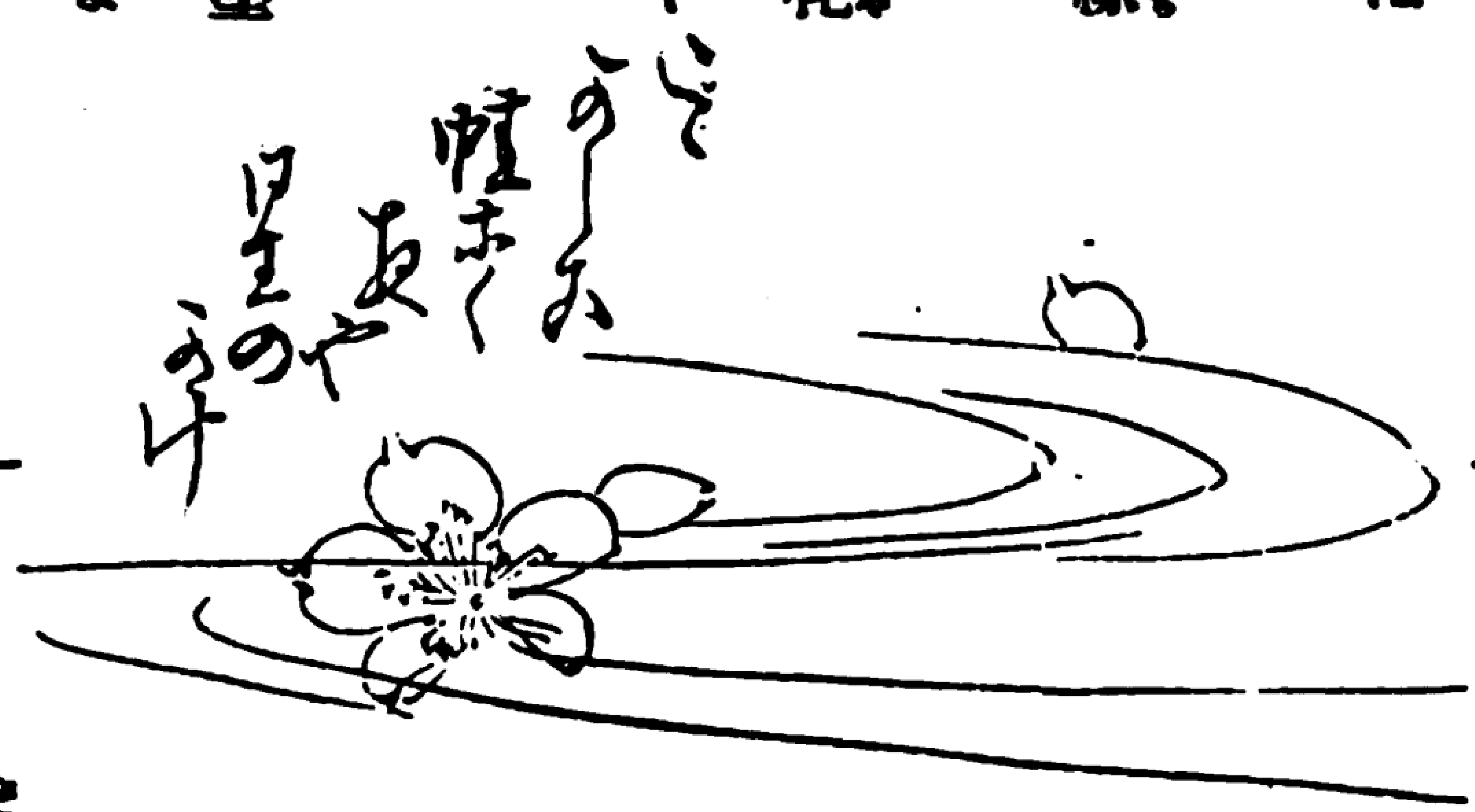
白木ぶちは飾り無くさつぱりして好いが、言はば風流花車な方で、衣服ならば中形の浴衣打扮といふ格ゆゑ、袴羽織は承塵つきの室には取りあはせにくいものである。

打つて付けによく適合るのは塗り縁で、それも黒ぬりを最上とする。

襖もやうも同じ譯で、斯樣のあまり花車なのは面白く無く、無地とか古代もやうのどッしりしたのが丁度適ふ。

障子も塗り骨でほとんど苦しくない。當世では全躰に田舎か何かで無ければ塗り骨障子は廢れたゆゑ、作り方次第によつては障子だけは白木ぶちでも我慢が出來る。

それには優形過ぎた作りで無く、むしろ紙張るといふほどにどつしりした作りならば事譯も無く適合する。



今は硝子入りが流行する。適合するも爲ぬも無い、流行の勢力を兎角の批評で熄滅させられるものでも無いゆゑ、承塵つきの室にその障子でも我慢できる。これとても作り方次第で不相應に見えるものでもない。出來あひ見たやうな、中段に譯も無く横長に嵌めたのでは感心ならぬ。主として適するのは竪木框入りの類である。

二、承塵無しの室でも床の間のつくり次第で承塵付き同樣の建て具を要する。

大工の作法には十八棚といふとほり、床の間は同じでも側の棚次第で嚴正な床にもなり、またざれたものにも爲る。

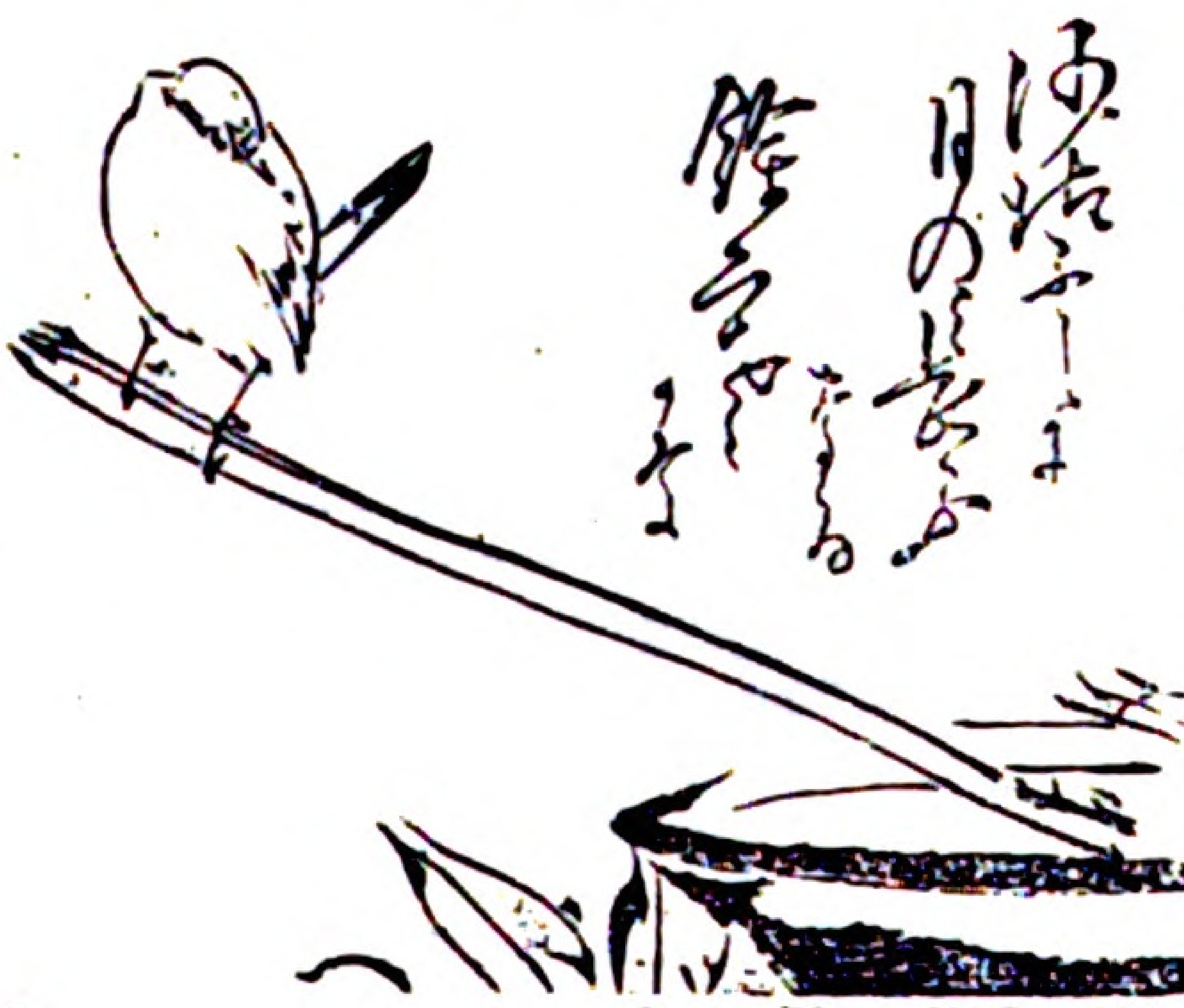
四十八棚の名は煩らはしいゆゑ此所で言はぬものと

して、つまり其棚のどつしりしたのと、又細工過ぎてまやれたのとの此二點の相違により、建て具も正に前の承塵つきの室に應じたやうな心得でなければならぬ。強ひてやぶれば不釣合に見える。

三、腰高の障子は今おもに上品な室に用ゐても搆はぬ。

腰高といつても所謂腰障子などは言ふまでも無く下品なもので、臺所口ぐらゐにはまるだけである。それより稍ひくいものは今主の流行で、上品な室に用ゐ慣れて別段をかしく思はれず、むしろ却つてよく見える。いづれそれほどの腰高になれば、腰板を神代杉とか、絲柾杉とか、乃至また他の一寸ひねつたものにしなければならぬ。」

四、御簾入りの障子や襖は無茶なところへ用ゐられぬ。



御簾入りは上品で見ばいが有るが、それだけに生出來の室には不相應で折角の物も、掃きだめの鶴となる。是非とも書院づくりの室で無ければ充分に應じたとは言へぬ。いはんや夫のみに止まらず、道具も御簾入りの間となれば、是非下品なものは用ゐられず、兎に角に面倒きはまる。

五、額の適當な場所は客から見えやすい所にかぎる。

客の後などに懸けるのは氣の利かぬかぎりで、主な場所は床に向かつての左右とする。が、是は坐敷きの入り口にも因ることで、一概には言へず、すべて見はからひに因る。

大字や大形の繪は客から離れた所でも好いが、細字や小形の繪はなるべく客の目に近いところにすべきも

のである。
油畫や硝子はりの額は客から見て反射せぬやうな所に懸けることに限る。すべて此類の額は日あたりの方に向けぬやうに懸ければよろしい。

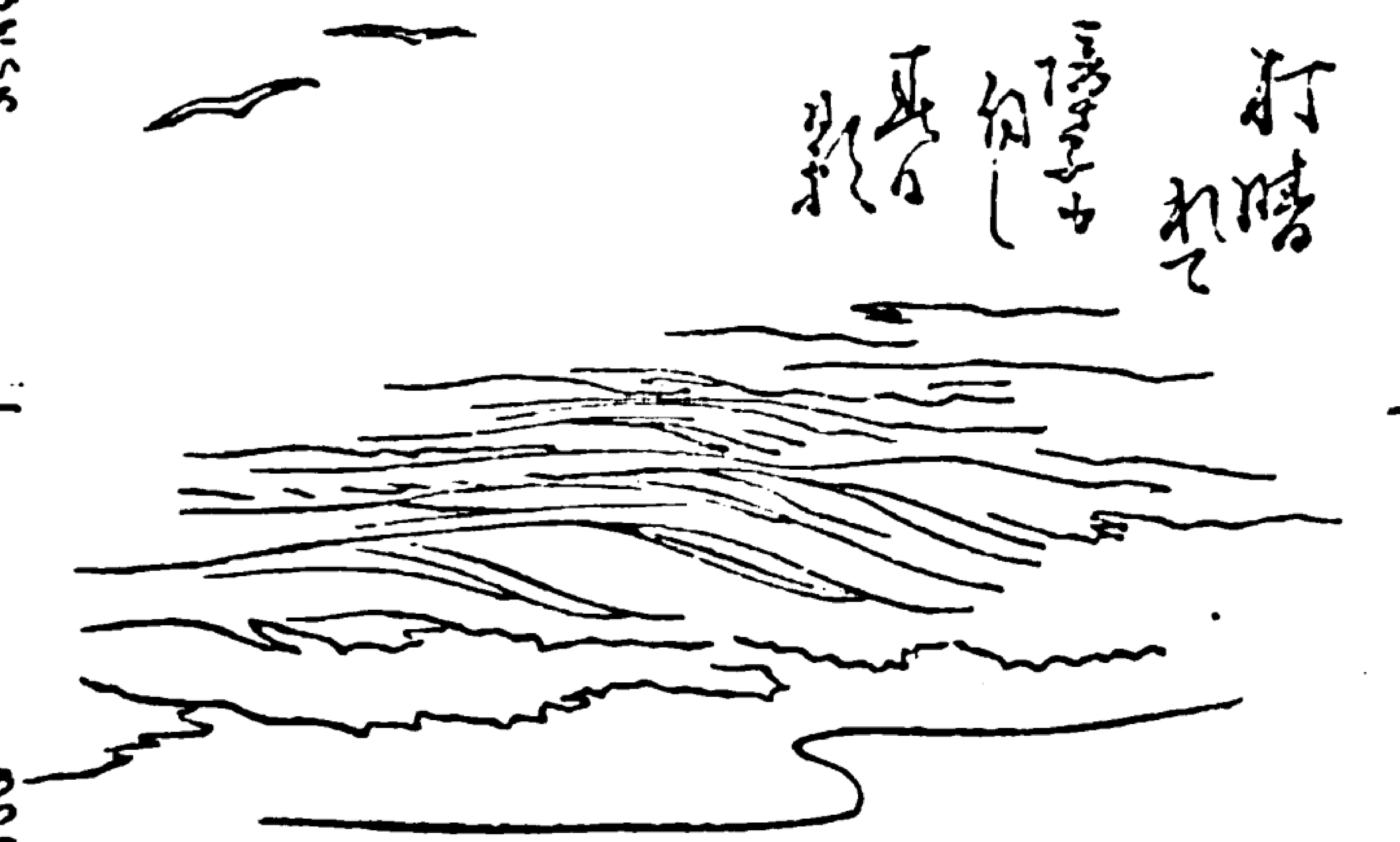
額の字の意味や畫のおもむきは室により相應させるのが無論であるが、是は他のものとちがひすこぶる面倒ゆゑ大抵に間に合はせて置いても是非に及ばぬ。が、はなはだしいのは素よりをかしい。「海楼萬里風」といふ句の額を懸けた室の床の間に深山の圖の幅などを懸ける類ではすこぶる困る。

額蒲團の色は濃淡は兎も角まじりけの無い赤、桃、黄、玉子、紺、水色などの一色なのを尚ぶ。まじり色でも鼠、萌黄、柑子、紫などならまだかまはぬ。緞子、唐綾などはやはり字意畫模樣の上品なものに用ゐ、他のしやれた字意畫模樣のは縮緬、絹などの處でよろしい。

染めもやうの有る、たとへば友禪物の類の蒲團は額蒲團としてもとより取るにも足らぬ。

どうかするとあまりに捻つて、鹿子絞りなどにする人もあるが、是またいけぬ。

（完）



家庭日用雜事

黄花

（一）食器の清潔

コップ硝子壜、匕などのくもりたるは、不潔にして誠に快よからぬものなるが、乳用の器は別してくもり易きもののゆゑ、其洗ひ方に心すべきなり。即ち湯に浸す前に先づ冷水にてよく洗ふべし。卵に用ひし匕を洗ふにも右同樣にて、かく

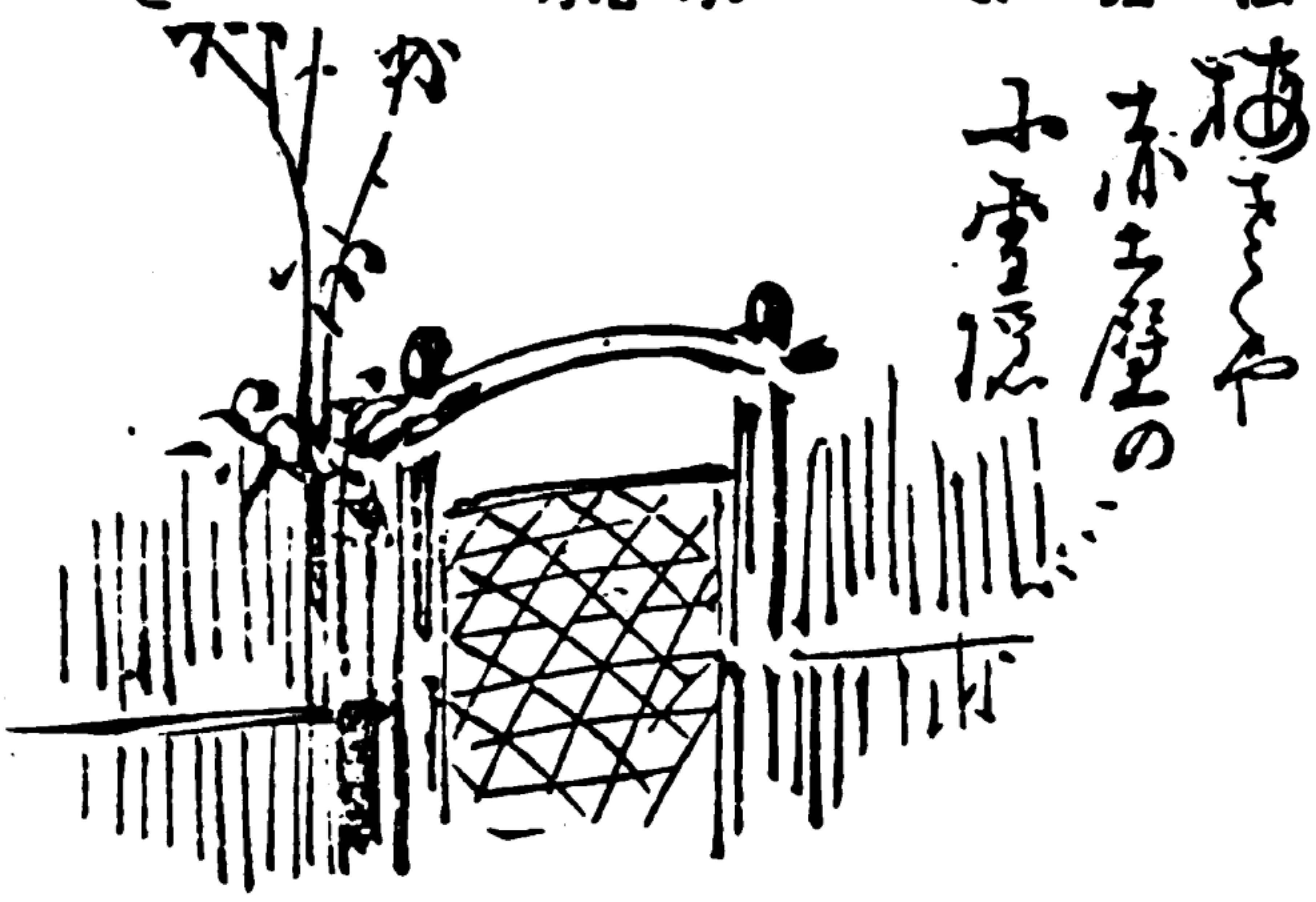
すれば匕などつやを失はず、常に新らしきやうに保ち得べし。

(二) 飲料水

飲料水のよしあしを試驗する簡易なる法は、ガラス瓶に一合の水を入れて白砂糖少々を加へ、よく栓をなし、日あたりよき處に置くべし。一週間十日も經れば、良水なれば變りなきも、不良水ならば水に色を生じ、濃液となるべし。又飲料水は決して鉛の管を通す可らず。

(三) 印形

印形の肉うづまりて文字不明となりしとき、錐小刀などの尖にてとらんとして、つい字畫を缺損し、あらぬ不便を來すなどは、往々ある事なるが、此には一の良法あり。蠟燭の蠟を印形の面に指の先にて塗りつけ、火にあぶれば、印肉は蠟と共に溶けて滴るなり、これを紙にてふき、又蠟を附けて火にあぶり、かくして度々する中に全く彫りたての如く字畫分明となるべし。



(四) 手袋

物は取扱方次第にて、永くも保ち速くも損するなり。手袋の如きも、其ぬきさしの一寸した注意にて大に保ちをよくす。ボタン付の手袋はこれをはむるに腕の方の釦より先きにはめ、ぬくときは反對に手首の方より先にはづすべし。凡てぬく時に指先を引張るはよろしからず。端を少しまくりて、徐にはぎとり、溫み去るまで裏かへしのまゝに置くべし。又ぬき去りてまるむべからず、必ず正しくそろへて收むべきなり。

手袋の色は定めなけれど、すべて黑みがゝりし色は手

を小さく見せ、薄色は大きく見するものなり。婦人などは其心得あるべき事なり。

（五）　臺所品々

臺所には常に砂を一箱備へ置くべし。ランプを覆すとか、炭火がはねるとか何とかいふ塲合に、砂ほど火消しによきはなし。何も用心こそ肝要なれ。

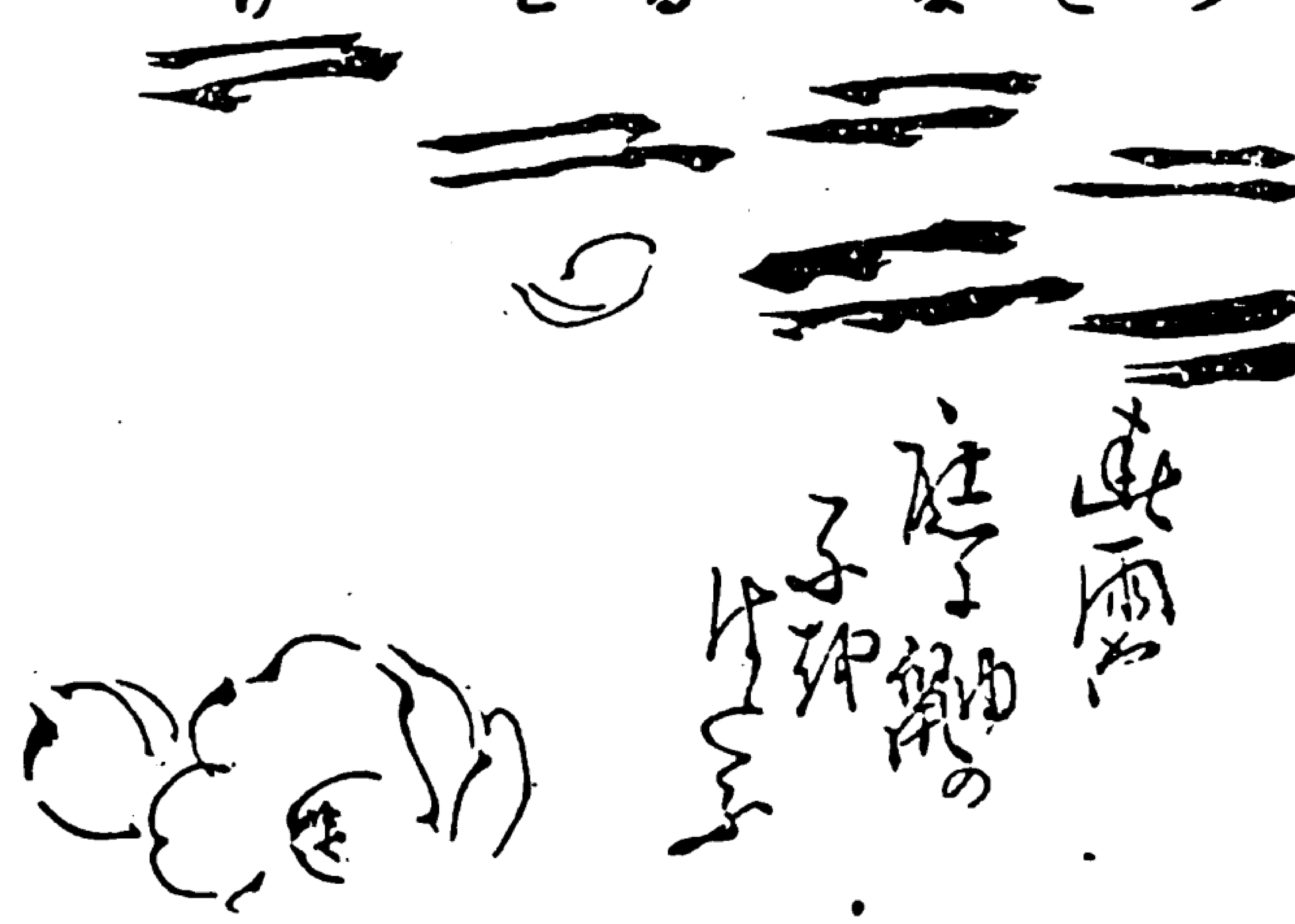
西洋竈の中にはとき／＼牡蠣の殼をいるべし。煉化のぼろ／＼に缺け、ひゞなどするを防ぐ効あり。

竈などに脂のかゝりし時は鹽をふりかけ拭ひとる可し。くさみを去る事妙なり。

帚、ブラッシユなどは、つよきアンモニア水に浸し、うちふりて、さつと水をきり日にかわかすべし。

（六）　睡眠

北枕を忌むは、我邦の風習となり居ることなるか、健康の爲には實は北枕をよしとす。是れ地球の南北極に走る電流の鉛直に躰を通りて自然に適ふ故なり。



枕はなるべく低く頸のまがらぬがよけれど、不眠病者は枕を高く足を低きく、坂の如くする者もあれば、一概には言ひ難し。臥するには右を下にする方よろし。別して食後は然すべし。

呼吸は必ず鼻にてなし、口は堅く結ぶをよしとす。子供の時より心して此習慣をつけしむべし。咽喉加答爾、肺炎、肺結核、實扶丁里亞などは往々開きたる口より入る。

（七）　興奮劑

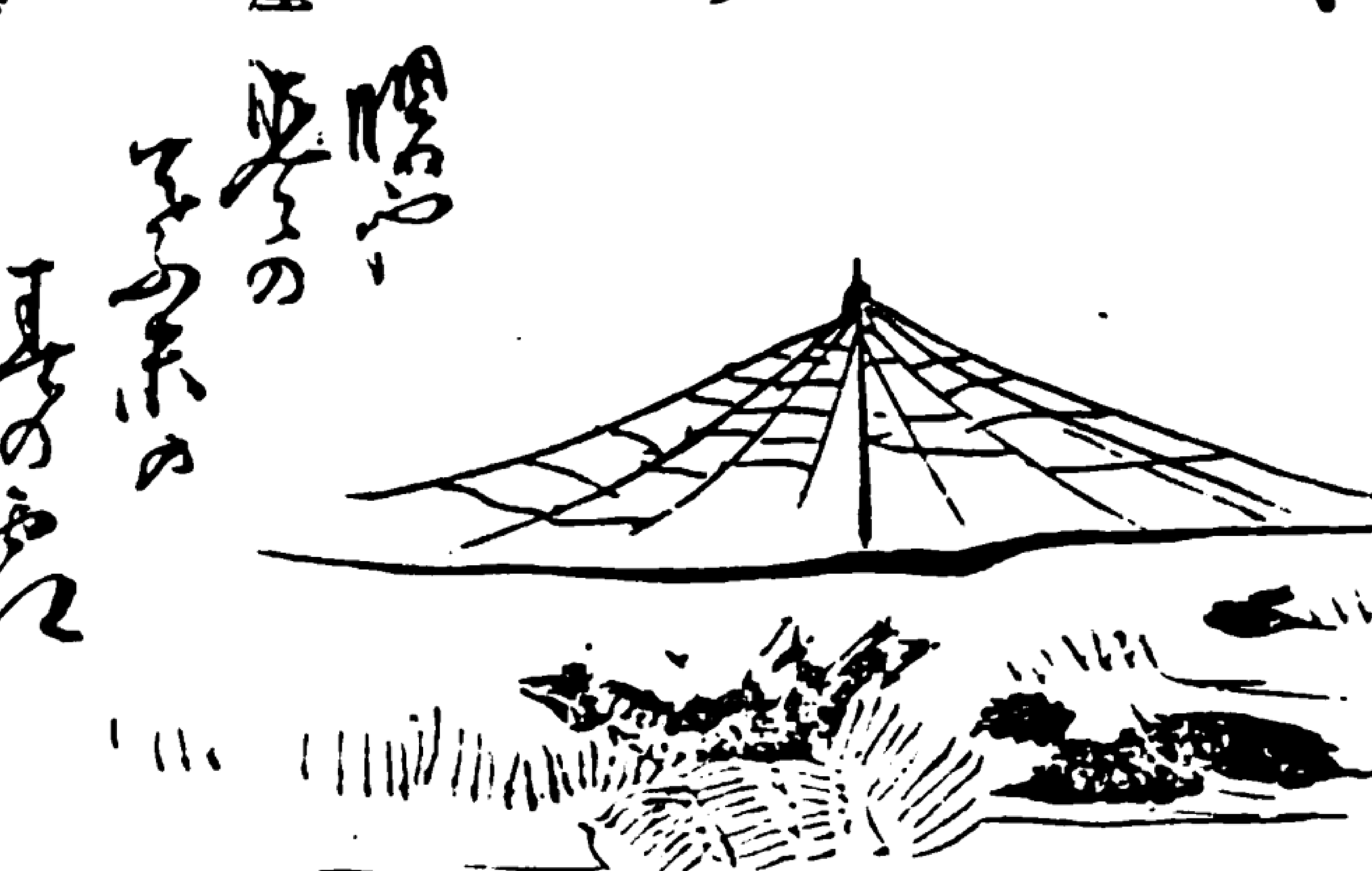
身躰或は腦をつかひて非常に疲勞せし時には、眠りも得せず、誠に途方にくれることあり。其時は樟腦湯二

オンス、アンモニア二オンス、鹽コップ一杯半、アルコール二杯とを壜或は徳利に混入し、熱湯を注ぎ入れ、栓をなしてうちふり、海綿か、フランチルの如き白き柔かなる切を浸して、躰を徐に摩すれば、忽ち疲勞を忘れて、すや／＼と安眠すべし。

猶簡易なる一法は、牛乳を沸騰させて、あつき中にのむにあり。腦にもよく躰のつかれもなをるべし。

(八)　縫箔物

レースや縫箔したる手巾などは、洗濯屋とか下婢に打まかして洗はしむるより、主婦自ら手を下すをよしとす。先づ白き上等の石鹸を清浄なる水を盛りたる鉢にとかして、石鹸水をこしらへ、これに手巾とかレースとかを一晩浸し置くべし。翌日に至りこれを絞り上げて、又他にこしらへたる石鹸水に浸し、そろ／＼搾りてはゆるめ、搾りてはゆるめして後、湯にふりそゝぎ、アラビアゴム一匕を熱湯一合にとかし、冷ゆるをまちてこれに浸し、輕く搾りてひろげ、うちふり、板ガラスの上にのばし干すときは、恰も新しきものゝ如くなるべし。



(九)　油煙

ランプの心を初め酢にしたしてかわかしゝを用ふれば、油煙の上る患なき事は前にも述べし如し。また蠟燭とても、吹消したる後に煙の立つは快からぬものなれば、これを上より下へとふかず、下より上へとふけば、一寸した違ひなれど餘程効ありと云ふ。

(十)　しみぬき

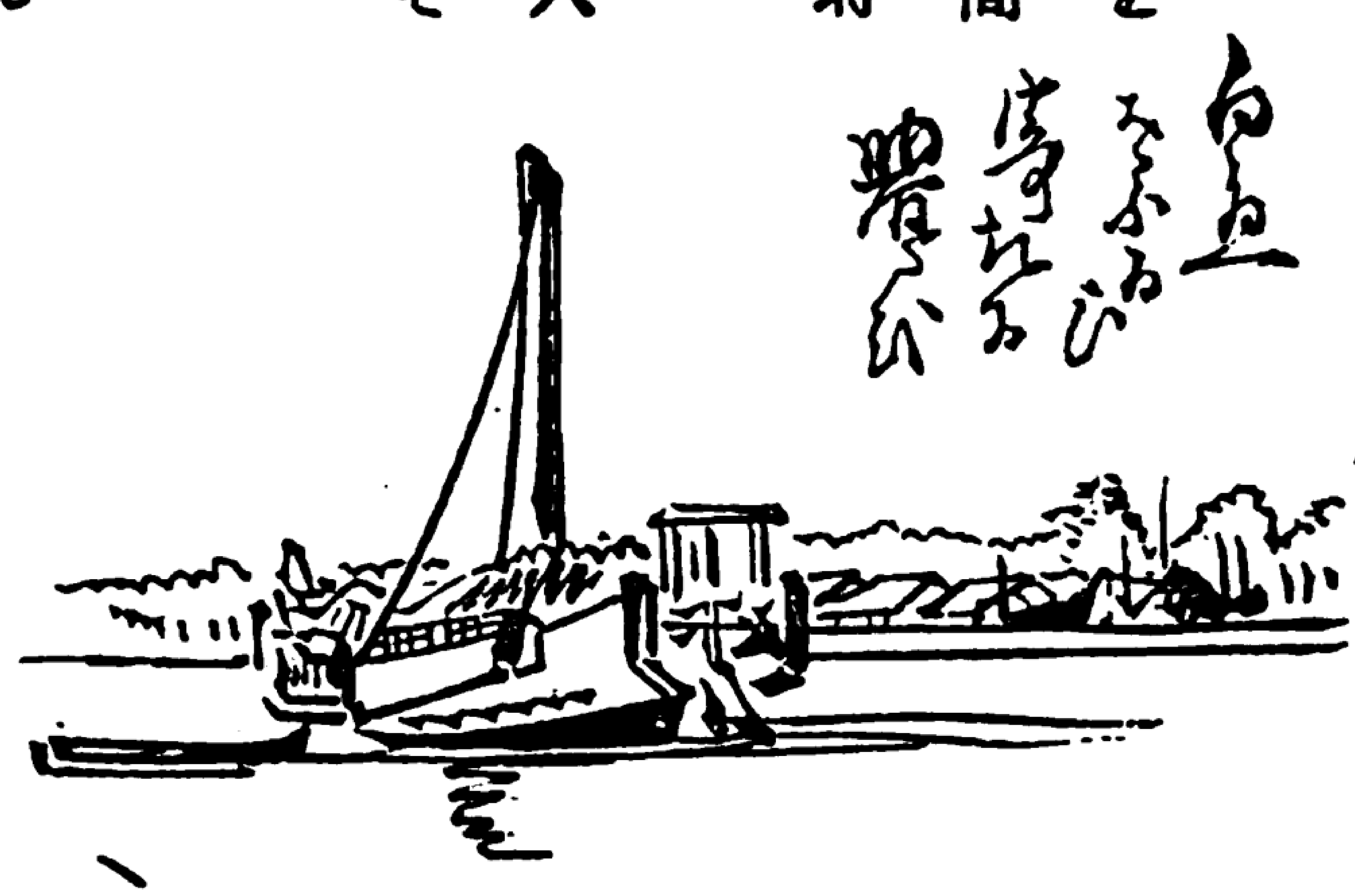
食卓の切のよごれたる程不快の感を催すはなし。よく

心して常に清浄にすべきなり。さて珈琲、果物等のしみは、直にあらへば石鹸湯にておつれど、古くなれば容易におつるものにあらず。其時は古くなつたる乳に一二日、其しみの處を浸し置き、後ひきあげて、しみのところだけに鹽をふりまき、草の上にひろげ干し、二時間ほどたちてこれを湯にふりそゝぎほす時は、もとの如く眞白になるべし。

インクのしみは、レモンの汁に鹽少く入れ、此液をしみにつけてもみ、冷水にそそぎて後乾すなり。

(十一) 卵の撰擇

卵の比重は古くなるほど減ずるものなれば、鹽水に浮かし見れば、古くなるほど浮ぶにより、直ちによしあしを見分くるを得。又殻の色新しき内は白粉をふきし如くなれど、古くなるに從ひ光を生ず。



(十二) 破れのつくろひ

毛織物フランネルのやぶれをつくらふに、多くは絹糸か木綿糸を用ふれど、これは保存によろしからず、なるべく毛糸をもてすべし。凡て切地と同質の糸を用ゆること肝要なり。又毛すりはげて、ざらりと糸すじのあらはれしところは、切りとりて他の切をやぶれよりもひろくあてゝつぐをよしとす。

(十三) 平民的盆栽

物ずきのやうなれど、不用の海綿、或は糸瓜のあかすりの古くなりたるをつりさげ、これに、苜蓿、縞稻、其他思ひ〳〵草の種子をふりまき、少しぬらし置けば、新芽出でゝ、おもしろきつり草となるべし。或は古きフランネルの切を、丼か深みある皿にしき、前の如く種子を

まき、水をふりかけ、日あたりよき處におけば、土なしに一のめつらしき盆栽を得べし。

食物の話

何事をするにも身躰が第一で、諺にも命あつての物種といつてあるが、人間の生活上衣食住の三つのもの注意すべき事は誰も知る處なるが、衣服、住居のことは先づ差し措き飲食物は其中でも注意が第一で、萬一にも不消化の物を食するか或は又た其食物中に寄生蟲とか毒な物とが混入つて居つたとか或は過度に飲食したとかからして身躰を害ひ思はぬ疾病を惹き起し容らざる治療又は心配を生ずることあり特に毎日三度三度の事なれば能く〳〵自ら注意すべきことは云ふまでもなきことなり



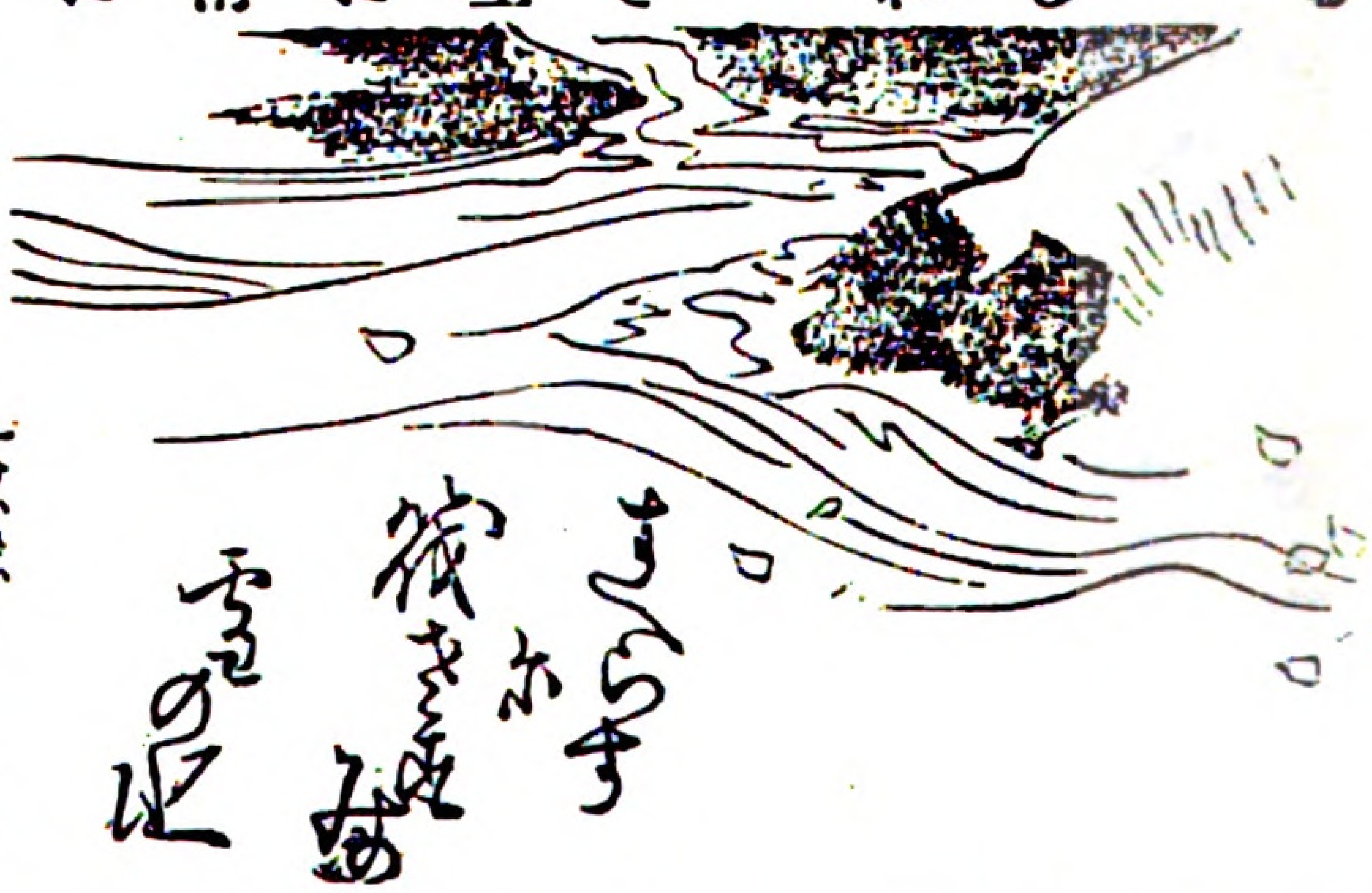
而して人間は食ふ爲めに生活するのでなく、生活の爲めに飲食するのであるから苟くも健康の爲め長壽の爲めからしても飲食物の撰擇の必要たる之れ亦云ふまでもなきことなり

却説、飲食物たる人間身躰の諸機關を發動せしむる温熱に必要なる燃料にして又た諸機關の缺乏を補給するもの言ひ換ゆれば營養作用に依りて消耗したるものを飲食物に依りて補給することで男女の別、年齢の差異或は寒暖、勞逸、病症等に依りて其の補給を異にすべきものなれども今之れが生理上化學的性質に依つて蛋白質、脂肪、含水炭素、鹽分、水分に大別す

○○○蛋白質　は血中に混して躰内を循環し組織の新陳交代を爲し又内臟の諸組織を構成する主成分を爲し初め

胃中に至り胃液の爲めペプトンに變じて後ち吸收せらるゝなり此の缺乏は他物にて代用すること出來ず矢張蛋白質を以て補給せざるべからずされば之を多量に食すればとて消化を爲さず躰外に逸出するのみ而して此の蛋白質に富むもの をぐれば肉類、穀物、卵、乳汁及菌類等にして我國には幸主食物として用ゆる米あれば之れより多量の蛋白質を取ることを得

脂肪　俗に脂身と稱ふ、或分中の炭素と呼吸より得たる酸素とを化合し躰温を生ずるのみならず又躰温を平均せしむるに必要なる燃料にして分泌作用を助け其消化たる腸に入りて膵液腸液の爲め乳化には石鹼化して後ち吸收せらる、乳中に酪となりて動物性食物中にあり又た植物性の油質となりて木の實蔬菜の種子中に存す



含水炭素　炭素、水素、酸素より成り躰温を生ずるに必要なる原質即ち糖分、澱粉質にして澱粉は口中にて唾液と和して糖分となり腸に入り膵液に混して消化吸收せられ血中に入りて燃料となり一部分は肝臓中にあつて再び粉質に歸る植物性食物中に多し

鹽分　は骨の百分の九十九躰量の四分三程を占むる主成分にして滋養物質を溶解し鹽分中食鹽は汗液兩便等に含まるゝものにて多量に躰内に入るも又日々排泄せらるれば躰内に蓄はへらるゝことなし

水分　大切なる飲料にして曩本誌にも揭載せられたれば畧す

（未完）

小兒の世界

冬籠りの慰み

黄花

此頃の如く寒き日には、子供等は外遊も出來ず、さりとて家にめつらしき遊もなくて、困りはて、遂には有害と知りつゝ間食にても與へざれば、誠に仕方なき事往々あるものなり。左の遊は面白くて、しかも子供に理學的考への材料を與へ有益無害の慰なれば、珍らしからぬものなれど、冬籠りの塲合に、子供に試みせしむるも亦一興なる可し。

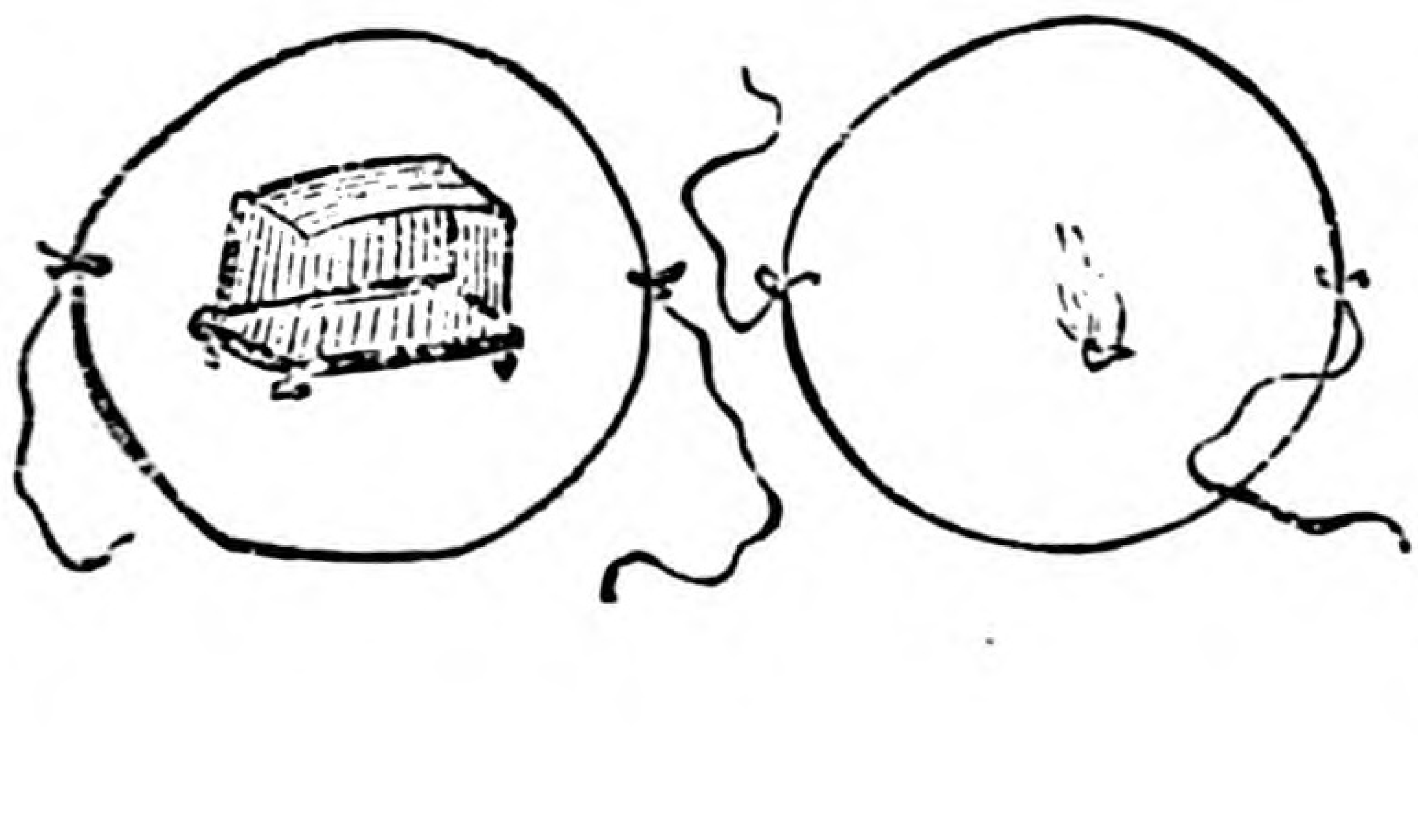


（一）栓吹き込み

壜の口よりやゝ小さきコルクを空壜の口にはめ、之を吹き込み見よ、容易の事におらじ。然るに今麥藁か筆の軸の如き細長き管をコルクの中央にあてゝ、圖の如く吹く時は、難なく吹込まる可し。此は何でもなき事のやうなれども、口にてふくときはコルクの周圍より這入る空氣、壜の內に入りて勢あまりて後へ戻る勢にてコルクをおしかへせども、管は口より出つる空氣少しももれず、從て內より押す空氣も弱き故なり。

（二）不思議の鳥籠

先づ厚き紙をとり、圓くきりて左右に紐をつけ、表に鳥籠、裏に其籠に這入るほどの鳥を倒さに書き置く事圖の如くせよ。兩手に紐をもち、表をむけて衆人に見せ、此空籠に鳥をいれて見せるといつて、紐をもつてくる〳〵まわすべ



し。恰も籠に鳥のとまれるやうに見ゆ。いとおもしろき遊なり。これは鳥と鳥籠にかぎらずいろ〳〵工夫してよ。

（三）　銀貨の飛出

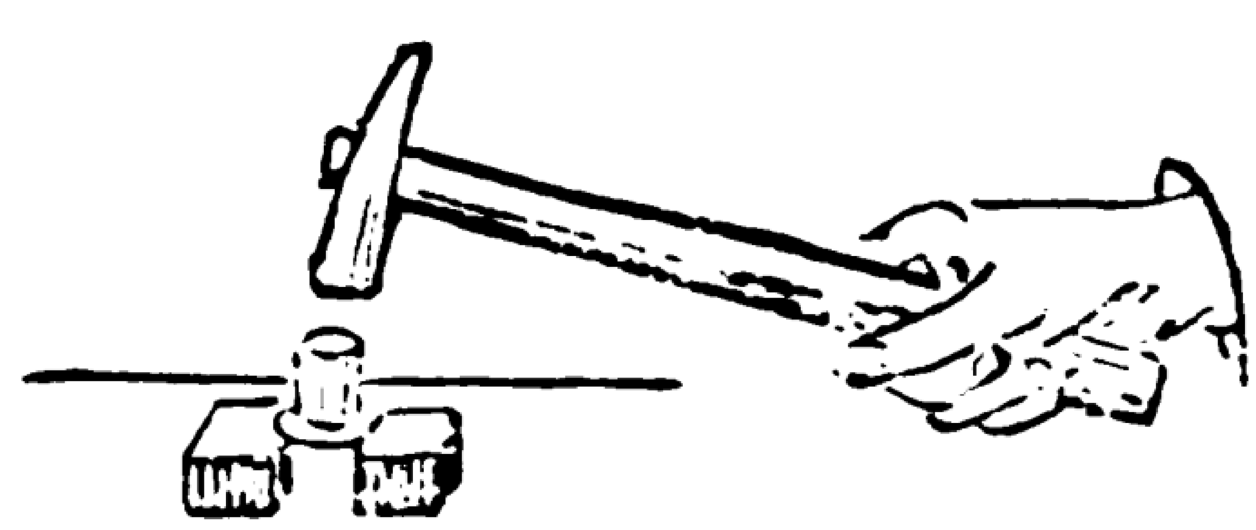
圖の如く硝子の小さき杯をとり、其中に十錢銀貨を入れ、壹圓銀貨にて杯に蓋をなし、手にて少しもさわらず十錢銀貨を出す法。即ち壹圓銀貨の端を見かけて斜めにふつと吹き見よ、壹圓銀貨くるりとかへる拍子に、十錢銀貨飛び出るなり。



此も空氣の作用たる事、とくまでもなし。

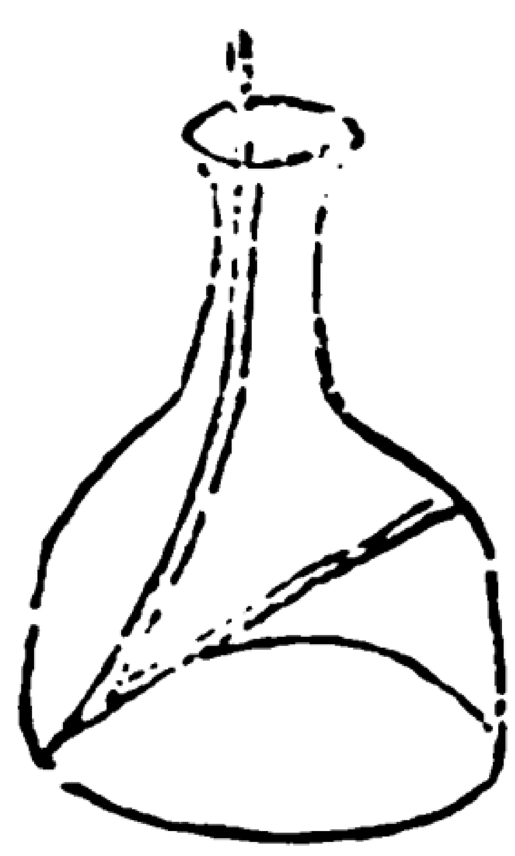
（四）　針の銅貨貫き

少し丈夫な縫針をとり、これを一錢銅貨に打貫いて見せむといはゞ、誰も〳〵怪しみ疑ふなるべし。併し此は容易の事にて、圖の如く机の上に木片か何かの二つの臺をならべ、一錢銅貨を其間にわたし、さて上等のコルクの眞中に右の針を通し、尖をしるしばかりあらはして銅貨の上に置き、鎚もて一擊につよくコルクを擊てば、造作もなく忽ち針は銅貨を貫く可し。



（五）　壜つり

硝子壜を麥藁一本にて釣り上げるといへば、出來まじきやうなれど、圖の如く、麥藁を折りて中に入れ、つりあぐれば、容易に上げらる可し。



新桃太郎

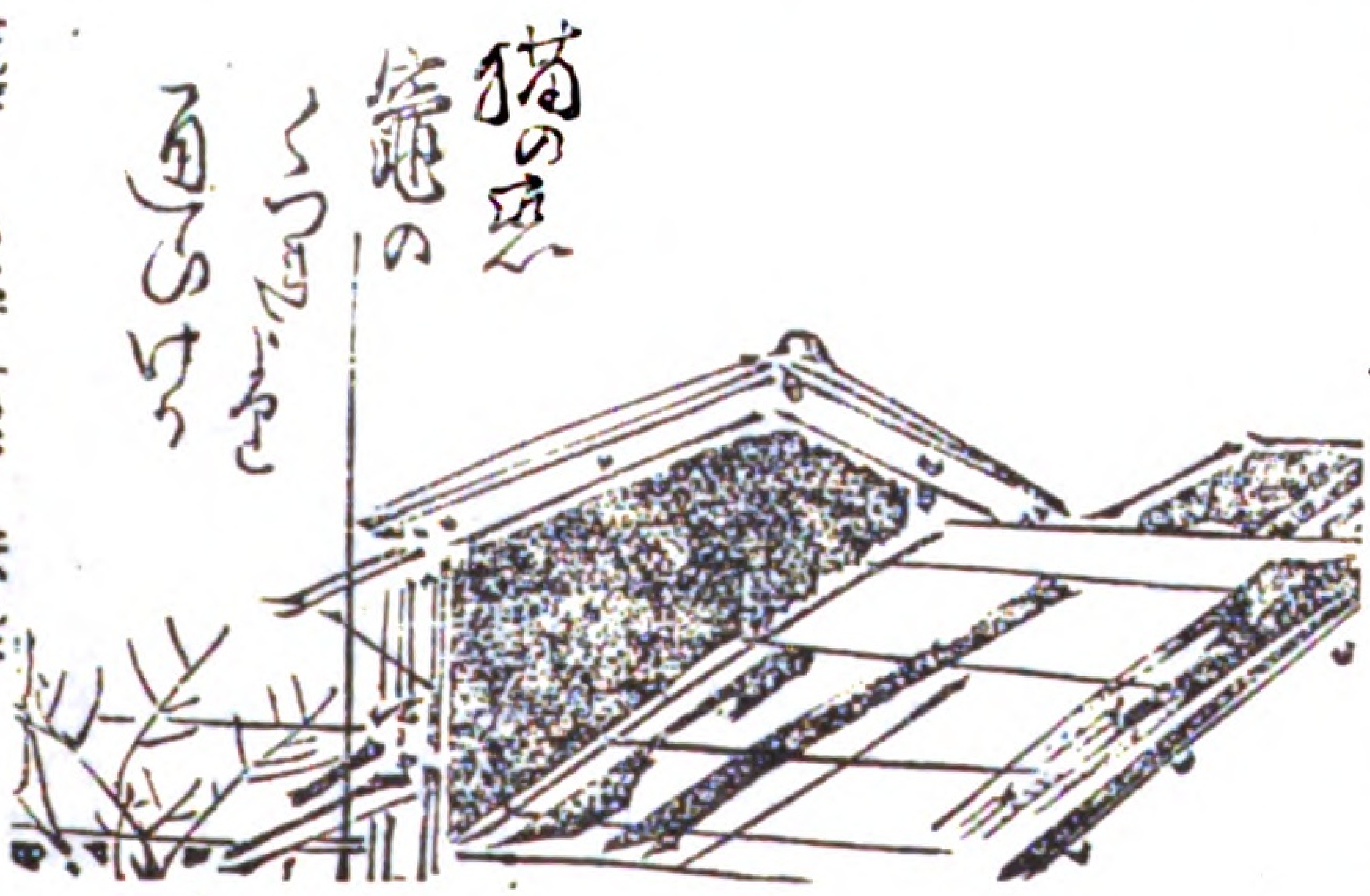
や、　ゑ、

先づある處に新桃太郎と云ふ坊ちやまがありました。

つね〳〵御祖母樣から先祖の桃太郎が鬼ヶ島へ寳を取りに行つた話を聞いてたものですから、自分も何樣かして一度その島へ渡つて行つて、先祖の桃太郎が取り殘した寳物を取つて來やうと思ひまして、いろ〳〵工夫して見ましたけれども、何樣していゝのやらサッパリ解らないので、啻毎日西の方ばかり眺めては考え込んで居ました。すると或る日のこと、坊ちやん御氣に入りのペチがやつて來まして、

『ワンだつて坊ちやん、そう毎日〳〵考へ込んで入らつしやるんです』。

『何、僕だつて何も考へてる釋じやないんだが、御前も知つてるだらふ、僕の御先祖の桃太郎樣は、鬼ヶ島へ寳を取りに行つたと云ふが、僕も何時か一邊その鬼ヶ島てえ處へ行つて見たいと思つてるのさ』。



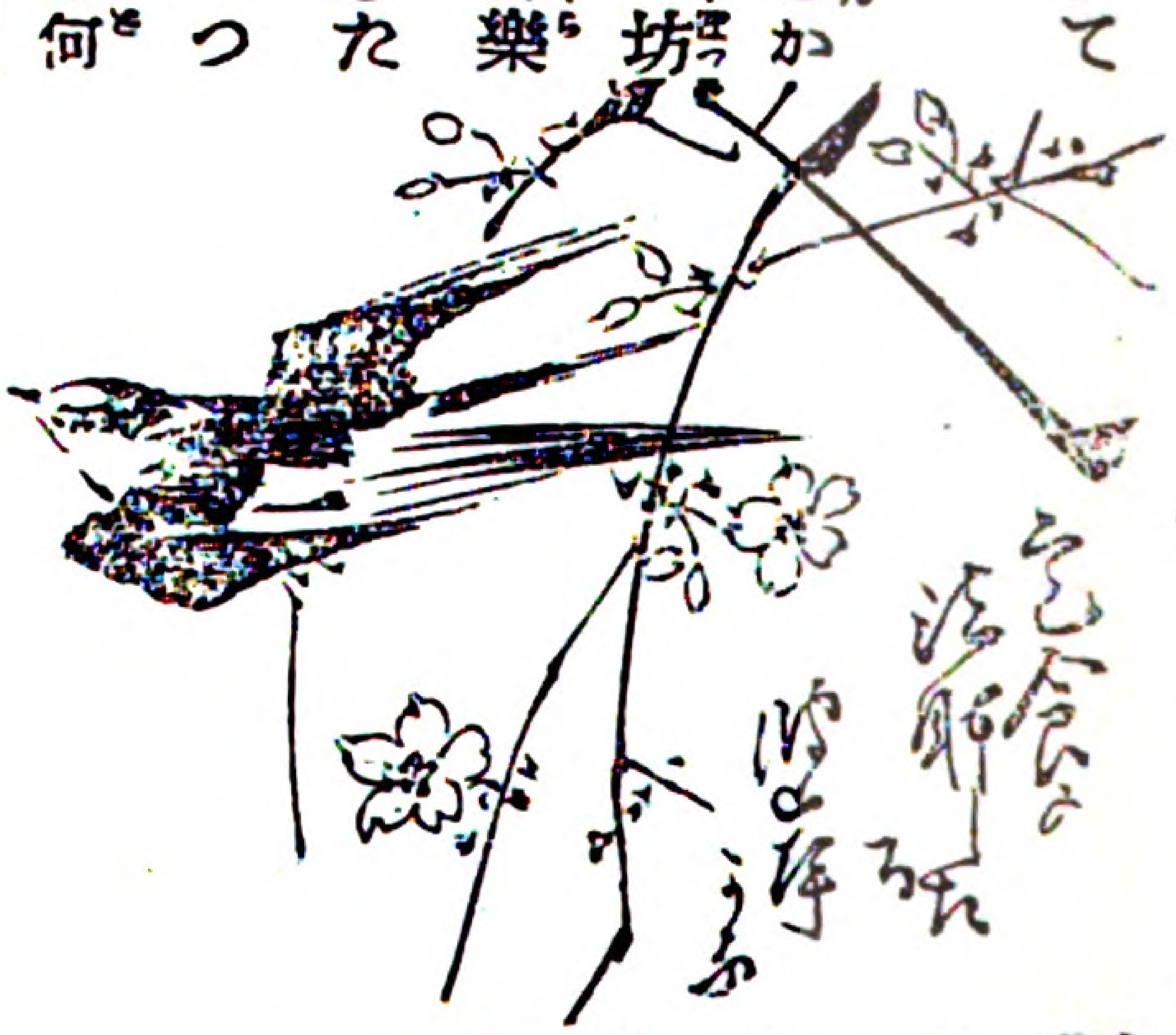
『ア、そうでしたか、それは丁度宜い鹽梅です、私も寳は其の鬼ヶ島へかねがね行つて見たいと思つてた處なんで。何樣せ犬と生まれたからにや、一生盜人の番ばかし爲て居るのも氣がきゝませんから、──何樣です、坊ちやん、一つ出掛けるてえやうなことにしちあ、エ、坊ちやん。何、路なんかチヤンと私が心得て居ります、大丈夫ですとも』。

『そんなら一番出掛けて見やうか』

とそれから坊ちやんとペチは御祖母樣に内所で、いろ〳〵仕度に取りかゝりました。先づ第一番には日本一の黍團子を拵へなきやならないと云ふので、黍を買つて來て、ソツトふかして、ペチが手

がへし、坊ちやんが杵で、裏の手水鉢でペッタラコ〳〵と搗いて見ましたが、何樣しても御團子になりません。仕方がないからマァ粟餅位で勘辨して貰ふッて、坊ちやん態々本郷まで行つて、粟餅を買つて參りました。

此れで兵糧は先づ整ひましたが、肝心かなめの雉子と猿がまだ出て來ません。坊ちやんは毎日ベチを連れて九段から神樂坂、市ケ谷の邊を歩きまはつて見ましたが、當節は雉子も猿も仲々コスくなつて、三日の間一匹も『桃太郎さん〳〵何處へ入らつしやいます』『鬼ケ島へ寶を取りに』『御腰のものは何で御座います』『日本一の黍團子』『一ッ下され御伴を申しましよう』ッてやうのことを云つて來るものがありません。坊ちやん、此れでは少し約束が違ふ樣だ、まさか粟餅だから泡食



つてマゴついてるのでもあるまいが、と思ひましたけれど、何時まで經つても出て來ないのには閉口しまして、とう〳〵淺草の公園地へ行つて、文久一つで胡蘿蔔買つて一匹〳〵聞いて見ましたけれど、皆んな野暮な猿ばかしで、テンから御免蒙つてしまひました。そこで坊ちやんも暫らく腕を組んで何樣したらよからふと考へ込みましたが、

『ア、そうだつけ、橋場の爺やが能く家へ連れて來た五助ッてえ猿は、なか〳〵利巧そうな猿で、僕とも仲が善かつたつけ。一つあそこへ行つて賴んで見よう』。

そうだ〳〵と云ふので、急いで橋場まで行つて見ますと、丁度爺やは留守で五助ばかしが窓の柱に繋がれて居ました。

『アヽコレは坊ちやま、ようこそ、何樣して此んな處へ入らつしや いました、向島へでも御遠足ですか』。

と五助が云ひますので、

『イエ、遠足でも何でもないんだよ。實は御前に御願があつて來たのサ。』

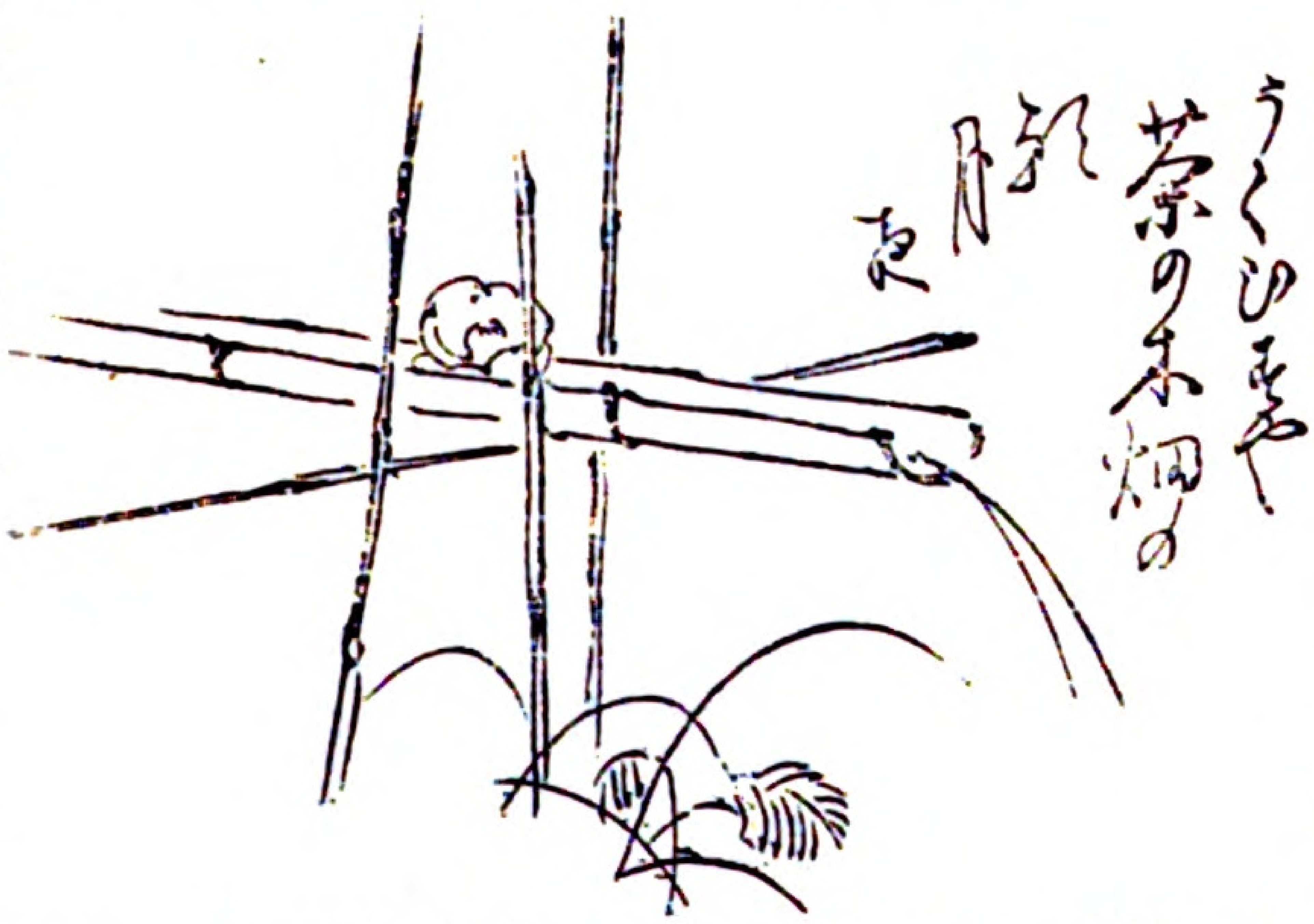
『ヘエ、私に御願ツて一躰そりや何なんですか』。

これから坊ちやんは自分が鬼ケ島へ寶を取りに行かふと思ひ立つたことゝから、ペチが早速賛成したこと、黍團子の代りに粟餠を買つたこと、何んなことをしても猿と雉子とが目つからなかつたことなど話して、何樣だ御前一番奮發して一所に行つて吳れないかと云ひますと、

『それは此方から願つても御伴いたしたい處なんです、是非、どうか』。

と云いますので、坊ちやんも悦び、五助も悦び、合せて入ろこび大悦びで、ころ〳〵ころげて家へ歸りました。

家ではペチが首を長くして待つて居ましたが、坊ちやんが五助を連れて歸つて來たのを見て、此れもチン〳〵してうれしがつて、サァ此れからは雉子ばかりだ、雉子〳〵〳〵、雉子雉子立つて步まねえかツて云つて見ましたが出て來ません。すると急に椽側の方でベタ〳〵〳〵何かの足音がするかと思ふと

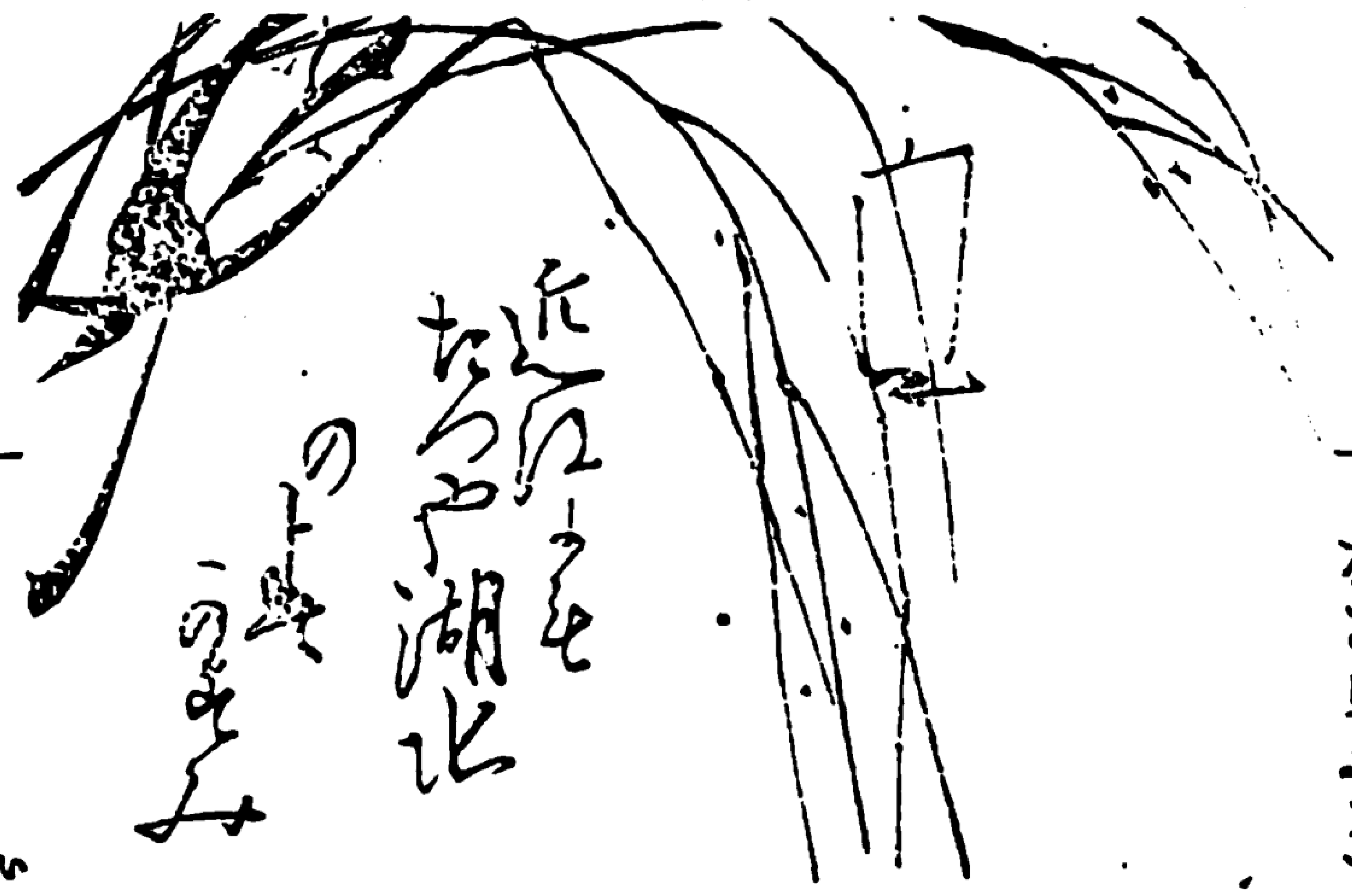


『グワ、グワ、グワ、グワ、グワめんなさい』

と云ひながら小さな冠をかぶツた奴が這入つて來ました。坊ちやんは非常にビツクリして、

『ナ、、、、何するんだい、一躰御前は離れだつてんだい、人が相談して居る處へ斷りなしに這入つて來たりなんかして。』

『グワ、グワ、グワ、グワ、グワめんなさつて下さいませ。私は御泉水に居りますガラ平と云ふ鵞鳥で御座いますが、今一寸沓拔の處で伺いますと、何か坊ちやまがたは鬼ケ島へ寶を取りに入らつやるッてやうな御相談ですが、なんと御願で御座ります、此のガラ平をも御連れなさつて下さいませぬか。何にも御先祖が雉子を御連れなさつたからと云つて、坊ちやまも是非雉子を御連れなさらなきやならないつてえ事も御座りますまい、私しや此んな躰をして居て、歩き方こそ隨分御可笑しう御座いますが、イザとなりや、何、御役に立たないものでも御座いません。マア、早ひ話が、坊ちやんがたが一寸河でも御渡りなさらふッてな時にや、私が早速船になつて御渡し申しませうし、首を延ばして橋にも成らふッてたやうなもので御座んす。是非御連れなさつて下さいませんか。ヲイ、ペチさん御前も友達甲斐もない、何とか申上げて呉れないか、ヲイ。』



ッて、鵞鳥があまり熱心に願ふもんですから、坊ちやまも、それじや、若し途で雉子に出合つたら雉子をも連れて行くことにして、ガラ平をも連れて行つてやらふと云ふんで。腰から粟餅を出して皆に食べさせて、愈明日は新橋の一番列車で鬼ケ島へ出掛けると云ふことになりました。

（まだある）

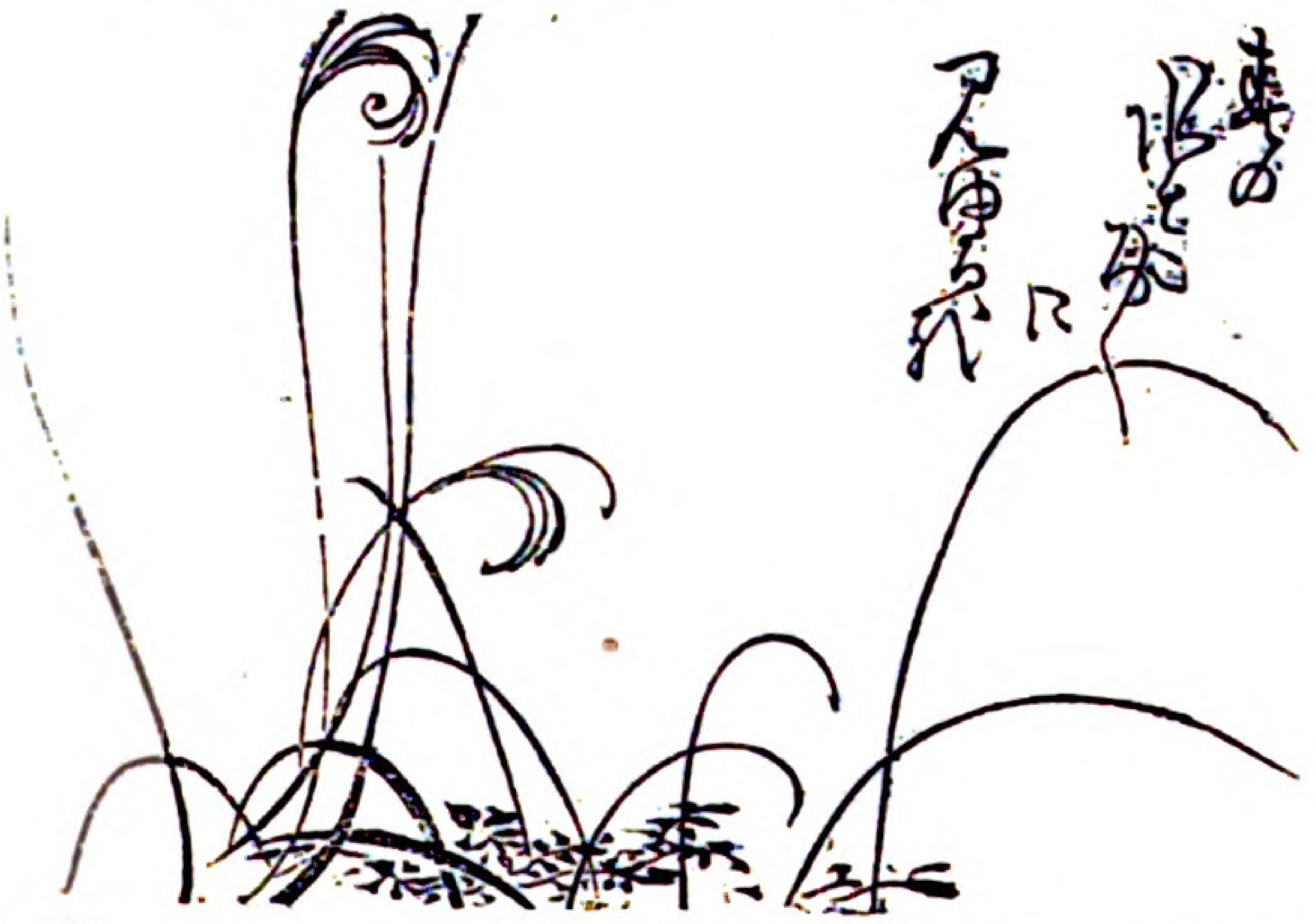
近着紹介

加茂眞淵全集　佐々木信綱氏編

續歌學全書の第一編にして、國文の中興ともいふべき加茂眞淵翁の歌、文、歌論等を蒐め、之に其社中の歌集、長流東麿春海等の歌集及國歌八論を網羅せり、國文學に志あるものは是非とも一本を具へて大なる益あるべし（日本橋區本町博文館價三十五錢）

新著月刊

一月發兌の新著月刊中柳浪子作の「羽拔鳥」は女性の讀者に紹介して一讀されんとをすゝむるに足るものなり、一人の心雄々しき女子が、兄の無賴に妹は妓に賣られ、おのれ看護婦となりて母一人を養ひ、その間に兄をこらし母をいたわりて後におのれは病院の患者某に慕はれてそれに嫁せば幸なるべきを、おのれの情を家の爲に犧牲にするといふ筋なり、家庭のありさま母子の情よく描かれたり。一讀おのづから省み感ずるの節多し、（今川小路東華堂）



◎女鑑第百五十號　築地　國光社
今様の文明（社説）

◎婦學裏錦第六十三號　駿河臺　尚絅社
婦人の德性（社説）

◎婦人新報第九號　澁谷　婦人新報社
福澤先生の一夫一婦論を讀む（社説）

◎日本の家庭第三卷七號　牛込　日本の家庭社
眞正の幸福、明治の女子に望む

◎花の園生第八年三號　本郷　文明社
庭訓者としての母親（坪内文學士）

口繪之解

本號の口繪は、伊太利中古の畫にて、妙齡女子の肖像

なり。頬の豐かに肉つきたる、眉の霞に浮べる遠山の如き、眼の大きく明かにして、清らに彼方を仰ぎたる眸采、鼻といひ唇といひ、端麗の容清婉の態、高くして愛すべき風情、また一點のなまめかしき所無く、なほ世の塵に染まざる處女の姿、寫し出されて精巧なりといふべし。之に對して繪ける人を想ふと共に、繪かれし人の如何にそが心の清くそが品性のあどけなきかを想うて、心地おのづから氣高くも覺ゆる、これはた傳神の妙技によれりとやいふべき。

小說

椎の蔭

金子笹下菴譯

（一）

立派に晴れきつた、而も凍えきるように思る寒いクリスマスの晩。

テンマルク邸の自宅を出で丶、夜の中マノル家に着うとした、マノル家とはリオン町近くで、ハムプシヤと云ふ處の海岸に建てられてあつた、何しろ隨分と長い旅なので、勿論樂しくはなかつたが、その夜の景色は今にも忘れられないほどである。丁度三日前から雪が降り續いてゐたので、世界は隈なく清き白衣につゝまれて、薄黒い夜の空の下に眞白な雪の眺は又一としほである、凍つた雪は降つてゐる雪よりか麗はしく、天は此二ツの美で確に聖クリスマスの晩を飾つたのである、雨が俄に來て雪を溶したので、忽にして世界は又一變した、

＊　＊　＊　＊　＊

妖雲一過、月は眞晝の如く照りわたり、烈星粲然として靑みきつた空は何處迄も遠く、高く、一片の雪をものこして居らず、遠慮なき月の光は眞裸体な畑や高き道に清き姿を投げかけて、軒端や木の枝にたれかゝつ

てゐる氷柱やら、籬の上に降りたる霜やら、桂の葉に殘る雪やらをきら／＼とひからせてゐる。

クリスマス星は、はつきりと輝いて、今宵をことほぐ歌の聲は到る處の空にみちわたつてゐる、少しうす寒い風が吹きだすと間もなく、雲は月の面をかすめ、星に一つ一つに光をかくし、空は段々と暗くなつて、雪さへはらはらと降りだして來た、自分が倫動を出發したのはクリスマス祭の恰も頂上に達した時で、戸毎に麗はしく飾られたる、人々の顔付見るとして樂しさうなる、祝の鐘は到る處にきこえて、口々にとなへらるゝ喜びの聲と相和してゐた、

田舍にいりこむにつれて、四面全く靜になつて來て唯だ木枯の時々枯枝を裂ふ音、吹雪のさらさらとやわらかに車窓にあたる音のみである、

滊車は小奇麗な昔風のリヰン停車塲に着いた、夏は大きな栗樹に覆はれて、なかなか趣ある停車塲である

自分が車を降りるとリヰン河の流の樂しさうに流るゝ水音、河面にかゞやく星影のきら／＼とうるはしき、いづれも今宵の心を歌ふように思はれた、プラットホームには唯一人の驛夫がゐたばかりで、滊車にのり合せたのは自分一人のようであつた。

「…ノル家から馬車が來て、待つて居りますよ貴君」と驛夫は帽子に手をかけながら言つた、自分は彼について大きな廣ろびろとした停車塲をでると、そこに二頭立の馬車がゐた

「ブン、マノル家からまゐつて‥‥」と馬丁は言ひも了らぬに早や白く凍つた道を走りださした、音面白きリヰン河の流も、松の並木に聞ゆる風の歌も皆なあとに殘して了つて。

＊　＊　＊　＊　＊

自分は今倫動からマノル家に出向いた理由をかいつまんで話さねばならぬ、もともと自分はリンコルンイン

にある會社の役員なので、自分の住居はデンマルク丘にあつたのだ、會社と云ふは能く世間に信用もあり勢力もあつたので、重に手確い人々を相手としてゐたのである、

今から二十年前、同じ仲間に二人の從兄弟どうしで、ベルスホルドとルッペンと云ふのがゐた、ベルスホルドはその後田舍に住ひルッペンは印度に旅立した二人共才氣ある壯漢で、自分とは同じ務の上から自然親しくもなり、なかなか離るべからざる交友と迄なつてゐた、

双方も大の野心家で、ベルスホルドは田舍に澤山田地を持つてそのあたりに住みたしと云へば、ルッペンはまるで反對の田舍厭で、田舍生活といへば頭からさげすんでゐたのである。

「印度改革事業てッば僕には非常な望みあるもんだからね、君などが一ヶ年もかゝつて撒いた種の結果を見てゐるような迂遠様とはちと仕事が違ひますからね」、

「ぢやうだんお言いなさい、君なんか所詮財はつくれんよ、君や由來金をつくり得る底の人物ぢやありませんからな」、

「處がです、時といふものが來ましたらね、僕の言の眞理とならん日が來ましたらサ、流石の君もだ、なるほど彼奴も金をつくり得る才だつたかなと驚かずには居られんでせうて、はッゝゝゝ」

「否や駄目です、契つて出來んサ、出來るものぢやありませんな」

「今に御らんめされサ、あッは〱

如斯は二十年前、二人の間に話された會話で、僅に自分の記臆に殘つてゐるのである、その後二人の消息は烟の如く、ベルスホルドが持參金ある婦人と結婚してハムプシヤにかなりの資産をつくつたこと、ルッペ

ンが印度にわたつて妻が死し、新たに一人を迎へて、少さな娘をベルスホルドに預けたことのほか耳にしたことはなかつたのである、

だのに驚くまいことか、印度で屈指と言はるゝ會社から、自分の會社に向けて、チョン、ルツペンの死を報せて來たことである、ルツペンからも長々と遺言が添へられて、あとの資産を娘にわたし、他十萬金を世話になつたベルスホルドにわたしてくれとの書き置きである。且つなほ附記して、自分が生前の望は非常な資産家となつて、娘リオラと安らかに故國に老を養ひたい心組であつたことから、娘のためには何事も献身して了いたかつたこと迄細に記してあつた、自分はこれを讀むで、先づベルスホルドならば彼の遺言を傳へ娘の前途も遺産の所置も皆な安じて托するに足るものと信じた。

自分等は一日務のなかて、ルツペンの遺言を操りかへして、かゝる資産がルツペンの手でつくられたのが寧ろ妙に感じられた、リオラは確に英國で財産家の一人娘となつたのである、

「あの人は始終、金持になるんだつて言つてましたつけね」と仲間の一人が言つた「はら覺えて御ゐでゝせう、能くベルスホルド樣に笑はれましたね」

「左樣でしたな、然し一生金をつくり續けたのですな私などは一層のこと費ふのを多くして、ためるのを少くした方が面白からうと思ひますな」、

「處が何でせうて、あの人は費ふよりかためるのが却つて面白かつたかも知れませんね、まあ私どもにやためる方が可いようですね、

「兎もかくベルスホルド樣に御報せなさい、すつぱり打ち明けん方がよろしいかも知れませんぜ、遠い國ではあるし娘の好みもありませうし、又先生の考もありますからね、そこに日頃の御手腕を要しませう

て」、
自分は直ぐペルスホルドにルッペンの死亡に就て話したいことがあると云ふてやつた、ペルスホルドは間もなく自分からその事をきくのは嬉しいと云ふことから舊交をあたゝむるの樂しさから、クリスマス祭を一緒に過さうと云ふことを迄しるしてよこした。
因で恰もクリスマスの晩、若き婦人、――いまだ嘗て見たことのない、二百萬圓の資産を有つべき婦人を尋ねようとしたのである、何しろ隨分面白い又妙な仕事なので、道々種々な考が浮むだ、先づ娘といふはどんなもの、うつくしいのか、世間並か温和な方か高慢なのか自分は今その娘に二百萬圓をわたしにゆくのである二百萬圓！娘はまだ知るまい、恐らく知れまい、否や知れるものか二百萬圓！
自分はやくたいもなき想像にかられながら、馬車の上にねむつてゐた、漸く家に近くなつたので、音樂の微にきこえて何となく自分の心は時めいて來た、過ぎ去つた青年の二たびかへつて來たように、地獄から天國にでもひきあげられたように。
自分は又全心を娘の身の上に奪はれた、間もなく馬車が門に着いたので自分は降りて家まで歩るいてみようと馬丁に言つた、實は日頃倫敦化せられた自分の眼には雪と常盤木の上にかゝやく月の眺が別してめづらしく思はれたからで。

（二）

門から家に達する道はかなりに長くて、兩側は深き常盤木で繁つてゐた、大きなる桂は葉毎〳〵に雪の冠をいたゞいて、冬の眺は確にこゝに盡きてゐたのである老ひたる聖樹には赤き實の澤山葉蔭に見えてゐて、緑したゝるばかりの葉は眞白の雪を月にてらさせて頗る妙を極めてゐた。
自分は餘り景色のうるはしさに見とれて、立ち止つて

眺めようとすると怪むべし、何處ともなく微かな咽泣の聲がした、否や自分の聞き違へかも知れぬ、唯見るはるか彼方の大きな窓から光がもれて、左側の池の氷りきつた水面に映つてゐた、夜色沈々人影の見ゆるでもなき此あたり、不思議や咽泣！はて風の下葉を襲ふ音がしら！　自分は池に添ふた小路をたどる間もなく古風な灰色の壁の家が尺前に現はれた、廣き窓からは肉色の赤き光が洩れて、恰も外面の雪をあたゝめてゐるようである、自分は端なく又不思議な咽泣を思ひだして、どうも變だ、否や何でもない、無からう、何がゐるものかけれども、確めずには居られないような氣がして好奇にも自分は再び以前の處にもどつてみた、驚くべし、咽泣は事實であつた、一番大きな椎の木の下あたりで、池に近いところらしく思はれた、何の影も見えぬけれど確に婦人の聲、而もふるえて、腸のちぎらるゝような切なき泣聲である、勿論雪はやむで地は固く氷り、月は隈なく照りて、星さへ靜な空の白き世界を吾もの顔に輝かしてゐる、何人ぞ淸きクリスマスの晩、天使は歌ひ人は望にみたさるゝといふ此の夕一人小暗き木の下に、怪しき聲を泣くものは！

自分がからくして雪の氷をふみながら椎のもとに近よつた時、果然丈高く、若き痩せた婦人の姿が現はれた黑の肩掛を被ひ而も甚く愁はしげの相をあらはして、黄金色の髪の毛なら、雪をあざむく領首なら畫か想像ならすば見られないほどのうつくしさである、けれども不思議―。あの涙、あの咽泣！

「噫ゝ妾は不仕合なんだ、樂もなければ望もなし、これほど廣い世間に誰つて一人、愛してくれる方もなく氣をつけて下さる人もないなんてッ！」

絶叫んだまゝ、突然默つて了つた、蓋し自分が側に來たのを知つたからで、双方とも少時、あつけにとられて唯だ茫乎と見つめてゐた、疑もなく彼女は生命を捨て

ようとしてゐたのである、

「貴君はどなたですか」、到頭彼女は眞白な手をうちながら尋ねた「どなたですか貴君は」、

「お驚きなさるにやゐ及びません」と自分は優しく言つた

「いゝえ驚きは致しません、きつと覺悟してゐつたのですから」、

「はあ、何をなさるつもりで、こんなとこにいらしつた」、

「死、死のふと存じまして」、

「えッ、死ぬですつて、クリスマスの晩、そんなお若くつて、そんなにおうつくしいのに」と自分は思はず叫んだ。

「あゝ私の若いのも考へて見れば却つて私の不幸なんでした、私は何故クリスマスの晩死なれないんでせう、クリスマスつて何でせう、世間で樂しがる時にひとり悲しい私にはクリスマス星も、鐘も、常盤木も、あゝ何になる、何でもないわ、泣いても泣かれぬ悲しい時、こんなものが何だつて。」

言ひきつた顔付の如何にも平氣なのが月の光にありありと讀まれた、自分は非常に驚かされて、「ほんとに不思議だ、變だ」、自分はつくづくと椎の下に立てる少女をながめて、ふとヂョン、ルッペンの面影そのまゝといふことを思ひ當つた、二十年前の知己、而も多くの知己のうちで最も美男の一人に數へられたあのルッペン！　思へば長く細き眉毛、やさしき謙遜な眼ざし、丈の高さなら、躰の格好なら、宛然で昔のルッペンその人であるけれども、今生命を捨てかねし人、二百萬圓の資産をひきうけべき人、餘りに案外過ぐるのである、

「どなたですか貴君は」、と彼女は繰りかへして尋ねた

「どうしてこゝへ私の傍へお出でした、私しや誰にも

見つかりはしまいと思つてましたのに、え丶貴君はどなたですか」、

「お話し丶ませう、然しとても信じては下さいますまいな、私は貴孃のお父樣の朋友ですよ」、

「えツ私の父のお友達ですつて」とくりかへして「私の父のお友達！ほんとにさうなんですか私の父の！……………」、

「貴孃はヴヰオラ、ルツペン樣でせう」と自分が言ふと彼女は益々驚いて「はい、妾がヴヰオラで」、

「それぢや貴孃、死ぬどころぢやありません、大變な幸運が待つてゐますがな貴孃」

「否えうそです、そんな理はありません、幸運なんて私にあるものですか、私にや父もなければ友達も…………唯だ一人の、それも私が不幸にして了つた一人の友達のほかは、ですから幸運の何のつて開けようが御座いませんもの」、

「一躰何歲ですか貴孃は」、

「十八なんで」と淋しげに答えた、

「それぢや、貴孃まだ失望なさるのは、早過ぎやしませんか」、

「否え、若いですから、なほのこと悲しさが耐へきれませんのと」、言ひきつて暫く默してゐたが又急に思ひだしたように「どうして貴君は此處へいらしつたですつて」

「私ですか、私はヤール家に用があつて來たのでしたすると何だか可怪な泣き聲がしたのでこ丶まで來てみたのです、何だと思つて」

「それではまだ全く私に生命がありますのでせうか、人に見つかるなんて、貴君の御姓名は何と仰有いますの」、

「御存じないでせう、私はな、レヰチルつていふんで久しい前でしたよ貴孃のお父樣とお交際ましたの

は」、

「私の父と御交際ひ下さいましたつて仰有るの」、と同じようなことをくりかへした

「さうです、お厭でなくは貴嬢のお友達にもなりませうと」自分はせわしなく言つた、

「そしてお打ち明けなさい、どうして死ぬなんて考へたのですか」と言はれて彼女の心は甚く動かされた友達になつてやるの一言、今の彼女に千金よりも貴く思はれたのである。

「もうもう私は耐へきれませんでね、苦しいばかりなんでしたもの、貴君は私がぢやうだんにこんな眞似をしたとお思召なさるんですか、私はほんとに死のふとしてこゝに來たんですよ、處が池が固く氷つて了つてましてね、どうもしかねてゐたのです、勇氣はありますけれども方法がありませんかつたので、然し今はもう死なゝいで可いことしたと思ひますの貴君がお友達にして下さるんだから、ほんとに貴君は私を救つて下すつたのですね」、

「さう思つて下されば、私も嬉しいです」と自分は言つた「生きて御いでなされば大變善いことがあるのです、ですからお話しなさい何故それほどに思ひたつたのかその理由をサ、まだお若くつておうつくしいのに」、

「妾がうつくしう御座んすつて」、と怪しげな聲で泣きこんで尋ねた、

「はあ、おうつくしいです」、

「貴君はマノル家に長くおとまりのお心算ですか」と問ふたから「左様少なくとも兩三日間は」、

「では別段お話しまうしません、貴君が一日でも御滯在なされば直ぐおわかりになることですから、私はほんとに父もなく友達もなく、どうしても死なゝければならなかつたのですもの」、

自分は突如、彼女の手をとつて、固く握つて「貴孃のようなうつくしい方を愛してくれるものが一人もないつて」と叫んだ、彼女の顔色は一變した、

はい一人御座います、でもそれは無理なのでして、

「私にはお話しまうしきれませぬ、ほんとに妾は不幸なんですもの」と言つて又悲しげにうつむいて了つた、「私はこんなことを言ふと狂女みたようですね、えゝもうまうしません、直ぐおわかりになりますよ貴君」、

二人とも少時默してゐた、で自分は到頭きりだした、

「私がマール家に來たのも實は貴孃にお逢ひまうしたいので」、

「私にお逢ひなさりたいつて、ほんとですか、私に逢ひたいなんて世間に一人もありませんわ」、

「否え實際、私は貴孃をお喜ばせまうす用を帯びて來たのです」、

「喜ぶことですつて、御間違ひでせう私にとは」、

「ほんとです、ほんとです、いづれお話し致します、然し誰にでも私に逢つたことを話しちやなりませんからね、若しお家でお目にかゝつたら、初見のつもりでね」

「ようございますとも」、と彼女は答えた、

「では一先づお別れ致します、然し必つとお忘れなすつちやいけませんな、死ぬなんて愚なことをなさつては」、

「待つてゐる價値がありますかしら」と云つた時の彼女の眼は言ふべからざる苦痛を現はしてゐた、

「さうです、お待ち下されば必つとわかります」と答へて別れた時、自分は色々と昔の詩など思ひだした。

＊　＊　＊　＊

世をはかなむはおろかなり
人をうらむも仇ならむ、

老もわかきもおしなべて
　富める貧しき世にあれば
忍び待つべきことのあり、
　黄金、鐵、さまゞゝに
定められたるたからをば」、

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊
＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊（以下次號）

競馬

佐野天聲

《上》

起きるから寢るまで、穀つぶしよ畜生よと、口きたなく罵られ、眞實の父様か生存て居て呉れゝば、此様絶望ね可悲い口惜い、うい目つらいめは見ないものをと肌薄き破衣の袖に露しげく、骨あらはれし頬に涙拭いて呉るゝ實母はありながら、繼父づきの、自分にはなんにもならぬ人でなしの、朝から晩まで白粉に埋まつて、ちやら〳〵と歳甲斐もない姿見るばかり、聞くもの觸るゝものゝ癪にさはる種となつて、隣家の吉ちやん、對家の仙ちやんと遊ぶのも氷の上を蹈む樣な心持、今年やつと十二の身に浮世知り初めしあはれさいぢらしさ。明日は隣村の競馬、一年に一度の此邊には珍らしき觀物と近郷の老若出盛りには東京の淺草の緣日觀るやうなと何處やらの爺が禿頭なでゝの話しなりしが、勝ちしには幾何かの賞を與ふるが例といふに、駿足もてるはわれ劣らじと美さを盡しつ、とりわけ、今年は豊年のいきり強ければ、小供心に行きても見たけれど繼父が大眼玉に睨まれて其れもならず、悄然と庭に出て、あゝと溜息、われともなく裏口の方に行けば、實父の時より飼馴れし鬼黑といふ逸物の黑馬、年年の競馬にも加りて一度も輸をとらず、丈は七寸を越えて耳はそぎ竹の樣に天に向ひ毛なみ、美麗きは天鵞絨をあざむくばかり、古昔の磨墨もこれにはと人々呆

る丶程なれば芳松も二なきものと愛で丶、小馬の時より遊馴れたるを心なき、畜類もわれをいとしがる主人と知ればか、格子より顔つき出して一聲高く嘶くに、おゝ草が欲いか今やるぞと、そこら探して一摑、貴樣も明日はでるんだのう、俺は羨いやと馬の顔つれづれと見て、父樣が生存てる時分は競馬にも一緒に行つて勝つて嬉く歸つて來たのだけれど、去年の春からは面白いともないや、朝も早く起されて働かされていぢめられてぶたれて泣かせられて、貴樣と野良へ草刈に行く時ばかりが嬉くつて、雨の日にお太陽樣の顔見る樣な氣持のするばかり、と涙ぐみて、父樣と母樣は酒を飲んで美味がつて奥に居るが、俺は此寒天に此襤褸着物一襲ぎり、腹がすけばとて澤山たべるとは出來ず、遊びたいとて遊ぶとは出來ず、朝から晩まで抓られたり蹴られたり、其れは小供なれば遊びたいともある、大人の自分達とて遊びに行くではないか、一日の内に一時間や二時間遊ばせたればとて何でもないとなるに競馬見にといふたればとて此樣な疵、とあとさきなれど口惜さを果敢なき馬に語るあはれさ、ほつそりとせし腕に眼を拭ひて茫然と的もなく凝視れば、昔の面白かりし樂しかりしと、さま〴〵に思ひ出されて、一昨年父樣と茸狩の歸りに、有山の鮨を食べて甘かりしこと、隣家の仙ちやんと芝居見にいつて氷を食べて涼しかりしと、父樣の懐中に抱れて寢たと、あれもこれもと憂きと少しうすうなりて魂ふわ〳〵と脱出しかと思へば、耳根近鬼黒の聲、はつと駭けば身は馬小屋の柱にもたれぬ。

（下）

留守をよく守るんだぞと例の大眼玉にぐつと睨まれてちやら〳〵と着よそほひていで丶行く母と繼父と、可愛い鬼黒との後影をつまらなく口惜く見送つて、日も高く昇りたるに自宅の前を通る人のぞろ〳〵と羨しけ

れば魂ははや競馬市に走りて、兩方の足むづ〳〵と、えゝまゝよ叱られたらば叱られた時、ぶたれたらばぶたれた時なり、かまうものかと胸をすゑて、小さな藁草履すた〳〵半ば破れしを穿いて、小遣とてもなければ何も買ふとは出來ねど、只鬼黑が今日の働振見たくふいとばかり出はいでたれど、流石に迹も氣にかゝれば見かへりがちに二三歩、鎭守の杜が近くなれば、家の方が遠くなりて、何とはなしに心とがめて、いつそ廢べきかと心弱々となつて、えゝこれではと踏出すにいつか鎭守の杜あとになり、畦路も六つ折れて指すかたやがて近うなれば、心も次第に浮きたち來て、家のとは忘るゝともなく鬼黑の有樣に心移るに、足も進み早くて、遙かに人の動搖も聞えぬ。もうぢきだ〳〵、ぢきに鬼黑のあのずつ志りとした勇い强い身躰を見られると只嬉く辿るに、わが後邊に人ありて我馬の名を呼ぶなり、振かへれば知らぬ人ながら、今年も鬼黑が出だそうな、彼奴には有山の鹿毛も一目おくわさ、一昨年も去年も一と來てゐるから番附は東の關、今年のてば横綱となる極りとは傑いものではあるが、惜いとには那左五平の慾かきにあれ程の馬持たせて置くとだぞ前の吉五郎はずなほで正直で、人にも好くはいはれて、馬もいゝ主人をとつたとはやされたが、解らぬは秋の空ばかりではないときくに芳松、嬉いやら悲いやら父の名の吉五郎今更に戀しくなつかしく、茫然として歩めば、いつか、人群近々と耳を打つに、杜蔭を透して數千の群集蟻の如くつどひたる間を人と馬といさましく走る見ゆ。

さま〴〵の馬の名呼びて、既數番のあはせは果てつ、殘るは關脇のまさご、鞍馬、小結の武藏、芦毛、大關の鬼黑、鹿毛、是を今日の觀物ぞと人々言罵るに、見たくて觀たくてたまらねど、三尺には少志高けれど四尺には足らぬ身長の前に前にと人の山、十五二十重に

ふさげられて見るとはならず、如何したものと考へこめて、既小結の勝負もすみ、關脇も鞍馬が勝を讓りあふ、其れならば次は可愛い鬼黒の番、觀たいなあとあせれど其甲斐なく、向上る樹の上にはとりつきて觀るもの下と逢はねば、是ではと志よげかへり、切角出て來てなにもならず、其上に叱られでもすれば馬鹿な話つまらぬ／＼と打かこつ耳のほとりに、東、鬼黒、西、白鹿毛と呼たつる聲、相撲の様に胸どつきりと涙うちて小さなる心亂るゝに、とりわけて群集の掛聲、亡き實父の頃とは變りて、白鹿毛にばかり多ければ心もとなく、のびあがれども甲斐なく、えゝ／＼と齒咬して足ずりして、今年勝てば横づなになれるものを、なんでまけて堪まるものか、とわれと我頭をなぐりて、よろ／＼と前の人の腰にぶつかる途端、わーつとあぐる人人の聲、たゞとならぬ四邊のさまにぶる／＼と肉動きて右の方に一足進めば、鬼黒が暴れ出た、逃ろ／＼と數千の群集、黒潮の如くなだれをうつて、右往左往左五平さんが落された。踏れた。死んだ。と罵る聲、芳松夢心地、あてもなく人の逃ぐる方へにぐれば、砂ぼこり濛々と立ちこめ、そこらにならべし屋臺店、一文商の菓子などくつがへりて歩みもならぬ後邊の方に嘶く聲は聞馴れた鬼黒、見たい／＼と思ひに思つた鬼黒の聲、怒つたればとて我れには恐怖なき鬼黒と足踏止めて身をよぢれば、あはひ遙に隔りて、此方にむいて狂ふはそれよ、黒光りの頸毛、鬣、はせちがう群集のなかにあの姿の勇ましさ、雄々しさ、强さ、と見るまに、間しだいに近くなれば怺へかねて走せいだす。あれ／＼と人の叫ぶを耳にもかけず鬼黒かと怖氣もなく抱きつけば、迅雷怒激の勢するどく、右に左に狂ひし馬の怪くもなよ／＼と前足揃へて一息はつと鼻嵐白く風に亂れ、長くいばゆる聲空に響きぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

あはれなる芳松が家は艶さげて藥くさき人の出入に陰氣となりて、一月二月三月四月目の中旬頃、人は田植にいそがしきに涙も降らぬ葬禮を出して、翌る年の盆前には鬼黑の名も西におちしかど、芳松を乘せて嘶く聲は有山の原に勇ましく響きぬ。

（完）

雜録

女子と飜譯の事

國木田哲夫

この頃、或年若き婦人が余に書を寄せて、小說家たらんと欲するには奈何すべきやとの問を爲して答をもとめたれば、余は直に小說を作らんよりも寧ろ飜譯を事とせよとすゝめたり。これには余に兼ねての持論あることにて、曾て婦人新報紙上にても論じたることあり余は左に數個の理由を述べて益々これを主張せんと欲す。

一 世間には、婦人の身として文學に關係せぬ者ぞ、生意氣の至なりなどの暴論あれども、これ一には時勢に通ぜぬ論、二には婦人を誤解し愚弄するものゝ言草といはざる可からず。勿論、以て相手にするに足らざる也されど余は斯る暴論者すら多少の同意を表すべき筈のことを飜譯の業なりと信ずるものなり。

余がこゝに飜譯といふは決して純文學の上にのみ限るにあらず。政治、經濟、宗教は言ふも更なり其他百般實用の文字を悉く包括して言ふ也。概して言へば我國未だ飜譯の業頗る盛ならず、殊に婦人の飜譯者に至ては純文學の上に於て、故若松しづ子、小金井きみ子の兩女史の事を舉げ得るに過ぎず。未だ婦人にして政法の書、宗教倫理の書を飜譯せしを聞かざる也。

然らば我國の婦人未だ曾て語學の教育を受けざるかと言ふに決して然らず、殊に彼の女子教育に尤も重きを

置くミッションスクール(基督教傳道學校)及び之れに類する女學校の如きは其課目の大半を語學に充つるの觀あり、決して語學の教育無しと言ふを得ず。而て其結果は如何と見るに、在來の經驗に依れば上出來の者が僅に宣教師の通辯に過ぎず、其他は一度校舍の內を出でゝ家庭の人となるや、いつしか讀本一つ讀めぬ次第となりて五年七年の勉強も何の役に立たず終はるが多し、かるが故に此頃に及んでは女子に語學の教育は無用の長物なりなどいふ說も起りて一應尤もに聞ゆるに至りたることこそ是非なけれ。

されど開國進取を國是となす今日の我國には、女子の語學決して無用の長物にあらず、將に大にこれを利用して男子と共に國運を開拓すべきなり。則ち利用とは翻譯の事なり。

勿論翻譯の事、決して容易のものにあらず、而もこれを著述に比ぶれば難易同日の論にあらざることは言ふまでもなきことにて、先づ英なり佛なり獨逸なりの外國語に通じ、和文に熟すれば資格の基礎は成れりと謂て可なり。但し彼の純文學に至ては一語一句の末をも苟且にし難く、且つ多少の感興の之れに伴ふを要するが故に男子と雖も容易に手を下さずと雖も、これすら若松賤子女史の如き小金井君子女史の如き、其成功著るしく男子又た及び難きものあるなり。まして育兒家政の諸學に至ては女子ならでは叶ふまじき事あるべし若し夫れ政治經濟等、尤も男子の學ともいふべき者と雖も、女子にして多少の知識を此等の上に養はゞ、これを翻譯するに當て決して著述の如き困難を覺ゆる者にあらず。而も我國今日の時勢に照らせば、彼の生なかの著述よりも泰西各家の著を翻譯すること寧ろ文明進步の上に大効あるに於てをや。且つ今日の所謂ゆる著述と稱する者と雖も、泰西名家の著書の燒直し多きを見れば、女子が奮勵して純全たる翻譯に從事するこ

とは、彼の宣敎師の通辯たる功に百倍すべきや疑ふべからず。

今、假りに純文學の飜譯の上に就てのみ言ふも、自家の著作となれば、觀察をも要し、閱歷をも要し、天來の感興をも要し、連續せる時間をも要し、時には旅行をも要し、時には孤棲をも要し、更に天才なるもの無くては叶はず、これ多數の女子の身の上には決して望むべからずと雖も、飜譯の事はこれと大に趣を異にするものありて其性質は別して機械的なるが故に餘暇を偸んでこれに當り、今日一章を譯し、明日一節を譯すとも、効果の上に左程の影響あるべからず、又別に天來の興なるものを待つに及ばず、興を失ひて筆を投じ心の琴線再び鳴らざるを嘆つにも及ばず、たゞ精を盡し氣を皷して忠實に從事すれば、一代の名著の飜譯も自から成就すべし、著作となれば既に自信の上の事ゆへ、行文の舛正を知人に乞ふも可笑しな者なれど、飜譯文となれば字句節調の如何はこれを其筋々の長者に正しても左までの事にあらざらん。故思軒君がユーゴーの「探偵ユーベル」を飜譯するに當りて最後の一句の飜譯に苦心し、これを文壇知名の諸君に問ふたる事は當時の國民之友紙上に現はれて、世間は寧ろ一佳話として傳へ居る程なり、此等の點より見るも、女子が飜譯に從事することは、第一、良人ある身の上たることを妨げず否な却て良人に相談し其注意などを請はゞ便利多かるべく。第二、子供あることを妨げず餘暇を偸みて從事し得るが故に。第三、觀察をも旅行をも要せず、一室に坐し、机上に一冊の字引、一冊の著書あれば事欠ぐまじく、而して其結果を言はんか、小金井女史の「新學士」、其他數種、故若松賤子女の『小公子』其他を見ても知るべし、一葉女史は例外として其外に隨分何々女史と號する小說家も現はれたれど、能く前二女史の飜譯が及ぼしたる美文上の効果に及ぶべきもの

あるか甚だ疑はし。

先づ効果の如何は別問題とするも、女子にして飜譯に從事せんか、勞苦多き丈けに其樂の上品にして飜譯者先づ第一に利益を享くることと甚だ大なるべし。

亞米利加婦人が、佛、獨、魯等の飜譯に從事するもの少からざる由を聞きしが、我國の女子又た其盡すべき公共の事業少きを嘆ずる無く、志あるものは此事に着手すべきなり。語學を學ぶ者は其目的の一半を此事に注ぎて兼ねての用意を爲すべきなり。文學に志すものは暫らく自家の著述を思ひ立たんよりは宜く此事を企つべきなり、企てゝ難き事とも思はれず、校舍にある時既に志を立てなば、其語學を厄介にし其實の持腐を嘆ずるにも及ばで、却て今日の我國を利し國民を導きて益〻改進文明の途に向はしむる事に就ては其効果意想の外に多かるべし。

余、此事を以て、彼の年若き婦人に答へければ、婦人更らに問ふて曰く、妾に和文の能は多少あれども外國語の素養殆んど無し、妾若し今より志を立てゝ飜譯に從事せんと欲するまでには前途幾年の準備を要すべきと。余答へて曰く、ナショナル讀本にすら若しこれを巧妙に飜譯せば隣人に示しても面白かるべき佳話少なからずされど前途の年數を問ふことを要せず、歳三十にして良人あり子供ある時、一個の名著を譯し得るも亦た大に可ならずや。一葉女史は獨身者なりき、小金井女史は小金井博士の夫人、故若松賤子女史は巖本善治氏の夫人なり、若し夫れ、子女の教養既に終はりて頭髮漸く白からんする時に及び、兼て愛讀の名著を飜譯せんと企つるが如き、余は猶ほこれを晩しとせざる也と。

女子の書簡文 附木村重成が妻の事

伊那六良

世の開明におもむくにつれて、女子の教育もやう／＼

盛りになれること、今日の如きは、古にもなきことにて、紫式部、清少納言などの輩出せし時代にもまして都もひなもおしなべて、この教育のあまねく行はるゝは誠に喜ばしき限なり、かく女子教育は漸次に進むものから、たゞ一つ欠點を感ずるは、女子の書簡かくことなり。ふみかくことはまことに容易なることの如くにはあれど、つら／＼世間を見わたすに、すべて女子の文章は猶ほ幼稚なる域にあるなれば、その不完全なるもせん方なきことにはあるなり。さりながら苟も心あるものは、よく／＼この處に意を注ぎてはしたなき筆のすさびも、後々まで笑を殘すことなからんことを願ふべきことなり。

書簡文の躰裁につきては、大方の學校の教師すらも定まれる見識を立てたるもの極めてすくなきことなれば世間の女子がものする書簡文のつたなきことも、あながちに責むべきことにはあらねど、何事も進歩のすみやかなる今日なれば、いたづらに古きしきたりの文脉に安んじて、文法語格なども注意せざらんは、これまた歎かはしきことならずや。

されど、高等女學校又はそれ以上の程度の學校の作文科、殊に書簡文科の教授を見るに、またあながちに古き格になづみて、耳遠きことばをつらねたるが多くて、實用にはいかゞあらんと覺ゆるものなきにあらず。歎くに勝ふべけんや。

つら／＼おもふに、今日の弊は、書簡文の摸範とすべき作例の乏しきと、語格文法のあまりに散漫に看過ぐされたると、又この語格文法のあまりに窮屈に應用せられんとするとにあるが如し。語格文法のことは、それにつきての書籍（文法書）に乏しからじ。おのれは、玆に古人の作例の佳なるものを擧げて、大方の婦人の參考にそなへんとす。

請ふ左の一文を見よ。

木村重成の室の、その夫におくりし遺書

一樹の蔭、一河の流れ、是れ他生の緣と承り候ふにこそ」、そも、おとゝせの頃よりして、偕老の枕をなして、只影の形に添ふが如く思ひまゐらせ、思はれまゐらせ候」この頃承り候へば、この世限りの御催(大坂の旗擧のことをいふ)の由、蔭ながら嬉しく存じまゐらせ候」。唐の項王とやらんは、世に猛き武士なれど、虞氏のために名殘を惜み、木曾義仲は松殿の局に別れを歎きぬとやら」されば、世に望み窮りたる妾が身にては、せめて御身が御存生のうちに最後をいたし、死出の道とやらにて待ち上げまゐらすべく候」。必々、秀頼公が多年の海山の御鴻恩御忘却なきやう賴みあげまゐらせ候」。あら〱めでたくかしこ。

これ、當時十八歲なりし婦人が、夫の義氣を勵まさんが爲に、みづから刃に伏して死なんとせるきはに、夫に遺りし書にぞある。冒頭直に一樹の蔭、一河の流云々と筆をおこしたるところ、やゝその趣を得ざるが如しといへども、急速怱卒のをりから、直に胸臆をのべんとする、實にかくの如くならざるを得ざるなり。本文中畫を施したるは文の段落を示したるにて、深く味ひ見るべし、一段は一段より緊密になりて、されど迫らずたゆまず、切なる情緖をのべ、已みがたき義を勵まし和漢の故事を引き、過去を顧み、未來を望みて、終にこの自然に渾成せる消息文をのこせり。彫琢と推敲とを經ずして、しかも瑕瑾なき完全なる文章を得ること、これ實に書簡文に貴ぶところ。この文の如きは、烈女のおもかげ、凜として千歲のもとに生色あるものといふべきなり。讀者よく〱この文の布置と措辭とを觀よ。至誠を以て輕々に筆を下し却りて、ゆたかなる至情と犯すべからざる貞操とをおもひやることを得ん。消息文のかくの如くにして、はしめて體を得、用

をなすものといふべし。もしこの文、强ひて備はらんことを求めば、更に文辭を婉曲に温籍にせまほしきなり。

文は至誠あるを尙ぶ。殊に書簡文においてしかりとす大方の女子、もしこの文の心を以てその心を寫さば、一片のはがきといふとも、かならず大に人を感ぜしむるものあらん。又この躰を以て、其の文となさば浮華に陷らんおそれなからんか。

因によりて、重成が妻のことすこしいはん。重成は長門守とて、豐臣秀賴に仕へて無雙の忠臣なりき、大坂の冬の陣の終るとき、秀賴の使者として家康の陣におもむき。擧動應接從容として、君命を全うし以て此の關東の老雄をして嘆稱措かざらしめたり。時に年二十。妻は眞野氏にて豐後守賴包の女なり。容姿うるはしく、貞淑純良比ぶものなかりしかば、深く重成に愛せられたり。年十六にして重成に嫁せしが、いくばくもなく大阪の役おこりぬ。大阪の滅びんとせるとき重成物食はずして氣色すぐれず。妻性聰明にして思慮も亦凡ならざりしかば、中外の動靜何くれとなく探りて、重成に知らせたり。されば、重成にいふやう、君が去年の今福の一戰（關東勢をふせぎて勇戰せしよいふ）こそ關東五十餘萬の師に愧ぢたまはざりつれば聊かは慰むるに足りなん。されど、かはりやすきは心にて、果しがたきは死なり、死ぬべきに死なざらんは死なんにまさる恥あらん。君の物まゐらざるは、妾が思ひ得ぬことなりといひしかば、重成笑ひながら、五穀胃に入れば、二十四時を經てはしめて消化すべし。されは、われ穢れき物を斥けて、潔き心を出さんばかりにこそと答へぬ。妻もさらばとて、欣然として退き前の書した〻めて、寢室に入りて自害して果てぬ。時に年十八まことに得がたき一對の伉儷にこそ。

あはれ、今の世、物換り、星移りて、世態人情た〻三

十年の昔にすらいたく異なりたれば、武士道といふものは更なり、女子の道さへ、ひたすら輕きかたにのみなり行きて、貞操などいふことは、いたく失せたるが如し。今の時勢は古の時勢にあらねば、婦道のおしへも亦大いに古へに異なるべきは、當然のことなれど、男子の出處進退の道を重んずると同じく、女子も非常の場合に遭ひては、從容として迫らず、よくその終を全くせんことは、この木村重成の妻の如くにあらんことをつとめざるべからず。非常不祥のこと、われこれをいふことを憚るとはいへど、かゝる場合は實に一度ありて、二度なきことなれば、女子たるものは、深くこゝに鑑みて、輕躁狼狽して、悔と恥とを千歳にのこさゞらんことを勉めざるべからず。平生の修養實にこゝにありとこそいふべけれ。

巴里見聞記

て、ふ、生

此はリ、ヤンベルの米國發刊レディス、ホーム、ヂヨーナルに寄せたる歐洲漫游記の一にして觀察の緻密なる所論の妥當なる吾人を益する蓋し少なきにあらざれば筆を更へ語を改めて左に譯出することゝなしぬ、

日の本の櫻の涙に纜解きて、三歳にあまる旅衣、露けき袖さへしぼりあへず、今は當地に足を留めて、セエヌの河に暫し異郷の月を弄び居り候。風來風去の游子なれば到底詳しき觀察は相成りがたきも、日常街衢の見聞に就て聊か申上ぐるところ有之べく、御笑覽下され候はゞ幸甚。

人に會ふてはじめて起る疑問は、此の人は如何なる人なる乎と云ふことにして、國に入つてはじめて起る疑問も、矢張り此の國は如何なる國なる乎と云ふことに

御座候。小生も巴里に來つて劈頭第一此の問題に惱まされ候、而して今日までに思考致せし結果、漸く得たる此が答案は次の如くに御座候。即ち巴里とは、外部は非常に美しくして、內部の頗る汚なき處。日用品の殊の外高價にして贅澤品の反つて安値なる處。雲なす群集の押し合ふ中を無作法にも突き退け突き飛ばして行くかと見れば、直ちに振り返りて慇懃に會釋し去る處。銀貨を一つ落したりとて一里も戻つて索むるかと思へば、一椀の珈琲に二圓三圓を投じて顧みざる處。町並の正しき處、道路の淸潔なる處。料理のうまき處、芝居のおもしろき處。美人に迷ふて魂の拔け出す處、欲しきもの澤山にて財布の空虛になる處。刺ある薔薇の花の如き處、白く塗りたる墓の如き處。是れぞ即ち世界の都、交際社會の女王たる巴里に御座候。

然れば或る人は一度行いて直ちに懲り／＼して逃げ來り、或は龍の都の浦島が子の再び歸るを忘るゝも有之候。蓋し逃げ來れるは其の裏面を見たる人にして、止まれるは其の表面を見たるもの、巴里ほど表と裏との差違甚だしきものは無御座候。

妻を携へ子を伴ふて彼等が池畔に逍遙するを見るとも、決して彼等を以つて風暖き花の園生の人とばし思ひ給ふなかれ。語を卑ふし禮を厚ふし君に何をか謀るありとも、決して之を信じ給ふなかれ。彼等の表が美くしければ美しきほど、其の內部は醜きものなることを斷言致し候。彼等は常に憐恤を表することを務むれど、未だ賊に憐恤の何物たるを知らず、彼等は好んで弱きを助け强を挫けども、未だ嘗つて義俠の義の字だも解せざるなり。彼等は宗教を有すれども德義を有せず、彼等は信條を有すれども信仰を有せず。吾人に若し人の心を解剖するの力あつて、巴里人士の胸臆を拆くを得せしめば、其の中には必らずや二種の相反對せる筋肉の、互に其の組織を異にして存するを發見致

すべしと存候。彼等は一人にて不思議にも二人の仕事を致し候、而かも其の仕事の全く反對致しながら決して衝突致すことなきは、實に不可思議千萬の事に御座候。巴里人士は實に世界解すべからざるもの〻一に御座候。彼等は郊外に於ては鐵道線路の間際まで耕して、滊車は恰も麥の上を走るが如き觀あらしむるにも係らず、市中にはパレエド、コンコルの如き廣大なるものを存し候。此の一事優に佛蘭西人民の氣質を表明して餘りあるべく、亦以つて巴里の巴里たる所以を知るに足るべしと愚考仕候。

巴里にて比較的尤も高價と思はる〻は飲用水に御座候、時としては一杯の水葡萄酒一瓶に勝ることあり、貧民の如きは一生金明水と申す樣なるもの〻味を知らずして過ごし候。夏の夕に浴みしはて〻、夕顏棚の下涼み、裏の井戸から汲み立ての水に薄荷をおとしてグッと引つかけると云ふが如きは、巴里にては夢にも思ひ及ばざる事に御座候。小生の目下下宿致し居り候家にては毎日一升幾何と申して水を買ひ居り候。人工の愈發達致し候處に自然の愈狹められ候は又然るべき事かと存じ候。

其の他鷄卵、牛乳、肉類等うつかり買い調へ候時は、後に大恐惶を金庫の中に起こし可申、國元へ電報かけて爲替取り寄せ等の騷ぎをも隨分なしかねまじく候。されど絹の襪、毛織の手套、さては食卓の珍らかなるもの等は、格外廉價にして、小生は始めて求め候時には番頭が間違へたるにはあらずやと思ひ候。絹が安くて木綿が高き事故此が日本ならばと思ひ候ことも度々有之候。米國解纜の砌、捨て〻でも仕舞ふかと思ひ候メリヤスの手套が、今は餘程の洒落れたものに相成り、天鵞絨の飾りをつけて毎日用ゐ居り候。されば先日行李の中より夏のためにもと存じて藏ひ置き候縮の單衣を出して、宿の老婆に洗濯を賴み候處、老婆はアキレ

た顔をして小生を見つめ候。當地にて木綿物を輕々しく洗濯致させ候は餘程の贅澤に御座候。夫れより猶御可笑しかりしは着都早々、小生が一日置きに入浴致し候ひしに、例の老婆の非常に驚きたる樣子にて、何處か御病氣にはあらせられずやと申したる事に御座候。當地にては餘程贅澤な人にても入浴は月五回か六回位にして、大抵は月一回、仲には年に四回などと申すも有之候。小生も近頃は此に感化せられて毎週一回と相定め申候。

先日薄暮例の如く街上散歩致し候處、ある商店の窓に於て小さき皿に盛られたる美しき一個の黒石を認め候、何物ならんかと存じよく／＼見極め候處、豈に計らんや通常一樣の石炭に御座候ひき。誠に虚言の樣にて人を馬鹿にしたるが如けれど、實際正直正銘現金懸直なしの石炭にて、ストーブの上の置物に用ゐ候よし、巴里にて石炭の貴きこと是にて御察し下され度候。或る時貧兒兩三名芝生に座つて何か歌ひ居り候をツト立ち聞き致し候ところ、「石炭買ふより死ぬのがましよ」と申し居り候。實際彼等下等社會に於ては然るべきこと乎と存じ候。

斯樣に種々のものゝ高價なるは必竟、玉子、胡蘿蔔、大根に至るまで、巴里に輸入致され候ものには悉く税を課し候故に御座候。此の市税は實に莫大なるものゝよしにて、此の莫大なる收入あるにより道路も清潔に致され、公園も美しく致され候ものに御座候、されば巴里市民は自分の口を干して町を飾り居り候ものに御座候。其の代りドンナに雨が降り候とも巴里には停春氏の所謂臨時沼澤と申すやうのものは無之、小兒が轉んでもなか／＼安倍川などには相成り不申候。

結婚の事に就ては巴里人は實に驚く可き卑しき考を持ち居り候、彼等は女と結婚するにあらずして金と結婚致すものに御座候。小生が米國に滯在致し居り候時、

少女が金のために六十の老夫と結婚致し候を見て一驚仕り候が、巴里の結婚は之にも益して甚だしく候。從つて夫婦の間に暖き愛情と申す樣のものは無之、夫婦の間に愛情なき處に不義密通の行はれ候も亦當然怪むべきにあらざる事乎と存候。男女の間の非常に美しくして而して又非常に亂れたるは巴里に御座候。小生は自由結婚の終りは凡て斯くの如きに至るものと存じ候まゝ日本にては矢張り此れまでの如く、男女七歳にして席を同ふせざる主義を守られん事を望み申候。

當地にて少しく交際社會の狀況に通じ候人は、大概各紳士方が結婚のために如何ほどの金を費し候か、又その媒妁人は如何程の手數料を受取り候かを知悉致し居り候。通常某夫人は幾何金にして某子爵は幾何圓なりと申し候は、決して其の人の財産を申し候にも無之又其の人の收入にも無之、皆結婚の相場附に御座候。人身賣買は一大罪惡なりとて黑奴開放を叫びし人々の、實際自身が現に人身賣買を致し居り候は、何ともイヤハヤ申上ぐるに語なく候。

虚言か眞か保證は致し申されねど、面白き風說有之候。そは近頃米國より一少貴婦人遊覽のために巴里に來られ交際社會へも時々御出でなされ候ところ、誰れ云ふとなく此の婦人は亞米利加にて屈指の金滿家の秘藏娘なる旨風說致し、それよりは貴公子連中大騷ぎにて、其の婦人のために園遊會を開くやら舞蹈會を催ふすやら、仲にも熱心なる六七人の公子達は晝夜旅館に詰め切りと云ふ有樣にて、夫がため他の婦人の間には一大恐惶を來し候よしに御座候。然る處此處に尤も御可笑しきは右六七名の公子達は、或る日某處に會合して、七人各自に力を盡さんよりは誰か一人此の中より抽籤にて夫の婦人を射落すことに勤め殘り六名は之を輔けて、やがて首尾能く結婚したらんには財產は之れを等分するに如かずとて其の中にて尤も好男子たる某子爵

撰に當り候よし、何にせよ巴里の公子が腕によりをば掛けたることゝて、遂に其の婦人も說き落され、愈亞米利加に歸つて結婚式を擧ぐることゝなりしかば、他の六人は旅費を調へるやら旅裝を輔くるやら、總がゝりにて米國へ送り出し候處、二月ほど立ちて右の子爵は單身飄然と歸り來り候、能く承れば夫の婦人は左程財産ある身分にあらず、子爵は反つて之を養はざるべからざる場合に立ち至りし故、他の六人の財産分配等の事は思ひもよらざる事なりとて、はては交際場裡の一笑話に相成り候。

巴里人士が結婚に就ての態度は實に斯くの如きものに御座候。

（未完）

寄書百珍

最大の幸福

京都　山基うめ子

楠氏は人にて造りたるものにて、忠義をなすの道具なり、とはある無邪氣なる幼童の言なるが、その當今の器械的敎授の弊害を省みるに足る、妾はかゝる偏狹的國家愛國論者の多き社會を離れて、今より紅葉ふみわけなく鹿の山奧に入りて無邪氣なる兒童を對手とし妾が理想通り自由に感化薰陶せんこそ願はしき望なれ、此の境遇は妾の最大幸福と思ふ所なりとす。

記者曰く、此は少しく敎育といふものにつきて羈束を感じたる厭世者の言に似たり。ことさらに山の奧ならでもと思はる。

下總　荒川梧陰

何事も自ら快樂なりと思ふ事程快樂なるはなく何事も自ら幸福なりと思ふこと程幸福なるはあらず兎角陰氣にして世を味氣なくのみ思ふ者は花を見るも月を見るも絕えて樂しと云ふこと無く却て無常哀感の種となる

のみ盲人が芝居を見るより猶つまらぬなり然るに何事も自ら樂しと思ふ人は見るもの聞くものにつけ何にても樂からぬはなし余は嘗て所用あり大雪を冒して隣村まで出發せしことありしが家人の心配もかまはず自分は平氣にて尺も積る雪中を踏破すれば滿目皚々の壯觀に冷めたさをも打忘れ雪に伴ふ種々の事共思ひ續け行けば先方にて樣々と勞はり呉るゝも嬉しく歸來又家人に誇るも愉快なりし若し冷めたしつらしなど思ひたらんには一歩も踏み出さるゝものならんや盤根錯節に遭遇すればそれを斷り拔けるが如何にも愉快に己れ貧困なれば又其貧困に安んずるの道もあり禍を轉じて福となすものなり世人若し最大幸福者となるの道を問ふものあらばそは幼きより種々の難行苦行に當たり酸いも辛いも嘗め盡して堅忍不拔の志氣を養ふにありと答へんかゝる人は如何なることに遇ふもつらしとも悲しとも思ふことはなかるべくこれ最大幸福の人ならずやそが上に猶少しなりとも風雅の嗜みありて自然美を愛し人工美を愛することを得たらんには天地の間に開展せる森羅萬象は皆吾れを喜ばしめ恰も年百年中芝居見物にてもしつゝあるが如けん。

記者曰く、精神と身體との健全相伴ふが最大幸福なりとの說蓋し幸福を心のありかに求めて物と事との上にもとめず、こは最も得易くてまた最も得がたきものならんかし、たゞかくあらば何人も幸なり。

社會

◎女學校　女子高等師範學校は規則を改正して文科理科の二となし、修學年限は從前の通四ヶ年なれども各科何れも一層の高尙に精深なる程度にて敎授するととなり。生徒は年齡十七年以上二十二年未滿にて夫を有せず師範學校女子部或は修業年限六ヶ年の官公立高等

女學校卒業生及び之と同等の學力を有するものに就きて、地方長官適當のものを撰擧し、更に試驗の上撰拔入學せしむるものなるが、他に一般より募集せらるゝ方法もあり、教育學及教授法等を專修せんとする者の爲には新に硏究科を設け目下已に家事專修科及び保姆練習科の設置並に撰科の規定などもありて、追々諸般の擴張改良を圖ると云ふ。京都の高等女學校は擴張し、信州松本高等女學校の新設置あり、米澤もまた高等女學校設置の縣會可決あり、大阪高等女學校は生徒の增加を視、其他女學界の消息皆隆昌に赴くの事多し、一旦反動の爲に稍沈みたる女子敎育も、漸く社會の必要といふ上より榮え來るとまことに喜ぶべきなり。

◎瓜生岩　女は福島の人、明治の女傑、慈善の泰斗ともいふべき婦人なり、その堅き意志、雄々しき心、畢生七十餘年間粉骨碎身して、普く賴りなきの孤兒を救ひ、依るなきの貧しきものを憐み、まことに天下後世の龜鑑たり摸範たるべきの婦人なるとは人の旣に知るところなるが、歿後數年未だ此人の傳記事業を記せるもの無し、此頃赤十字發行所に於て傳記出板の擧ありといふ、蓋し有益の書たらむもの。

◎篤行の男女　岡山縣久米北條郡大倭村大字神代岡本七郎(二十五)は半身不隨の老母に侍して孝養怠らざりしをもて、山梨縣西山梨郡清田村廣瀬ハツは姑及夫の疾病に侍して看護懈らず、其死後遺兒を就學せしめ農事に精勵なるの故を以て、羽後由利郡東瀧澤村渡邊七藏妻カヨは孝貞の廉を以て、栃木縣栃木町字嘉右衛門の中條市太郎は孝、妻トヨは貞、共によく貧困中に家庭の平和順良倫少きを以て、山口縣佐波郡佐波村字佐波合の保村房藏の長女ミチは五歳の小兒ながら父母の貧困を見かねて自から小さき籠に薪を拾ひ父母の助をなせるの孝行によりて、或は郷黨の龜鑑となり、或は縣知事の賞する所となれりといふ。なほ繼母の龜鑑たる

べきものは、土佐國香美郡美良布村岩田初吉の妻貞於は先妻の男繁吉に對し、おのれの生子お何のありて後も鞠育撫養まことに至らざる所なく、繁吉が十一歳になれる今日、よくそれをして學業の成蹟をよからしめたる如き、家庭の和氣藹然たる如き、心がけの美德感ずるに餘れりと傳へらる。世に篤行の婦人まことに少からざるなり。吾等は此等篤行婦人の家庭のあり樣、兒女敎育の狀態、父子兄弟姉妹の關係などを一々細かにしらべたらむには、必ずその深く由來する所あるべきを信ず、善き花は善き種より咲き、善き實は良き根より生ず、孝貞といひ、篤實といひ、順良といひ、はた大賢婦、大偉人たるもの皆その家庭の裡より來る、その家庭をくはしく知らむとは大なる利益ならむ。

◎銀座街　油繪水彩畫、鏡等を賣る家に記者の知る人あり。近頃は古賢先哲の肖像を購ひに來る客多きより事の序に問へば、産婦あるが爲に産室に懸るなりといふもの五六人ありきといふ。胎敎の事今や漸く實行せらるゝは喜ぶべき事なりといふべし



森田思軒遺著
徳富蘇峰
山路愛山 校定

十二文豪
第十一卷

頼山陽及其時代

印刷中

十二文豪の『頼山陽』は、始め蘇峰氏の擔當なりしが、故思軒氏は平生山陽を嘆美し且つ彼に關するの研究多かりしが爲めに、改めて思軒氏に托しぬ。此に於て思軒氏材料を蒐集し、幾多の商量を費やし、其の研究の結果は、國民之友、國民新聞等に現はれ、裒然冊をなしぬ。されば頼山陽に關して、人の知らんと欲する所は、殆んど言ひ盡して餘薀なきに似たり。此に於て思軒氏の遺志を成さんが爲めに、蘇峰愛山兩氏校定の勞に任し、更らに卷末に添ふるに兩氏の頼山陽に關する論を以てし、茲に出版することはなしぬ。聊か未製品の憾なきにあらずと雖も　名工の彫刻は、其の半面たも、尚ほ全身を活躍せしむ。況んや其の時代を描き、其の交友を描き、其の家庭を描き、其の本領を描きたるに於てをや。今之を十二文豪中に置くも、或は壓卷となすの價値なくんばあらず。

發行所
東京市京橋區日吉町四番地
民友社

○小兒○はよく肥へて笑ひ顔の愛らしき筈のものなり痩せたる小兒は興味尠きものなり之れには彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸とを配合して飲み易く且つ味ひよく製造したる

スコット乳菓が最も適當なる食料にして忽ち肉を肥し發育を助くるなり●此の乳菓が滋養分に富むとは他に比類なきが故に虚弱なる人々は之れを用ゐて奇効を見べし

特に虚弱なる婦人は一度之れを服用せば忽ち健全なる身躰となること疑なし

○咳嗽及風邪○は病の初めなり、次に來るものは肺の衰弱にして身躰を痩せしむ、最後に彼の恐るべき肺病の萌芽を顯すなり彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸の調合物なるスコット乳菓は能く咳嗽及風邪を去り肺臟を強くして活力を與ふること實に驚くべし●●●此の乳菓の洪大なる滋養分が嬰兒、小兒及虚弱なる母親を益すること實に大にして、其味も至て滋味なれば喜で服用するなり

此の乳菓が精氣を增し滋養分多く最も効驗あるものなるは世界の大醫の擧て證明するところなり

○スコット乳菓の説明書御入用なれば横濱八十九番日本支那貿易商會へ此の雜誌にて御承知の旨御申越あれば無代價にて呈す



左の大取次所の外各藥舖にて賣捌き居れば御購求ありたし

横濱燈町	友田嘉兵衛
仝 燈町	鳥居德兵衛
仝 太田町	大川佐兵衛
東京本町四丁目	鳥田久兵衛
仝 室町	資生堂
仝 本町三丁目	鳥田忠兵衛
大阪道修町二丁目	小西儀助
仝 道修町二丁目	武田長兵衛
仝 道修町三丁目	田邊五兵衛
仝 道修町二丁目	田畑利兵衛
仝 道修町二丁目	福田清右衛門
仝 道修町二丁目	鹽野儀三郎

（明治廿五年九月十四日遞信省認可）
（明治卅一年二月十五日發兌）東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 株式會社秀英舍印刷